535
117

始

25.12.20

コ1014
け

早稲田大學
高等學院教授 佐久間原譯

マルサス人口理論

（第七版譯）

大正
14. 4 20
内交

早稲田大學出版部發行

535-117

譯者序

本書はマルサス人口論第七版の飜譯である。人口論の第一版は一七九八年マルサス三十三歳の時の作で、直接には主として當時有名であつたウイリアム・ゴッドウィンの共產的平等社會に關する意見に刺戟せられ、其のあまりに實際に遠い空想にして、到底實現の望なきこと、假令實現されても到底永續の望なきことを論破せんとしたものである。

而して人口論第二版は一八〇三年に出版されたが、其れが前版とは全く異なれる述作であつたことは、容積が約五萬言から二十萬言へ四倍に增加したことに依つて明瞭である、しかし其れは單に容積の問題ではなく、第一版が反對論の駁擊に急なるのあまり、著者自身第二版の序文中に認めて居る通り、多少一方に偏せる辛辣な批評であり、や、卒然たる抽象的論斷であつたのを改めて統計と史實、經驗と實證を論據とせること、人口增加の理論より發する必然的宿命的な結果は單に罪惡と貧困あるのみとの說に一歩を進め、人間の意志力に依る道德的自制を說き、救貧政策に關する意見を開陳して、倫理的に人類の將來に一道の光明と解脫の方途とを敎へたこと等の諸點に於いて、前の第一版とは全く異なる學問的の述作となり、今日より見れば

多少單純であるが、兎も角救世憂國の思索となつたのである。其の後一八〇六年に第三版を、翌年第四版を、一八一七年に第五版を、一八六六年に第六版――之れが著者存生中に於ける最終の版である――を出すに至つたが、第一版後約三十年、版を代へるごとに增訂改竄を之れに加へ來つたことに鑑みると、著者が如何に此の著作を愛したか、如何に之れに對する世人の誤解を恐れたかが明白であり、他面又著者が如何に敏感な學者的良心の所有者であつたかを物語るものである。

私の原本とせる第七版は Everyman's Library に屬し、第六版から長い附錄をのぞけるものであるが、予は更に該版中から吾々にとつてあまり興味のないノートの多くを省略した。更に又原書第二卷から三卷に亙り、かなり長々と記された東西古今に行はれる人口妨害に關する歷史的事實も、本書の歷史的價値の上からは重要な部分であるが、あまり大部になるから或他の部分と共に割愛した。私はいつか是等の部分をも飜譯し、本書と共に原著の全譯となし得る日の來らんことを望む。原文の適確、憂鬱、辛辣、輕妙、精緻は到底其の眞に迫ることを許さぬとしても、せめては其の議論の全豹を日本の讀書界に紹介するの愉快さを念ふからである。

人口論は「何人にも讀まれずして、凡ての人から罵られる書物」であると云はれる。予のテキストとなつた Everyman 版に序したるレートン氏の說に依ると、英本國でも此の書は讀まざる

讀者に依りて、却つて非難攻擊の的とせられると。日本の讀書界に本書を讀みし人は少からぬことと思ふ。讀まざる批評家の願はくはマルサスが憂國の警世の眞意を誤り解せざることを。

大正十四年二月二十七日

譯者識

マルサスのこと

トマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus)は一七六六年二月、英國サリに於ける父の所有地――ルッカリ(The Rookery)といふ――に生れた。父ダニエル・マルサス(Daniel Malthus)は相當の田舍紳士であり、文學哲學の方面にてはかなりの教養を持つて居たのみならず、ルソーと親交あり、其の遺言執行人の一人であつたと傳へられる位であるから、其の思想の傾向も又ほゞ想像が出來る。ロバートの幼年時代の教育は英國の上流社會に常に見るやうに家庭教師から受けたのである。而して此の教師等も夫れ夫れ皆多少すぐれた人々であつたと傳へられるが、後年マルサスが學問上に獨創的意見を立てる上に幾何の影響を與へたかは判明せぬ。恐らく彼は幼年時代より多くの英國少年に見るやうに、自ら觀察し自ら思索するの風を具へて居たものと察せられる。

マルサスは一七八四年、ケンブリッヂに入學し、四年にしてジェーザス・コレッヂ(Jesus College)を卒業し、後一七九七年に母校のフェロー(fellow)に選ばれた。又同年英國教會の牧師となり、故郷なるサリにて小さな教區をあづかることとなつたが、ケンブリッジ卒業後、父の

家に在る間も母校に通つて昔の研究をば繼續しつゝあつたものと見える。

翌一七九八年有名な人口論第一版が匿名で出版されたが、其れは An Essay on the Principle of Population as it affects the Future Improvement of Society, with remarks on the Speculations of Mr Godwin, Mr Condorcet, and other writers (將來の社會進歩に影響する人口理論に關する一論文、附ゴッドウィン、コンドルセ氏に其他諸家の思索に關する批評)といふ長い標題を持つて居るものであつた。而して此の書は英國の讀書界に異常の注意と驚愕と、而して同時に又誤解を惹起し、著者は早晩之れを訂正するのでなければ折角警世救貧の志も空しく水泡に歸すべきを感じた。かくてマルサスは人口論出版の翌一七九九年大陸に旅行して廣く資料を蒐集することとなつたが、當時英國は佛國と交戰狀態に在つたから主として北歐——瑞典、那威、フィンランド等を歴遊し、其の後アミアン(Amieus)休戰條約の隙に乘じて佛國と瑞西とを訪ふた。此の結果は一八〇三年に發行された人口論第二版の大增訂となつて表はれ、其の標題さゝ An Essay on Topulation; or a view of its past and present effects on human happiness; with an enquiry into our prospects respecting the future removal or imigration of evil which it occasions と改訂された次第であるが、こゝに興味ある一事は初め第一版に於いてマルサスが論難攻擊の大目的であつたゴッドウィンや、ゴンドルセ等の理想社會觀に對する

批評は大に其の紙數を減じ、人口理論と一層密接の關係ある歴史的統計的事實が大に加へられ、救貧方法に關する諸問題、殊に道德的抑制の義務に關する大文字に其の勢力を傾注せることである。かくて各版改訂增補の結果として、第六版に到つては小册子であつた第一版とは全く異なれる一大學問的著作となつた。原書六版第三卷第三章(本書第二卷第三章)に於いて、著者はウォレース、コンドルセ、ゴッドウィンの平等主義に關する部分は、既に其の興味の大部分を失つて居るし、其れに嚴密には人口理論の本筋とは關係のないことだから、新版には之れを除去しては何うかと或人から忠告されたが、彼等の平等主義に關する批評は、自分が人口論を書くに至つた機緣となれるものだから棄て去るに忍びないと辯解して居る。要するに人口論は三十年間、常に彼の腦中を來往した問題で、彼は生涯を之れが研究に獻げたと云つても過言ではない。

マルサスは一八〇五年結婚後間もなく、東印度會社の職員養成所としてヘイリベリ(Haileybury)に創設された東印度學校に近世史と經濟學の教授として聘せられ、一八三四年長逝するまで、此の位置に止まつたまゝであつたが、此の間グロート、リカルドー、ヂェームズ・ミル、トゥーク等當代一流の學者と共に一八二一年に創立された經濟學會の最初からの會員となり、或は一八三四年に創設された統計協會の最初の會員名簿に其の名を登錄した。

としてのマルサスは隨分辛辣を極め、貧民の自責を促すの志から出たのではあつたか

彼等に對して酷烈と思はれる意見も本書中に散見する。併し個人としては頗る愛情深く、卒直にして修養に富み、美しい人物であつたと傳へられる。又彼は彼の貧困の哲學に對する誤解から生れた一般世人の非難攻擊に對して少しも愚痴を訴ふることなく、天使の如く之れに忍從したといふことであるが、之れ自說が結局人間幸福を念ふ眞實愛世の志に出でたことに滿足し、徒らに夢に等しいはかない理想の社會を說くよりも、實證と經驗の敎ふるところに依り、苦い眞理と暗い將來に無智な世人を目醒ますことの、むしろ彼等を幸福に導く所以なるを自覺した結果であつたらう。

最後に彼の著作の主なるものとしては、人口論の外、次の數種を擧げることが出來る。

An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provisions, 1800.
Observations on the Effect of Corn Laws, 1814.
An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, 1815.
Principles of Political Economy, 1820.
The Measure of Value stated and illustrated, 1823.
Article on Population in Encyclopaedia Britannica, 1824.
Definitions in Political Economy. 1827.

マルサス人口理論（第七版譯）

目次

譯者序
ロバート・マルサスのこと

第一卷 人口增加に對する種々の妨害に付いて……一
第一章 人口論とは何ぞ。人口と食物との增加率……三
第二章 人口に對する一般的妨害竝に其の作用する方法……一三
第三章 人口統計に及ぼす流行病の影響……二三
第四章 一般的結論……三七

第二卷 人口理論より發生する弊害に關し社會に提

供され或は流行せる種々の制度と方法……五七

第一章　平等主義論……五九
ウォレース――コンドルセ
第二章　平等主義論……七五
ゴッドウィン
第三章　平等主義結論……九四
第四章　移民論……一〇四
第五章　救貧法（一）……一一六
第六章　救貧法（二）……一三〇
第七章　救貧法（三）……一四四
第八章　重農主義……一六三
第九章　重商主義……一七六
第十章　農商並立論……一八七

第十一章　富の增加が貧民に及ぼす影響……二〇一
第十二章　人口と食物。前後の問題……二一七

第三卷　人口理論より生ずる弊害の除去或は緩和に關する人類將來の希望……二三七

第一章　道德的抑制と之れを行ふ義務……二八九
第二章　道德的抑制の社會に及ぼす影響……二五二
第三章　貧民の狀態を改善すべき唯一の有效なる方法……二六三
第四章　道德的抑制に對する反對論……二七一
第五章　反對の方法を實施する結果如何……二七二
第六章　貧困原因に關する智識の普及が人民の自由に及ぼす影響……二八六
第七章　貧困原因の無理解が人民の自由に及ぼす惡影響……二九八
第八章　救貧法を漸次廢止するの策……三〇四
第九章　人口に關する俗說矯正の方法と國民教育の必要……三一七

第十章　慈善心の指導について……三二六
第十一章　救貧方法に關する諸説（一）……三三七
第十二章　救貧方法に關する諸説（二）……三五三
第十三章　此の問題に對する一般原則の必要……三六七
第十四章　將來の社會改良に對する合理的希望……三八四

附錄　マルサス人口論に就いて……三九五
一　人口論の機緣……三九七
ゴッドウィンの説――長壽論――コンドルセの説
二　マルサスの時代……四〇三
「貧の哲學」――一種の反動説――マルサスの時代――人口增加と將來に對する憂慮
三　人口論第一版……四〇七

マルサスの公準――十九世紀後に於ける出産率減少――食料の豐富
四　貧困と罪惡……四一一
マルサスの悲觀説――ゴッドウィンに對する反駁
五　道德的抑制卽ちマルサス主義……四一三
人口妨害の分類――道德的抑制と戒愼的抑制――品性の形成と情操の修養
六　マルサスの思想的立場……四一七
マルサスの功利主義――マルサスの個人主義
七　人口論の影響……四二一
ダーウィニズムとの關係――新マルサス主義との關係
八　新マルサス主義の理想……四二四
新マルサス主義の經濟的道德的根據――新マルサス主義の理想――マルサスの平和主義

第一卷　人口增加に對する種々の妨害に就いて

第一章　人口論とは何ぞ。人口と食物との増加率

社會改良に關する研究中、自然に起り來る問題を處理する方法は次の二つである。

一、從來人類が幸福に向ふ進歩を阻害した原因を探究すること。

二、是等原因は將來之れを全然、若くは一部分でも除き得るか否かを驗すること。

深く此の問題に立到つて、從來人間の進歩に影響し來つた一切の原因を列擧し盡すことは一人の力の能くするところでない。此の論文の主目的は、是等の中人間の眞性と密接の關係ある一大原因をとり、其れが人間社會に及ぼした結果を驗するにある。而して其れは社會創成以來絶えず有力に作用し來つたものでありながら、此の問題を論究せる諸家のあまり注意しなかつたところのものである。かゝる原因の存在せることを確證すべき事實は反復記述され又承認せられたのであるが、其の性質と必然的結果とは殆ど全然看過され來つた。尤もあらゆる時代の先覺者たる博愛主義者が、常に矯正に志したところの罪惡や、不幸や、自然の賜物の不平均な

分配や、さういふもの、大部分は、恐らく此の原因から生じた結果の中に數へらるべきものに相違ないのではあるが。

予が玆にいふ一の大原因とは外でもない。凡ての生物は豫備された養分以上に增加せんとする不斷の傾向があるといふことが之れである。

フランクリンは曾て曰く、動植物は群集して相互の生活資料を犯すに到るため、蕃殖上の制限を蒙るものであるが、其れ以外には彼等の蕃殖には制限といふものはないと。又曰く若し地球の表面に他の植物が存在せぬと假定すれば、例へば茴香の如き或一種の植物が漸次蕃殖して全表面を占有するに到るであらう。同樣に若し他の住者が居ないと假定すれば、地球面は、或一國民、例へば英國人といつたやうなもの、ために數代にして滿たされるであらうと。

之れは異論の餘地なき眞理である。自然は動植物界を通じ、最豐富贅澤に生命の種子を廣く播布したが、是等種子が成長するに必要な餘地と養分は與へられるところ割合に少ない。地球の含む生命の萠芽が若し無制限に發育し得るものと假定せば、數年を出でずして數百万の地球を滿たすことが出來る。唯必要といふ急迫普遍の自然法が、是等生命の萠芽を一定限界內に制限し置くのである。卽ち動植物は此の偉大な制限的法則の下に萎縮するのであり、人間も亦如何に理性を働かして見たところで之れから脫却すべき途を發見し得ないのである。

植物と動物との場合には、しかし此の問題の解決は簡單である。彼等は其の種を增加せんとする有力な本能に驅られ、此の本能は子孫の爲めに備ふる必要には少しも累はされぬ。だから少しの自由でもある處には、種の增加力が忽ち作用するのであり、過剩の結果は、事後に至つて餘地と養分の缺乏といふことのため抑壓されるのである。

しかし此の妨害の人間に及ぼす結果は一層複雜である。人も亦動植物と同樣、有力な本能に依つて種の增加を强いられるが、理性は其の急激な進行を遮斷し、自力にて扶養し得ざる子孫を此の世に生むの結果に立到らないかを反問せしむるのである。若し人間が此の自然の暗示に聽從するとしても、尙制慾は屢々罪惡を招來するのである。而して若し此の暗示に聽從しなかつたとすれば人類は絕えず生活資料以上に增加せんとする傾向を示すであらう。しかし食物は自然法に依つて人間の生活にかくべからざる必要資料となつて居るから、人口は實際上之れを扶養し得る最少營養量以上に增加し得ないものであり、此の點、卽ち食料獲得の困難より生ずる有力な制限は常に人口の上に作用するに相違ない。卽ち此の困難は何處かに落下するに相違なく、人類の大部分は貧困の種々相、或は之れに對する恐怖といふ形で、必や烈しく之れを經驗せずには居られないのである。

人口が生活資料以上に增加せんとする不斷の傾向あること、竝に人口が此の原因に依つて其の必然的な水準に抑止せられて居ることは、人類の經來つた種々の社會狀態を檢討することに依つて十分了解が出來る。しかし人口の增加が全然無制限である場合に、其れが如何なる經路を取るだらうかといふこと、竝に人間が最好都合な事情下に於いて勤勞するものとして、土地の生產物は如何なる割合で增加すべきやといふことを明白にすれば、社會發達の迹を概觀する迄もなく、此の問題は一層明白となるであらう。

しかし之れに付いては先づ人口增加の力が完全自由に作用したといふやうな國家は事實に於いて未だ曾つて存在しなかつたといふことを注意しなくてはならぬ。卽ち風俗が至純質朴で、生活資料が非常に豐富であり、從つて家族扶養の困難を顧慮することより生ずる早婚上の妨害もなく、同時に又惡習、都市、不健康な職業、過勞から生ずる生命の濫費等が全然ないやうな社會は、實際に於いて歷史上其の例を見ないのである。

結婚法の制定があつてもなくても、其れに拘らず、人間の天性と德性とは或一婦人に對する靑春期の愛着を要求するものらしい。而して此の愛着は又其の婦人との結婚といふ結果を要求するものであるが、若し之れに對して何等の妨害が起らず、其の後に於いても人口減退の原因が生じないと假定すれば、人類の增加は、從來に比して遙かに大きくなにる相違ない。

亞米利加の北部諸州に於いては近世歐洲諸國に比し、比較的に食料が豐富で、人民の風俗が素朴で、又早婚を妨害する原因も少いが、過去百五十年間、引續き、二十五個年以內に人口が倍加して來たのである。而も此の期間に於いて、或都市では死亡數が出產數に越えたこともあつた。依是觀之此の不足を塡補した地方に於ける人口增加率は遙に一般平均率を越えて居たに相違ないのである。

農業を唯一の仕事とし、惡習と不健康な職業の皆無である奧地に於いては、其の人口は十五年間に二倍した。しかし此の異常な增加率でも尙增加力の極度であつたとは見ることは出來ぬ。蓋此の人々は處女地を開墾するため極めて苛烈な勞働をなしたに相違なく、かゝる境遇は殊に健康に適せりとは考へられないからだ。又恐らく此の人々は印度人の襲來に依つて生命を失つたことでもあらう。少くとも其の作物は印度人のため損傷せられたと想像せらるゝべきである。

人口三六に付一の死亡を比率として計算せるユーラーの表に從ひ、出產三に對して死亡一と假定すれば人口は十二年五分四で倍加する。而して此の計算は單に想像として可能性を持つのみならず、又短い期間ではあるが事實として起つたことも其の例一二に止らぬのである。

サア、ウイリアム、ペチ（Sir William Petty）は人口は十年で倍加し得るものであるとさへ云つて居る、しかし予は先づ全く安全な論據を撰み、凡ての證據が一致するところの增加率、而も其の增加が移民等によらず、全く蕃殖に依れること明白なるものをとるとして、最緩慢な增加率を考慮中に置き、人口は何等妨害を加へられない場合には二十五個年毎に倍加す。或は等比を以つて增加すと言つて差支ないであらう。

他方土地の生產物が增加すると想像せられ得る比率は之れを決定すること容易でない。但此こに斷言し得ることは一定面積に於ける其の增加率は、人口增加率とは全く其の性質を異にすることゝ一事である。十億の人口も、千の人口が二十五個年間に倍加せられるやうに容易く倍加される。しかし其の食物はしかく容易には倍加されない。人類は必然的に場所の制限を受けるからである。若し耕地が擴張され、凡ての沃土が占有されるやうになれば、其の後に於ける食物の增加は既に占有された地面を改良して得るより外途がない。ところで此の資源は、土地の性質上年々增加しないのみか、却つて減少するものである。しかるに人口は若し食物さへ與へられゝは、無盡藏な其の力を發揮しつゝけて行くもので、此の一期間の增加は、次期に於いて一層大なる增加力となつて表はれ、かくて無限に進むであらう。

支那及び日本に付き吾々の有する記錄に依ると、人間が何んなに働いて見たところで、又何

年か、つたところで其の產物を倍加し得るか疑問である。なるほど地球上には之れ迄耕作されず、殆ど住民のない部分が澤山あるに相違ないが、しかし稀少でも住民の存在する以上、之れを絕滅し、或は到底餓死するにきまつて居る地域に彼等を追ひ込むが如きは道德上の非難を免れないであらう。さればと云つて彼等の心意を啓發し、勤勞を指導するには長い年月を要するであらう。此の長年月の間、此の稀薄な人口は生產の增加に伴つて一歩一歩增加し行くのであるから、智識と勤勞とを急に增大し、豐饒にして未だ何人も占有せぬ土地の生產を一時に增大することは殆ど望み難いことである。一歩を假して新植民地に見る如くかゝる事が可能であるとしても、人口の等比級數的增加は其の進行頗る急激であるから、土地の增收は長く之れと協調し得ない。例へば北米合衆國の耕作地は將來に於いても從來の如く——假令其の割合は減少するとしても——年々增加するであらう。而して印度人は漸次奧地へ追ひ込まれ、終には全滅するであらう。けれども耕作地の擴張は此の時が最後で、其れ以上は何うにもならないではないか。

私の所說は現在不完全に耕作されて居る地球の他の部分にも或程度迄適用が出來る。亞細亞と亞弗利加の大部分に於ける住民を剗滅することはかりにも認め得べきことではない。といつて又韃靼人や黑人を啓發して其の努力を指導するが如き事も、長き年月を要することであり、

而も成否不明に屬することでもある。

歐羅巴は一寸想像するほど人口が充滿しては居らぬ。人間の努力を指導して最良の效果を擧ぐべき最大の希望は正に歐洲に在ると稱してよい。農學は英國竝に蘇國に於いてはかなり深く研鑽されたが、此の國々には未だ廣い荒蕪地が殘つて居る。故に予は此の島國の生產が最好條件下に於いて、如何なる速度で增加し得るやといふことを考へて之を論據として見たい。

最上の農業政策をとりて農業の大奬勵を爲すとすれば、此の國の平均生產は今後二十五個年に倍加するだらうか。之れ恐らくは既に多少無理な推定であらう。

而して次の二十五個年に於いて此の增收が更に倍加するといふことは到底想像し得ないところである。蓋其れは土地の性質に關し、吾人の有する智識と相反するが故である。荒蕪地の改良には時間と勞力とを要することが多い。故に農業上の問題に無智の人と雖、耕地面積が大きくなれば、平均產額が減少するといふことを認めるであらう。人口と食物との增加の比較を一層明瞭ならしめるため、予は今一個の假定を設けることにするが、之れは少しも正確を期し得ないまでも、土地の生產力といふ方面から見て、吾人の經驗の許す以上に好都合な假定なのである。

土地の平均生產額に對する年々の增加は確に漸減するものであるが、今かりに之れを同一であると假定し、而して英國の生產が現在の生產額に等しいだけづゝ二十五個年間に增加するものと假定する。（如何に熱心な空想家も之れ以上の增加があり得べしとは想像しないであらう）。すると數百年ならずして英國の寸地尺土も、洩れなく開墾されて花園の如くなるに相違ない。

若し此の假定を全地球に適用し、地球の與へる人間の生活資料が現在生產額に等しいだけづつ二十五個年毎に增加すると假定することは、人間の努力を基本として、吾々の想像し得るより、より以上の增加率であると云はなくてはならぬ。

其れ故地球現在の平均狀態を考慮の中に置くと、人間の勤勉に最好都合な事情下に在つても生活資料は僅に等差的に增加する以上には出でないと斷言してよい。

上述人口と食料と二つの相異なる增加率の必然的結果を合せ考ふる時は大變な事態になる。例へば英國の人口を一千百萬とし、其の生產が此の數を容易に支持し得るものとせよ、初の二十五個年が經過した時、人口は二千二百萬となり、食料も倍加する。次の二十五個年に人口は四千四百萬となり、食物は漸く三千三百萬の人口を養ひ得る程度に止るであらう。次の時期には人口は八千八百萬となり食料は僅に其の半數を養ひ得るに止まる。かくて初めの百年の終に於

いて人口は一億七千六百萬となるのに、食料は五千五百萬を支へ得るに止まり、一億二千百萬の人口は全く食料の供給を得られないことになるのである。

英國といふ問題を離れ、全世界に付いて考へると、移民に依る人口の增減は眼中に置く必要がなくなる。現今の世界人口が假りに十億とすれば、人類は一、二、四、八、一六、三二、六四、一二八、二五六、といふ風に增加するに、食料は一、二、三、四、五、六、七、八、九といふ樣に增加する。かくて二世紀終には人口と食糧とは二五六對九の比となり。三世紀後には四〇九六對一三といふ比となる。二千年後には其の差は殆ど勘定の出來ないほど大きくなつてしまうのである。

此の假定に於いては地球の生產力といふものに對しては、苟も制限を加へない。其れは或は永久に增加を繼續するかも知れず、又其の增加は一定假定額より大きいかも知れない。併し人口增加の勢は何日も食料增加率に比して遙かに大きいのであるから、人口增加の趨勢は、之れに制限的結果を及ぼす强力な必然法が不斷に作用することに依つて、纔に生活資料の水準に抑止せられるのである。

第二章　人口に對する一般的妨害並其の作用する方法

上述所論に依つて考へると、人口に對する窮極の剩過は、人口と食物との互に相異なる增加率から必然的に發生する食物の缺乏といふ事實に存するやうだ。しかし此の窮極的剩過は實際の饑饉といふ場合を除けば、決して直接に人口に影響するものではない。

生活資料の缺乏から生ずるやに見える一切の習慣、一切の疾病等は人口に對する直接の妨害を構成すると云つて差支なく。又此の食料缺乏とは關係のない、精神的肉體的の一切の原因——不時に人體を弱め之れを滅ぼす一切の原因も亦此の直接妨害の一である。

是等人口妨害は强弱の差これあれ、如何なる社會にも作用し、生活資料の水準に人口を抑止するものであるが、是等は大別して豫防的妨害と積極的妨害との二種に分つことが出來る。

豫防的妨害は其れが自發的である限、人間に特有のものであり。遠い結果を商量する人間の勝れた理性に基因するものである。動植物の無限の增加に對する妨害は凡て積極的であるが、然からずんば無意識的である。しかし人間の場合には全く之れと相違する。人が自己の周圍を

見て、屢々大家族を持つ人々の上に迫る困難を想像する時、或は又自分一人の今日でさへ殆ど餘力なき現在の收入若くは資力を考へ、將來家族を持つも殆ど增收なく、而も目下の收入を七八人の間に分つことになれば、一人當の分前が如何に少いものであるかを省みると、彼は一種の疑惧に襲はれざるを得ないであらう。卽ち若し自今己れの欲望の命ずるまゝに行動すると假定すれば、多分此世に生れ來るたちうところの子供たちを扶養し得るや否やといふこと之れである。若し平等主義が實現されゝば問題はむしろ簡單だ。しかし今日の社會狀態では左樣はいかぬ。必やそこに多くの他の考慮が起つて來るのである。卽ち例へば身分を墮さないですむか、從來の習慣を大部分捨てなくてはならないのではないか。家族を養ひ得るやうな仕事にありつけるか何うか。兎に角獨身當時より大なる困難と大なる勞力を忍ぶのやむなきに到るのではないか。自分と同樣の敎育と進步とを子供等に傳へ得るか何うか。若し子供が多ければ、大に働いて見たところで、襤褸を着せ、貧乏にやつれさせ、社會の落伍者たらしめるのではないか。而して自分は獨立を失ひ、乏しい慈善に依つて纔に其日を過すの必要に迫られるのではないか。

是等の考は文明國民の多數を制肘し、一婦人に對する靑春期の愛著に於いて、自然の命ずるまゝに行動せしめないであらう。否事實左樣せしめないのである。

今若し此の抑制が別に罪惡を生ぜしめないと假定するも、以上の考慮は確に人口理論から發生する最少限度の弊害たるを免れぬ。が他方から云へば人間の强烈な自然的傾向に對する抑制には、多少の一時的不幸を伴ふも又已むを得ない。況や此の不幸なるものは人口に對する他の妨害から來る弊害に比べれば明かに輕微のものであり、且つ永久的滿足のため、一時的滿足を犧牲にすることは、人間の常にやつて居ることで、之れは正に其の一例に過ぎないものである。

此の抑制が罪惡を生む場合となると、之れより生ずる弊害は頗る著しくなる。例へば妊娠の出來ぬほど亂媾を行ふが如きは、人間の威嚴を損ふこと殊に甚しいもので、かゝる亂媾は男子にも其の惡結果を及ぼさずに置かないが、就中女性を墮落せしめ、女らしき特質を失はしめることは顯著な事實である。しかも不幸は單に之れに止らず、大都市に充滿する賣笑婦の間には、恐らく他の如何なる方面に於けるよりも一層切實な難苦と深刻な不幸とが存在すると見るべきであらう。

性的道德の一般的頽廢が社會各階級に瀰蔓する時には、其必然的結果として家庭的幸福の源泉を毒し、夫婦及び親子の情愛を弱め、小供の敎養上父母の一致的努力と熱心とを減殺するものである。從つて一般社會の幸福と道義とは之れがため大に害せられる。殊に私通を行ひ、且つ其の結果を掩蔽するの必要は、更に幾多の他の罪惡を誘發せずには置かないのである。

人口に對する積極的妨害は多種多樣であり、罪惡から起るとしても或は貧困から生ずるとしても、苟も人命の自然的期間を短縮する一切の原因を包含するのである。故に凡ての不健康な職業、苛酷な勞働、寒暑の害、小兒の營養不足、大都市、あらゆる不攝生、病氣、流行病、戰爭、傳染病、饑饉等を含むのである。

以上予が豫防的竝に積極的妨害といふ名稱下に分類した、人口增加に對する妨碍を檢討すると、是等は道德的抑制、罪惡、貧困の三に歸するやうに思はれる。

積極的妨害といふ方面では結婚を差控えて、而も不當な性的滿足を求めないならば、之れを道德的抑制と稱してよい（註1）。

亂婚、不自然な情慾、姦通、竝に私通の結果を掩蔽するためにとられる不都合な手段等は明に罪惡といふ名稱下に來る豫防的妨害である。

積極的妨害に付いて云へば、自然法から不可抗的に起り來るやに思はれるものは專ら貧困と稱せられるものである。而して人間が明かに自分で招くところの戰爭、不攝生、其他避ければ避け得られる多くの障害は混合的性質のものである。卽ち是等は人間の罪惡が吾々に齎らすものであつて、而も其の結果は貧困であるからだ（註2）。

上述豫防的竝積極的妨害は相合して人口に對する直接の妨害をなすものである。而して或國家の蕃殖力が十分に活動し得ざる處に於いては此の二種の妨害が互に相反比例的に作用して居るに相違ないのである。卽ち自然的に不健康地であるか、或は何等かの理由で死亡率の大きい地方では豫防的妨害は殆ど行はれないであらうし、反對に自然的に健康地で、而も豫防的妨害が大に流行する地方では、積極的妨害は殆ど行はれず、死亡率は甚だ小さいであらう。

あらゆる國家に於いて是等妨害の或物は多少絕えず作用して居るのである。かく或種の妨害が如何なる國にも行はれて居るに拘らず、各國民は常に又其の生活資料の許す範圍外にまで增加しやうとする傾向がある。之れが下層社會を貧困に陷れ、其の狀態の永久的改善を妨ぐることになるのである。

現在の社會狀態に於いてかゝる結果の生れる經路は次の通りである。或國の生活資料が其の住民を容易に支持し得る程度のものであるとする。すると人口增加の趨勢——其れは最惡の社會にも存在するのである——は生活資料の增加率以上の速度で進行する。從つて千百万の人口を支持し來つた食物は、今は例へば千百五十万人に分たれなくてはならぬ。從つて貧乏人は益益貧乏となり、其の多數は甚しい窮狀に陷るのである。又勞働者の數は市場に於ける仕事の割

合以上に上るから賃金は下落し、他方食物は益々騰貴する。其の結果として勞働者は從來に於けると同一物を得るために一層多く働かなくてはならなくなるのである。かゝる貧苦の時代に於いては、結婚は阻害せられ家族扶養の困難が著しいから人口增加の勢は一時はゞまれる。しかるに賃金の低廉勞働者の過多勞働者間に於ける勤勉の必要等は、やがて農業者をしてより多くの勞働者を使役して新しき土地を開墾せしめ、既耕地を改良せしめるので、終に食料の增加が當初の人口と同一割合に達するのである。かくて勞働者の狀態は改善せられ、人口に對する抑制が弛むに至ると、幾何もなく又人間の幸福といふ方面から觀て、同樣の退步的運動と進步的運動とが繰返されるのである。

かゝる動搖は恐らく普通の人の眼にははつきりと映らぬであらう。否最注意深い觀察者でも其の推移の時期を打算するのは困難であらう。其れにしても一般舊國家に此の種の變化が發生することは、苟も此の問題に付いて深く考へる人ならば認めざるを得ぬであらう。よしんば私がこゝに記したほど明瞭に、規則正しく其の變化が行はれないと假定しても。

然らば此の動搖は何故吾人の豫期するほど顯著に表はれず、又實驗に依つてはつきりと確められないか。其の主なる理由は吾人の有する人間の歷史なるものが一般に單に上流社會の歷史

に過ぎないからである。卽ち是等退步と進步とが主に發生する下層社會の風俗習慣等に付いてはあまり信憑し得べき記錄はない。或國民の或時期に於ける此種の歷史を書いて滿足なものにしやうと思へば、下層社會の狀態と、之れに影響を及ぼす原因を地方的に又一般的に觀察するために、多數研究者の不斷の而も細心な注意を必要とする。かくて始めて此の問題に付いて精確な推論を得られるのであるが、其れには數世紀に亙つてかゝる歷史家の輩出することを尙一つの必要條件とするであらう。

かゝる種類の統計的知識は近年二三國家の注意するところとなつたが、吾々は此の種研究の進步に依り、人間社會の內部的構造を一層明に透察することになるであらう。しかし目下のところ此の學問は未だ幼稚であり、吾々の知らんとする事項は多くは省略せられ、若くは十分明細な說明を與へられて居らぬ。就中成人と結婚數との割合如何、結婚抑制の結果發生する惡風の程度如何、生活の難易に因る小兒死亡率の差異如何、勞働實價の消長如何、一定期間內の相異なる時期に於いて、下層社會の幸福安樂といふ事に關して認知し得可き差異如何、本問題の研究に最重要な出產、死亡、結婚等に付き最精確な登薄は如何といふやうな事柄は何れも缺くべからざるものである。

かゝる詳細事項を含む忠實な歷史は、人口に對する不斷の妨害が如何なる有樣で作用するか

を大に說明してくれるであらうし、又恐らく上述退步と進步との運動が存在することを證明するであらう。勿論、例へば或種製造工業の傳來或は廢止、農業的企業精神の消長、豐作と凶年、戰爭、救貧法、移民、其他之れに類する他の原因が作用し、此の社會的動搖の周期は大に不規則にはなるであらうが。

此の動搖を普通人の目に映ぜしめない、就中主要な原因は、勞働の表面價値が其の實價と異なる事實である。勞働の表面價値が下落することはめつたにない現象である。しかし食物の表面價値が漸昇するのに勞働の表面價値が從來通りであることは屢々見ることである。商工業が盛大になり、市場に投ぜられる新しい勞働者を雇傭することが出來、しかも其の供給の增加が勞働錢價を低下せしむるまでに到らない時には一般にかゝる狀態を呈するものである、而して同額の賃金を受け取る勞働者の數が增加すれば必や競爭に依つて小麥の價額を騰貴せしめる。之れは事實上勞働價額の下落に外ならないのであり、從つて此の時期に於いては下層社會の狀態はだん〳〵惡くなるに相違ない。而も他方農夫と資本家は勞働賃金が事實上低廉であるために益々富を重ね、資本の增加は彼等をして益々多數の勞働者を使役せしむるであらうが、勞働者は甚しく家族扶養の困難な狀態に陷り、從つて人口は之れがため多少の妨害を蒙るに到るだらう。しかしかくて一定期間を經過すると、今度は勞働に對する需要は供給に比例して大

きくなり、之れを捨て置いて自然的平均狀態を取らしむるならば、賃金は勿論騰貴するに相違ない。かく勞働價額は名義上少しも下落しないのに、實賃金が、從て又下層社會の狀態が進步と退步との運動を示すこともあり得るのである。

規則だつた勞銀制度といふもの、ない野蠻社會に於いても右の如き動搖の存在することは疑ふの餘地がない。人口が殆んど食糧の極限まで增加すればあらゆる豫防的並積極的妨害が暴威を振ふに到り、性に關する惡習が一層瀰蔓し、捨兒の數が增加し、戰爭と疫病とが發生するの虞れと、又其の慘害とが大に其の度を增すことにならう。而して人口に對する是等妨害は、人口が終に食物の水準以下に低下するまで繼續するであらうが、此の爲め食物が比較的豐富になると、人口は玆に又增加を始める、而して一定期間經過すると同一の原因に依つて又其の增加が阻害せられるのである。

各國に於ける是等進步と退步の事實を確證せんがためには、今吾人の有するより一層精細な歷史を要すること明白であり、又其れは文明の進步に依つて、自ら緩和せられるであらう。今予は各國に於ける此の進步と退步の事實を確證しやうとはせず、唯次の三つの命題を揭げ之れを證明して見たいと考へる。

一、人口は食糧に依つて必ず制限される。

二、或頗る有力明白な妨害に依つて阻害せられない限り、食糧の增加は必や人口の增加を伴ふものである。

三、是等の妨害、竝に優越な人口增加力を抑制して其の結果を食糧の水準に止めしむる一切の妨害は、三分して道德的抑制、罪惡、貧困の三となすことが出來る。

是等命題の第一は例を擧げて說明する迄もないことであり、第二と第三とは過去竝に現在の社會狀態に於ける、人口に對する直接の妨害を檢討することに依つて十分に確認せられるであらう。

（註1）予が玆に使用する道德的といふ言葉は最狹い意味である。道德的抑制と云ふ言葉は戒愼的動機から結婚を抑制し且つ抑制期間に道德的行狀を守ることを意味する。私は決して故意に此の意味から離れて此の言葉を使用したことはない。而して若し單に結婚を抑制するだけで其の結果を考慮の中に入れない場合には、予は之れを戒愼的抑制とか或は豫防的妨害の一部とか呼んで居るのである。事實之れは豫防的妨害の主要な一部を成して居るのである。

（註2）本書附錄（五）參照（譯者）

第三章　人口統計に及ぼす流行病の影響

スースミルク Sussmilch が蒐集した貴重な死亡率表は五十年乃至六十年に亙るものであるが、之れに依ると歐羅巴のあらゆる國家は週期的な流行病に襲はれ人口の增加は之がため阻害せられ來つたこと明白である。否一世紀中恐らく一回乃至二回發生し來つた激烈な傳染病に因り其の人口の三分一、四分一を失はなかつた國家は殆ど稀れであると云つてもよいほどである。而してかくの如き死亡率が出產、死亡、結婚等の一般的比例に及ぼす有樣は一六九二年より一七五七年に至るプロシヤとリスアニアの統計表に於いて實によく例證され居るのである（註1）。

プロシヤとリスアニアとの人口統計

1692——1757

年平均	結婚數	出產數	死亡數	結婚對出產の比	死亡對出產の比
1697に至る五ケ年	5,747	19,715	14,862	10 : 34	100 : 1[illegible]
1702に至る五ケ年	6,070	24,112	14,474	10 : 39	100 : 1[illegible]
1708に至る六ケ年	6,082	26,896	16,430	10 : 44	100 : 16[illegible]
1709—1710	黑死病	[illegible]ケ年間に病死せる者	247,733		
1711	12,028	32,522	10,131	10 : 27	100 : 32
1712	6,267	22,970	10,445	10 : 36	100 : 22[illegible]
1716に至る五ケ年	4,908	21,60[illegible]	11,984	10 : 4[illegible]	100 : 180
1721に至る五ケ年	4,324	21,396	12,039	10 : 49	106 : 177
1726に至る五ケ年	4,719	21,452	12,8[illegible]	10 : 45	100 : 166
1731に至る五ケ年	4,808	29,554	12,825	10 : 42	100 : 160
1735に至る四ケ年	5,424	22,692	15,475	10 : 41	100 : 146
1736	5,280	21,859	26,371	行病の二ケ年	
1737	5,765	18,93[illegible]	24,48[illegible]		
1742に至る五ケ年	5,5[illegible]2	22,099	15,255	10 : 39	100 : 144
1746に至る四ケ年	5,469	25,275	15,117	10 : 46	100 : 167
1751に至る五ケ年	6,423	28,235	17,272	10 : 43	100 : 163
1756に至る五ケ年	5,599	28,892	19,154	10 : 50	100 : 148
黑死病前の十六ケ年	95,585	380,516	245,763	10 : 39	100 : 154
黑死病後の四十六ケ年	248,777	1,083,87[illegible]	690,324	10 : 43	100 : 157
黑死病の年を除ける六十二ケ年	344,361	1,404,[illegible]88 936,[illegible]87	936,324	10 : 4[illegible]	100 : 15[illegible]
出產の死亡超過數		528,3[illegible]1			
黑死病の二ケ年	5,477	23,977	247,733		
全六十四ケ年（黑死病の年を含む）	340,838	1,488,[illegible]6 1,183,820	1,183,820	10 : 42	100 : 125
出產の死亡超過數		304,545			

原表は全時期を通じて各年の結婚、出產、死亡を含むのであるが、私は其の年が特殊の觀察に價する事實を含まない限り、四五年の平均を示すこととし、之れに依つて表を多少縮少した。大黑死病に次ぐ一七一一年は原表に於いては一般平均中に含まれて居らず、該年の數は殊に明示されて居るが、若しこれが正確であるとすれば、大きな死亡率が結婚數に及ぼす急激な影響を示すものである。

同人の計算に依ると國民の三分一以上は此の年の疫病で死んだことになるが、かく人口の急減せるに拘らず、表を一覽すると一七一一年に於ける結婚數は疫病の前六個年の平均に對して約二倍となつて居る。何故かゝる結果を生じたか。思ふに青春期にある殆ど凡ての人口が、勞働に對する需要竝缺職を滿すため、直ぐさま結婚するやう慫慂せられたものであらう。此の多數の結婚は恐らく之れに相應ずる多數の出產を伴ふことが出來ぬ。何故なら新結婚一に對しては同年中、一以上の出產を豫期することが出來ず、其の餘の出產數は疫病流行中に行はれた結婚から生じたものに相違ないからである。從つて此の年に於ける結婚と出產とが僅に一と二・七卽ち一〇と二七との比となすものとしても驚くに足らぬことである。しかし結婚數が法外に多いのであるからして出產の割合でなく、其の絕對數は隨分多かつたに相違ない。而も他方死亡は自然大に減少したであらうから、死亡數に對する出產數の割合が一〇〇對三二〇といふ途

方もない數字となつて表はれて來たのである。卽ちかゝる大なる出產超過の割合は恐らく曾つて米國に於いて發生したものと比較しても劣らないほどなのである。

翌一七一二年に於いては結婚數は勿論大に減じたに相違ない。何故なら靑春期の男女は殆ど凡て前年既に結婚したからで、此年の結婚者は疫病の年につゞいて漸く靑春期に達した連中が主であつたと解すべきであるからだ。其れにしても年齡上結婚し得る人々が一人殘らず前年に結婚してしまつたとは考へられぬ。之れ一七一二年の結婚數が人口に比して割合に多い譯で、前年結婚數に比べれば約半數に過ぎないが、其れでも未だ疫病前の最後の時期に於けるよりも大きいのである。一七一二年に於ける出產の結婚に對する割合は前年に於けるよりも大きい(結婚が割合に少いため)が三・六對一であつて尙他國に於ける如く大きくはない。然るに出產の死亡に對する割合は、結婚の割合に多かつた前年に比すれば少ないけれども、他の諸國に比すると尙著しく大きく、二二〇對一〇〇であり、之れを三六中一の死亡率で計算すると二一・八分一年で人口が倍になるであらう。

此の時期以後、年結婚數は人口減少の影響を受けて疫病前の平均結婚數より遙に下り始めて居るが、之れは主として年々結婚年齡に入り來る人口が少いためであらう。疫病後九年若くは十年の一七二〇年に於いては結婚數は偶然か、或は豫防的妨害が行はれ始めたためか、分らな

いが、兎に角最少ない。而して他方には出產の結婚に對する比は此の時に於いて大變高くなつて居る。一七一七年後一七二一年に到る期間には此の割合は表に示はれたところでは四九と一〇〇であり、かの特殊な年、卽ち一七一九年と二〇年に於いては各々五〇と一〇、五一と一〇になつて居る。

スースミルクは又疫病後に於けるプロシヤの結婚對蕃殖力の關係に讀者の注意を引き、年結婚十に對して五〇の出產を擧げ、生殖率の頗る高いことを記して居る。實際一般平均から判斷すると此の時に於けるプロシヤの結婚は頗る多產的であつたと信ずべき理由が十分ある。しかし又他方から考へると、此の一年、否此の期の割合は必しも之れに對する十分な證據とはならぬ。蓋此の割合は明に此の年の結婚が比較的に少なかつた事實から生じたもので、出產數の比較的に多かつたために生じたのではないからだ。疫病につぐ二個年には死亡に對する出產の超過は驚くばかりであつたが、出產の結婚に對する割合は少なく、普通の計算法に依れば僅に二・七と三・六に過ぎない。表の最後の時期(一七五二——五六年)に於いては出產と結婚との比は五と一であり、一七五六年だけに付いて見ると六・一と一との比である。而して此の時期に於ける死亡と出產との比は一四八對一〇〇であるが之れは結婚に對する出產の高率が結婚數の普通以下に少いことを示すのではなく、却つて出產數が普通以上に多いことを示すものに外な

らぬ。

此表に含まれた六十四個年の相異なる時期に於いて死亡と出産との割合の變化に殊に注意するの必要がある。疫病直前の四個年平均をとつて見ると、出産の死亡に對する比は二二と一〇であるが若し死亡率を三六中一とすれば二十一個年で人口が倍加するわけである。しかるに一七一一年から同三一年に到る二十個年をとつて見ると其の比は約一七と一〇である。之れを前章第一表（註2）に依つて計算すると倍加の期は三十五個年である。更に又六十四個年全部に亙つて考へると出産の死亡に對する平均數は約一二と一〇にしかならず、之れでは百二十五年經たなければ人口は倍とならぬ。若し或短い期間をとり、此の中に一七一〇年に於ける疫病の死亡率を含ませれば勿論であるが、さなくとも一七三六年竝三七年に於ける流行病期の死亡率を此中に入れたゞけで、之れがために死亡數が出産數を超過することになり、人口は減少することになるだらう。

スースミルクの考察に依ると、疫病後に於けるプロシャの死亡率は三六對一ではなくして、三八對一であつたかも知れない。讀者中にはかゝる事變後に生ずる食物の豐饒は、死亡率に對して尙一層大なる變化を齎らすに相違ないと考へる者があるかも知れぬ。殊にドクトル・シ

ヨートの如きは、大なる死亡率のあとには一般に例外的な健康狀態が來るものだと說いて居る。此の觀察は若し同年齡の比較を基にするならば無論正しいのである。しかし他方から考へると三歲以下の嬰兒は、最好都合な狀況下に於いても他の年齡に比べると死にやすいのである。其れ故大死亡率の後に續いて生れ來る非常に澤山の產兒は、先づ此の時期の自然的健康狀態と相殺し、一般死亡率に於いて大なる相違を生ぜしめないのである。

疫病後のプロシャの人口を一七一一年の死亡數で割ると死亡率は約三一對一となり、減少どころか却つて增加して居る。而して之れは該年に生れた法外に多數の產兒のためで、此の產兒が成長して丈夫になれば、此の大死亡率は此こにやむのであり、此時に到つて始めてスースミルクの觀察が正しいといふことになるのである。が一般的には前の大なる死亡率は後の死亡數に對するよりも寧ろ出產數に對して著しい影響を與へるものである。表を見ると年死亡數は人口の增加と正比例して進行し、始終同一の割合を失はぬ。然し年出產數は始終を通じてあまり變化せぬ。而も此の間に人口は倍以上になつて居るのである。從つて全人口に對する出產の割合は始と終では非常に相違して居るのである。

依是觀之或國の過去の人口を測定するために一定の出產率を假定することの如何に危險であるか推察に難くない。現在の例に付いて云へば、プロシャの人口は事實疫病の死亡數から見て

約五分の一を失つたことになつて居るのであるが、若し一定の出産率を假定して測定したなら、殆んど減少しなかつたといふ結論に達したであらう。

死亡、出産、結婚の相對比に於ける同樣の變化は、其の程度は違ふが、スースミルクの編んだ凡ての他の表中にも表はれて居る。而して是等問題を論ずる人々は僅々數年間の割合を基として過去と未來を推定せんとする傾向あまりに著しいから、更にかゝる變化の二三の實例を引いて讀者の注意を促すことにしやう。

ブランデンブルヒのヒュルマルク(The Churmark)に於いては一七一二年に終る十五個年を通じ、出産の死亡に對する比は一七と一〇であつた。一七一八年に終る六個年に於いては其の比は下つて一三と一〇となり。一七五二年に到る四個年に於いては僅に一一と一〇、次の四個年には一二と一〇となり、一七五九年に終る三個年に於いては死亡數は遙に出産數を超過した。全人口に對する出産の割合は示されて居ないが、出産と死亡との比に於ける此の大變化が單に死亡數の變化から來たものとは信ぜられぬ。出産と結婚との割合はかなり齊一で、平均は三七と一〇、兩極端が三八と一〇及び三五と一〇といふ具合である。此の表（註3）に於いては一七五七年に始まる三個年に到るまでは大した流行病はなく、此の時期以後の事になると統計がないのである。

ポメラニア大公國に於いては一六九四年から一七五六年に到る六十年間に出産と死亡との比は一三八と一〇〇であつた。しかし六個年づゝから成る或時期に於いては一七七と一〇〇、一五五と一〇〇といふやうに高い時もあり、反對に一二四と一〇〇、一三〇と一〇〇といふやうに低いのもある。五年若くは六年を一期とする出産と結婚との比は、六十個年全部を通じて平均約三八と一〇で、兩極端は三六と一〇、四三と一〇である。流行病は時折發したものの如く、其の中死亡が出産以上に上つたこと三度に及んで居る。此の人口の一時的減少は出産數には其れほど影響せず、流行病の翌年と二年後とに於いては全統計中最大割合の結婚が行はれた。死亡數の出産超過はしかし表の最後の年、即ち一七五九年に到る三個年まではあまり大したことはなかつたのである。

ブランデンブルヒのノエマルク(Neumark)に於いては一六九五年から一七五六年に到る六十年間に死亡に對する出産の平均比は始めの三十個年を通じて一〇〇と一四八、終の三十個年に於いては一〇〇と一二七、全體を通じて一〇〇と一三六であつた。五個年づゝの或時期に於いては其の比は一〇〇と一七一、一六七といふやうに高く、或期間には一一八、一二八といふやうに低い。一七二六年に終る五個年に於いては一年の平均出産數は七〇一二であり、一七四六年に終る五個年に對しては六九二七であつた。是れに依り出産數から判斷すれば此の二十個年間に人口は

減少したとも推定されるが、出産と死亡の平均比例から判斷すると、其間に流行病の盛な年があつたに拘らず、人口は大に增加したに相違なく、從つて全人口に對する出産の割合は大なる變化を見たに相違ない。同じく二十個年より成る表中他の期間に於いても、出産と結婚に關して同樣の結果を示して居る。結婚に對する出産の割合中兩極端は一〇對三四と四二で平均は約三八である。一七五七年に始まる三個年は他表に於けると同樣、死亡數の非常に多い年であつた。

マグデブルヒ大公國に於いては一七五六年に終る六十四個年を通じ、死亡に對する出産の平均比は一〇〇と一二三であつた。始の二十八個年に於いては一〇〇對一四三、終の三十四年に於いては一〇〇對一一二、五個年より成る或一期に於いては平均一〇〇對一七〇といふ高率を示したこともあるが、反對に或二期には死亡が出産を越えたこともある。輕い流行病は表中一面に寧ろ濃く蔓延して居るやうに見える。或二つの場合には三四の流行病が連年發生して人口を減じたが引續いて結婚と出産との增加を伴つた。結婚に對する出産の割合は最高一〇對四二、最低三四、六十四個年の平均は一〇對三九であつた。此表に付きスースミルクは說明して曰く、死亡平均數は一七一五年乃至一七二〇年後、三分一の人口增加を示して居るが、出産と結婚とは却つて人口の停止若くは減少を示すであらうと。此の結論を下すに際しては氏は一七五

九年に終る流行病の三個年、卽ち結婚も出産も共に減少したらしく見える三個年を算入して居るのである。

ハルベルシュタット公國に於いては一七五六年に終る六十八個年を通じ、死亡に對する出産の平均比は一〇〇對一二四であつた。しかし五個年を一期とする或時期に於いても其の比は一〇〇と一六四に上り、或は一一〇に下つて居る。全六十八個年に於ける增加はすばらしかつたが、一七二三年に終る五個年間の平均出産數は二八一八で、一七五〇年に終る四個年には二六二八に減少して居る。之れから推すと人口は二十七個年間に大に減少したかに見えるであらう。同樣の外觀は三十二個年からなる或時期を通じ結婚に關しても表はれて居るのである。

一七一八年に終る五個年に於いては結婚平均數は七二七、一七五〇年に終る五個年に於ては六八九で、此の兩時期中死亡數の割合も亦大に減少したことであらう。流行病は屢々發生したやうに思はれるが、其の死亡數が出産數を超過するほど大きかつた場合には直ぐ其のあとに異常に大きな結婚が伴ふといふ有樣で數年後には出産率も亦大に增加するのが常であつた。全統計表を通じて一七五一年の結婚數は最大のものであるが、其れは一七五〇年の流行病（此年に於いては死亡の出産を超ゆること實に三分一以上であつた。）につゞく年で、其の後四五年間出産率は最大程度に上つて居た。結婚に對する出産率の兩極端は一〇對四二が最高、三四が最低

亡、六十八個年の平均は一〇對三八である。

あとの表も其の結果に於いては同一であるが、以上の統計だけを見ても、全人口に對する出産と結婚との比、並全人口に對する死亡の比が常に變化しつゝあることを示すには十分である。

さてこゝに注意すべき一條は、是等比例中變化の最少ないのは出産と結婚との比であるが其の理由は明白である。卽ち此の比は主とてし結婚より生ずる生殖の率に依つて支配せられるもので、此の率は勿論大した變化を受けないものであるからだ。結婚から生ずる生殖率は、表中に表はされた結婚對出産比の變化ほどにも變化があらうとは思はれぬ。がしかし生殖率は他の一原因から影響されて生殖率が變化するのゝ同一の結果を顯はすものであるから、必しも左樣な變化を必要としないのである。或年に於ける出産數は其の年の結婚から生じたものではなくして、主として或年以前に行はれた結婚から生じたものである。其れ故若し四五年間結婚數の割合が大に增大し、次の一二年間減少すると假定すれば、統計上に於いては却つて後の一二年間に於いて結婚に對する出産の比が大きくなつて表はれるのである。反對に四五年間は比較的結婚少く、次の一二年間に其れが增加」と假定すると、統計上にては却つて此の一二年間の結婚對出産比が少なくなつて表はれるであらう。此の情況はプロシヤとリスアニアの表に顯著であるが、スースミルクの他の諸表に於いても同一の事實が認められる。卽ち是等諸表に依つ

て見ると、結婚對出産の極端な割合卽ち大變化は一般に出産數に影響されるよりも寧ろ結婚數の多少に影響されるものであり、從つて結婚から生ずる出産數の變化に原因するといふよりも、寧ろ結婚の奬勵、或は結婚に對する慾望の變化によつて左右されるといふのが至當である。

是等統計中に散在する普通の流行病の年はかの大黑死病がプロシヤの統計に齎らしたやうな大なる影響をば結婚と出産に對して齎らすことは勿論ない。しかし其の流行の勢に比例して一般に同樣の作用が存在することは認められる。多くの他の國、殊に都市の統計から判斷すると十七世紀の後半から十八世紀の初にかけて黑死病はしきりに發生したものらしく見える。

黑死病若くは流行病が是等統計中にて人口の急速な增加後に發生せる事實を考へて見ると、吾々は次の一事に想到せざるを得ぬ。卽ち是等の場合に於いては住民の數が食物量並に健康保持上必要な住居數を超えて居たのではないかといふと之れである。此の假定に從うと人口の大部分は生活を低下し一家内に多數の人々が蝟集したことになる。而してよし其の國家全體の人口がさほど稠密でないとしても、是等自然的原因は疾病を釀成せしむるに至るのである。卽ち其の國の人口は稀薄でも、人口增加の勢が食料の增加に先んずるならば、而して又住宅の增加に越えるならば、住民は必然的に居住と食物とに困難を感ずるであらう。例へばスコットランド地方で、次の十年十二年間結婚數が增加し、或は生殖力が增進して、而も人口の移出がない

とすれば、一家當り人口は五人から七人になるに相違なく、若し之れに加ふるに食物の粗惡を以つてせんか、一般人民の保健上最惡の影響を蒙ること火を見るより明なことである。

（註1）Sussmilch, Göttliche Ordnung 第一卷、第二十一表、表第八十三頁

（註2）前章は「結婚の多產」といふ。問題となつた表は次の通りである。

或國の人口を 103,000 とし
死亡率が 36 中 1 なる時

出生が死亡に對する比が次の如き場合は	出生超過が次の如くなるべし	人口超過が全人口に對する比は次の如くなるべし	人口倍加の時期は次の如くなるべし
11	277	$\frac{1}{360}$	250年
12	555	$\frac{1}{180}$	125
13	833	$\frac{1}{120}$	$83\frac{1}{2}$
14	1110	$\frac{1}{90}$	$62\frac{3}{4}$
15	1388	$\frac{1}{72}$	$50\frac{1}{4}$
16	1666	$\frac{1}{60}$	42
10:17	1943	$\frac{1}{51}$	$25\frac{3}{4}$
18	2221	$\frac{1}{45}$	$31\frac{2}{3}$
19	2499	$\frac{1}{40}$	28
20	2777	$\frac{1}{36}$	$25\frac{3}{10}$
22	3332	$\frac{1}{30}$	$21\frac{1}{8}$
25	4165	$\frac{1}{24}$	17
30	5554	$\frac{1}{18}$	$12\frac{4}{5}$

註　此表中の比はツーク(Took)氏が第二版に於いて附加せる表中の比とは異なる所あるも、問題を例證すること明瞭なる故に此こに採錄す。

（註3）註1の表第一卷、第八十八頁

第四章　一般的結論

上述の妨害が人口の緩慢な增加の直接の原因なること。並に是等妨害が主として食料の不足より生ずることは、生活資料の急激な增加に依り是等妨害が大に除去せられる場合には、人口が比較的迅速に增加するといふ事實に依つて明瞭である。

凡て健康地に作られた新しい植民地などで住食が十分である場合には人口は常に急速に增加し來つたといふ事は廣く一般に注意せられたことである。第一二世紀の頃古代希臘人の作つた植民地の多くは、却つて本國に頡頏し之れを凌いだやうに見える。シシリのシラキュース(Syracuse)とアグリヂェンタム(Agrigentum)、伊太利のタレンタム(Tarentum)とロクリ(Locri)、小亞細亞のエフェサス(Ephesus)とミレタス(Miletus)等は傳說に依つて考へると、少くとも古代希臘都市の何れに比しても劣らなかつた。是等希臘人は野蠻人未開人の住居せる國に植民し、十分の沃土を得たのである。イスラエル人がカナーンの國を彷徨へる頃には人口はあまり增加しなかつたが、一たび埃及の豐饒な地方に落ちつくに至つてからは、其の埃及を去る迄の間、十五個年毎に人口を倍加したといふことである。併しこんな遠い

昔の事例を擧げる迄もなく、米國に於ける歐洲植民人の場合を考へて見ても上の說が眞理であることを證據だてる。殆ど何等の努力を要せずして豐饒な土地を十分に得るといふことは人口增加の有力な一因であつて、之れに對しては一般にあらゆる支障妨害も其の力を失ふのである。メキシコ、ペル、クィト(Quito)に於ける西班牙の植民地ほど惡い統治の下に置かれたところは世界に類がない。母國の虐政、迷信、惡德は其の植民人の間にあまるほど輸入せられた。法外な稅金は皇室に依つて課せられ、其の貿易には勝手氣儘な制限が加へられ、而も出さき總督等は其の主人の爲めに苛斂誅求を逞ふすると同樣に又自身のためにも同一の手段を取ることを忘れなかつたのである。かゝる困難があつたにかゝわらず、しかし人口は迅速に增加した。例へば印度人の一部落に過ぎなかつたクィトは五十年よりもつと以前既に五六萬の人口があるとウーロア(Ulloa)に依つて報告せられた。同人の記する所に依ると征服後に創始せられたリマ(Lima)は一七四六年の大震災以前、既に其の位の或は其れ以上の人口を持つて居たのである。メキシコは現在十万の人口を有するやに傳へられるが、西班牙記者等の誇張があるに拘らず、モンテズマ時代の人口に比して五倍に上つて居ることと想像される。

ブラヂルのポルトガル植民地も上述西班牙植民地と同樣な壓制的支配を蒙つて居るのであるが三十年前既に歐洲系統の住民六十万と算せられた。

和蘭及び佛蘭西の植民地は、全然營利的な會社の經營下にありながら、凡ての不利不便にもめけずに繁榮しつゝある。

英國の北米植民地、即ち今日有力な北米合衆國民は人口の增加といふ點に於いて遙に凡ての他の國々を超越し來たのである。彼等は西班牙、葡萄牙の植民地と共通に、十分の沃土を持つて居た以外に大なる自由と平等とを與へられたのである。其の海外貿易は多少の制限を蒙つて居たに相違ないが、彼等は內政に關する自由を持つて居た。當時の政治的習慣は財產の讓渡分割に好都合であり、一定時期間持主の耕作せぬ土地は他人に讓り渡されると布告されて居た。ペンシルヴェニアには長子相續權といふやうなものなく、ニュー・イングランドに於ては長子は單に二單位の分配を受くるのみであつた。何の州に於いても十分一稅などの定めはない、否稅と稱すべきものは殆どなかつたのである。而も肥沃な土地が極端に安價で、其の位置は穀物の輸出に適好であるから、苟も資本がある以上農業に投ずるのが最有利であつた。況や農業は同時に最多く健全な仕事を與へ、社會にとつて最貴い生產物を供給するに於いてをやである。

是等好都合な事情が一つになつた結果として北米合衆國の人口は歷史上未曾有な急速な進步

をなした。北部諸州の人口は二十五個年で皆二倍となつた。一六四二年ニュー・イングランドの四州に植民した人口は二一、二〇〇であり、其後の計算に依ると此の四州から出た人數は入つた人數よりも多いといふことである。しかも一七六〇年には其の人口は五十萬に增加した。かういふ譯で其の人口は二十五個年に倍加したのである。ニュー・ヂャーシーでは倍加の期間は二十二年であつたらしく、ロード・アイランドでは其の期間は一層短かゝつた。奧地では住民は農業に專念して贅澤といふ事は與り知らなかつたのであるが其の人口は十五個年で倍加したと想像される。第一に植民された海岸地方では其の期間は約三十五年であつたが、或海岸都會では全く增減がなかつたのである。最近米國の國勢調査に依ると、凡ての州を綜合して其の人口は矢張二十五個年間に倍加しつゞけて居ると思はれる。今や米國の全人口は歐洲よりの移民に依つて何等大なる影響を受ない程度までも增加して居るのであるし、又或沿岸の都市或は地方に於いては人口の增加は比較的緩慢であつたのだから、一般內地に於いては出產のみより生ずる倍加の時期が二十五年よりも著しく短かかつたに相違ない。

第四回國勢調査の結果に依れば一八二〇年に於ける北米合衆國の人口は七、八六一、七一〇で、米國の人口が之れだけ增加するまでには英國は多少の男女移民を米國にとられた譯であるが、此のため英國の人口が現在に於いて大に減損して居ると考ふべき理由はない。反對に或

程度の移出民は却つて母國の人口に好結果を與へるものであると。西班牙の二省——米國に最多數の移民を送り出した二省が、其の結果一層人口を增加したといふことは殊に人々の注意を惹ける事實であつた。

さて初め米國に移住し終に今日の大人口を形成するに到つた英國人の數が幾何であるかといふことは姑く措いて、此處に疑問は何故其の同數が英國に於いて同一時期中に同一の增加を示さないかといふことと之れである。明瞭な理由は食物の缺亡といふ一事に歸する。而して又此の食物の缺亡といふことが私が先きに凡ての社會に存在すると論じたところの人口に對する三妨害の最有力な原因であることは、古い國家でも戰役、疫病、饑饉等の荒廢、或は天災から恢復することと速かなる事實に省みて明瞭である。蓋是等事變の爲社會は多少新植民地と同一の境涯に置かれ、其の結果として又新植民地に於いて豫期せられるやうな結果に到達するのである。卽ち若し他の事情のため住民の勤勞心が傷はれないとすれば、食料は減少人口の需要以上に增加し、其の必然的結果として、從前恐らく殆ど增減のなかつた人口も忽ちに增加を始め、以前の人口に達するまでは其の進步を繼續することであらう。

肥沃なフランダー地方は數年置きに最悲慘な戰場となつたが、しかも常に豐饒で人口稠密で

あつた。佛蘭西の人口が減少せぬことは之れ又最適切な一例である。スースミルクの表は大なる死亡數があつた後に頗る急激な人口增加を伴ふといふことの反復的例證であり、前掲プロシヤ及びリスアニアの統計は此の點に於いて殊に顯著なるものである。一六六六年倫敦を襲つた例の大黑死病の結果は十五年二十年の後にはもはや認めることが出來なかつた。土耳古と埃及とが週期的に襲來した黑死病の爲大に人口を減損したか否かといふとすら疑はしい。是等國家に於ける住民數が昔に比して大に減少して居るとすれば、其れはむしろ黑死病のためではなくして政府の暴虐壓制のためであり、其の結果たる農業挫折のためである。支那、インドスタン、埃及及び其他に於ける最悲慘な饑饉の影響も忽ち消滅するのが常であつた。火山の爆發、地震といふ如き最恐ろしい天災でも、其れが屢々繰返されて住民を逐ひ、或は其の勤勞心を破壞せぬ限り、其の國家の平均人口に對してはあまり大した影響を及ぼさぬものである。

各國の記錄から考察すると、人口の增加は惡疫と流行病の不規則な週期的襲來に依つて阻止せられたやうに見える。ドクトル、ショートは其の死亡證明證研究といふ奇妙な研究中に屢々『過剩人類の恐るべき矯正』といふ言葉を用ひて居るが、氏の集め得たる黑死病、疫病、饑饉等に關する統計中に於いて、氏はかゝる作用の常に又普く行はれて居ることを示す。

表中に列擧された流行病の年、卽ち黑死病或は他の激烈な傳染病（氏は輕い流行病をば表中に入れないやうである）が流行せる年は四百三十一個年で、中二十三年はクリスト紀元前の出來事である。其れで紀元後の年數を三百九十九で割ると、上述疫病の襲來は每四年二分一であるやうに思はれる。

又表中列擧の大饑饉年二百五十四中、十五は紀元前の事に屬し、アブラハムの時代にパレスタインに發生したものを其の端緒とする。若し此の十五年を引き、其の殘數で現在の紀元年數を除すると、饑饉襲來は每七年半の期間を置くものと見える。

是等の『過剩人口に對する恐ろしき矯正』がどの位の程度まで、急激すぎる人口の增加に因つて惹起せられたかといふ問題は精確に決定すること至難な點である。吾々の病氣の多くは原因不可解で、其れは恐らく種々錯雜せるものであらうから或一つを過重視するのは亂暴である。けれども是等の原因の中に密集せる家屋と不十分不健全な食物とを數へるといふことは必しも不當ではないと思ふ。而して此の二つの原因は人口が住居と食物との供給以上に增加せる自然の結果である。

吾々の所有する惡疫史は殆ど凡て此の假定を裏書きする傾きがある。何故かと云ふと一般に惡疫の最猖獗を極めるのは下層階級であるといふ事を記して居るからである。又ドクトル、ショー

トの表中にも此の事は明記されてある。尙又惡疫流行の年は多く引續き、若くは同時に食物の不足不良な時季を伴ふやうに思はれる。他の部分に於いてドクトル、ショートは激烈な黑死病が、殊に下層民卑賤民の多數を殺すことを記し、且つ種々の疾病に付いて論ずるに當り、氏は不良不健全な食物に因つて惹起せらるる疾病が最長期に亙るものであるといつて居る。

吾々は不斷の經驗からして、熱病が吾々の牢獄、工場、密集せる授產場等の中に、又或は大都會の狹い鎖された市街に於いて發生することを知つて居る。思ふに是等の境地は其の人々に及ぼす結果に於いては貧窮と同じで、此の種の原因が勢を得て、昔歐洲諸國を屢々襲擊したあの黑死病の發生と流行とを助長したものであらう。而も今日に於いては是等原因は大に除去せられたため、到る所黑死病は大に減じ、多くの地方に於いては全然其の迹を絕つに至つたのである。

人口過多に對する他の大なる天警卽ち饑饉に付いていふと、其の本然の性質からして人口の增加が單獨に其の原因となるものではない。人口の增加は假令急速であるといつても漸を追ふて來るものである。而して人體は食なしには一日でも生きられないから、從つて人口は食糧の支持し得る範圍以上に增加することが出來ない。かく人口の增加は其れだけで單獨に饑饉を發

生せしめはしないけれども、其れは饑饉の發生に對して途を開くものであり、下層民をして最少量の食物で吾滿せしむる結果、不作のため食物が僅か不足しても終に之れを大饑饉の年たらしむるのである。從つて此の意味から云へば人口の增加は饑饉の主な原因の一つであると云つても差支ない。而して饑饉の前兆としてドクトル、ショートは一年若くは數年の豐作を擧げて居るが其れは恐らく正しい見解であらう。蓋物資が豐富で廉價であると其の一般的結果として、大に結婚を奬勵することとなり、かゝる狀態下に在つては或年の農作が平年作であるといふことすら食物不足を生ずるかも知れないからだ。

天然痘は歐洲に於いて盛に流行し、最多くの人命を奪つて居り、又其の流行は多くの地方に於いては規則正しくあるに相違ないが、尙之れを豫測することは至難である。ドクトル、ショートの說に依ると此の疾病は其の歷史に鑑み、過去或は現在の天候季節に關係するところ少く、常に存在し、又如何なる天候下に於いても存在す、但嚴霜時に於いては多少流行の度を減ずと。吾々は天然痘が明に如何なる境遇下に發生したかといふ實例を知らないから、貧困と密集家屋が單獨に其れを生じたとは斷言はしない。しかし其の流行が週期的で、而も小兒殊に下層階級の小兒間に猖獗を極めるところに於いては、是等の事情が天然痘の發生に先立ち、且つ之れを伴ふと斷定して差支ないやうに思ふ。卽ち其の襲擊後小兒の平均數が增加し、從つて人々

は貧困になり、從つて又家屋は一層密集的になり、終に次ぎの流行期に及んで此の剩餘人口が除去せられるといふ順序である。

凡て是等の場合に於いて、人口の理論が實際病氣發生に對して大なる影響を及ぼして居ることを否定せんとする論者でも、人口增加が傳染を助長する原因となり、其の蔓延と禍害とに油を注ぐものであることは認めざるを得ないのであらう。

ドクトル、ショートの說に依ると、猛烈な致死的傳染病は羸弱な體質の大多數を亡ぼしてしまうものであり、從つて其の後では一般に非常に健康な狀態を出現するとのことであるが、之れに對しては尙他の理由を擧げ得ると思ふ。卽ち食住が十分となり、從つて下層民の狀態が大に改善せられるかるである。又博士の說に依ると大に多產的な年のあとには非常な疫病年が續き、疫病の年のあとには異常に多產的な年がつゞくことがあり、恰も自然は人命の損失を防ぐか或は急速に之を回復するか、何れかを欲して居るやうに見えると。一般に疫病の年の翌年は殘存せる產殖能力者の數に比して出產數の多いものである。

此の最後の事情はプロシヤとリスアニアの統計中に最著明に例證されて居る。該表及びストスミルク氏の他表に依つて考へると國の生產物が增し、勞働に對する需要が增加して勞働者の生活狀態が改善せられ、其れが結婚を奬勵すると早婚の風習が繼續せられ、終には人口の增加

が產物の增加を追ひ越すことになり、疫病が自然に而して又必然的に起るやうになるものらしい。歐洲大陸の統計は人口增加が右の如く致死的疫病に遮害せられた多數の實例を示すのであるが、之れから次の如く推論されるやうに思はれる。卽ち國の食料が人口增加を惹起する程度に增加し、而も增加人口の一切の要求を完全に滿すには尙不十分である場合には、增加人口が食料の平均產出額と一層つりあいのとれる場合に比して、週期的傳染病に襲はれる危險が一層多いのである。

此の逆も勿論眞理である。週期的疫病に見舞はれる國々に於いては其の中間の人口增加、或は死亡に對する出產超過は、かく屢々疫病に惱まされぬ國々に於けるよりも大きいのである。例へば土耳古、埃及が最近一世紀間週期的黑死病襲來の間に於いて、平均人口に殆ど增減がなかつたとすれば、其の出產數は英佛等諸國に比し、更に多く死亡數を超過して居たに相違ないのである。

是等理由のため、現在人口の增減率を基礎として作られた未來の人口の概算といふものはあてにならぬ。サー、ウィリアム、ペチー（William Petty）は倫敦の人口が一八〇〇年に五百三十五万九千になるであらうと豫算したが、事實今日の人口は五分一以下である。イートン氏（Eaton）は最近次の一世紀に

於いて土耳古の人口が消滅すると豫言したが之れも確かにあてにならぬ。若し米國が次の百五十年間今日の增加率を繼續するならば、其の人口は支那の人口をも超過するであらう。私は豫言の危險を氣付きながらも、五六百年後は知らず、百五十年後に於いてはかゝる事は起らないと斷言する。

歐羅巴は昔は現在に於けるよりも黑死病並に激烈な疫病に襲はれたこと疑を容れない。而して昔の著者等の多くが死亡に對する出產率を過大に見積もつたのも大部分は之れが爲めである。蓋し當時に於いては兩者の割合をとるのにあまり短い期間を基礎とし、一般に黑死病の年を偶然の事として計算より除外するのが常であつたからである。

最近一世紀に於ける英國の死亡對出產の平均率は一〇對一二、卽ち一〇〇對一二〇と考へてよい。一七八〇年に終る十個年を通じ佛蘭西に於ける比率は約一〇〇對一一五であつた。是等比率は勿論一世紀間には變遷があつたに相違ないが、其の程度にはあまり大した相違がなかつたと信ずべき理由がある。其れ故英佛兩國の人口は多くの他の國々に於けるよりも各自國の食物平均產出額と一層よく調和し來つたものと見てよからう。豫防的妨害の作用、――戰役――大都市、工場等に於ける人命の暗默の、併し確實な毀損――貧民間に於ける密集的生活と不十分な食物――は人口が食糧以上に突破することを妨害する。若し私が初めには確かに奇妙だと

思はれるに相違ないところの言葉を用ゆるならば、以上に揭げた諸種の原因は激烈な大疫病の必要に代はりて過剩人口を撲滅してくれるのである。反之若し黑死病が英國で二百萬の人口を、佛蘭西で六百萬の人口を奪ふと假定すれば、此の患害一過後、最近一世紀間に於ける是等兩國の平均をば遙かに超過するが如き死亡對出產比を現出するであらう。

ニュー・ヂャージーに於ける死亡對出產の割合は一七四三年に終る七個年の平均に於いて一〇〇對三〇〇であるが、英佛に於いては一〇〇對一二〇以上とは見ることが出來ぬ。此の相違は驚嘆に値するほど大きいけれども決して天が奇蹟的干涉を試みたがためではない。其の原因は隱微でなく潛在的でなく、神祕的でもなく、吾々に近く、其の周圍にあり、苟も研究心ある者の眼に對しては一目瞭然たるものがあるのだ。神の力といふ直接の要因がなければ一個の石も地には落ち得ない。草は成長し得ない。かく信ずることは最自由な哲學的精神と合致する。是等自然の作用は經驗の敎ふるところによると、しかし又常に一定の法則に從つて行はれるものであり、而して人口增減の原因も、開闢以來恐らくは吾々の知れる他の自然法と同樣に不斷に働いて居たものに相違ない。

男女間の性慾といふものは如何なる時代に於いても殆ど同一の强さであつたらしい。卽ち幾

何學の言葉でいへば一定量であつたと見てよからう。然るに或國人口が、其の生產し或は獲得し得る食物以上に增加することを阻止するところの必然法は、吾人の眼前には働いて居るのであり、一寸とでも之れを疑ふことが出來ぬほど吾々の理解に明瞭である。なるほど自然が過剩人口を制遏する爲にとる方法は吾人の眼には必しも的確に又規則正しくは映じない。即ち吾々は其の作用する方法に付いては必しも之れを豫知し得ないけれども、其れが作用する事は之れを豫言することが出來るのである。若し死亡に對する出產の割合から打算して、或る國の人口增加率が數年間其の國の食料增加率以上に及ぶならば、吾々は完全に次の如く斷言することが出來る。即ち移住が行はれなければ幾何もなく死亡數が出產數を超過するに至るべく、右の數年間に於ける人口の增加は其國人口の眞の平均增加ではあり得ないと。かゝる場合、若し他に人口減少の原因がなく、又豫防的妨害が非常なる勢で行はれないとすれば、あらゆる國は週期的の疫病及び饑饉に襲はれること疑を容れない。

かく觀察して來ると一國人口の眞の又永久的な增加に對し唯一の眞標準は食物增加といふ一事に歸する。而して此の標準も多少の變差を免れないが、併し其の變差消長は人口其ものの消長に比し吾々の眼に映ずること一層明瞭である。或國の人口が無理やりに增加せしめられたといふことは其の國民が習慣に依り漸次最少限度の食物で生活するやう慣らされたことに依つて

推定が出來る。即ちかゝる國々に於いては或期間を通じ食物の增加がなかつたに拘らず人口が絕えず增加して行つたことがあるに相違ない。支那、印度、遊牧アラビア人の占有せる或る地方は何うも此の記事の適例であるやうに考へる。是等國々の平均產出額は住民の生命を漸く支へ得る程度のもので、多少でも不作があると餓死を免れないのである。

勞働者の所得が非常に多い米國に於いては下層民は凶年の場合よほど節約をしても實際生活上差支なく、饑餓といふことは殆んどあり得ない。併し今後人口が增加すれば勞働者の所得も終には大に低減すると見るべきであらう。即ち此の場合に於いては人口は食物の比例的增加を伴はずして增加するのである。歐羅巴諸國に於ける住民數と食物消費量との割合には多少の差異があるが、其れは生活の習慣が違ふために生ずるのである。例へば南英吉利の勞働者間には良質の小麥麪包を食ふ習慣が根强く、彼等は殆ど餓死するにあらざれば蘇格蘭の小作人のやうな生活に甘んぜないであらう。

彼等は恐らくいつかは苛酷な自然法といふものの作用に依つて支那の下層民のやうな乏しい生活をもなすに至るであらうし、又其の時になれば同一食量を以つてより大なる人口を支持することにもなるでもあらう。しかし此處まで來るには非常な困難が伴ふわけで、苟も人道を念とする者ならばかゝる事態の未然に豫防されることを希望するであらう。

予は生活資料の比例的增加を伴はずして人口が永續的に增加する二三の場合を記載した。しかし食物と之れに依つて支持せらるる人數との間の國に依る差異にも越すところの出來ない一定の限度があるといふことは明である。而して如何なる國家でも、苟も其の人口が對絕的に減少しつゝあるのでない以上、其の食物は必や勞働者階級を支持し持續せしむるに十分でなければならぬ筈である。

若し他の條件が同一であると假定すれば、人口は食物量に正比例するものであり、其の幸福は食物の分配せらるる分量、換言すれば一日の勞働の代へ得る食物量に正比例するものであると斷言してもよい。小麥產出國は牧場國よりも人口多く、米產出國は小麥國に比して更に一層人口に富む。併し彼等の幸不幸は人口の厚薄に依つて定まるのでなく、又富の程度、年齡の老若に依つて定まるのでなくして、人口と食物とが相互に有する割合に依つてきまるのである。

此の割合は一般に新植民地に於いて最好都合なものである。古い國家の知識と勤勉とが新しい國家の豐饒な而も誰の私有でもない土地に加へられるからである。其他の場合に於いては國家の新舊といふやうなことは此の點に對してあまり重大な事ではない。例へば英國は舊い國であるが其の食物は恐らく二千年三千年四千年前に於けるよりも現在の方がより十分なわけ前で

分配せられて居る。而して他方に於いては蘇國高地の貧弱な人口稀薄な地方は歐羅巴の最人口稠密な地方に比し一層多く人口過多のために惱まされつゝある。

若し或國が文明の一段進步した國家に依つて侵略せらるることなく、全く其れ自身の文明的進步のまゝに放任されると假定すると、其の生產を一單位と考へ得る時から一百萬と考へ得る時迄、數千年數萬年の間、たゞの一時期でも大多數の國民が直接或は間接に食物不足のために生ずる困難から惱まされなかつたといふ時期はないであらう。歐洲諸國の何れでも歷史あつて以來、數百萬の人口は此の單一の原因のため制遏せられて來たのである。もつとも是等諸國中の或ものに於いては絕對的の饑饉といふものは未だ曾て經驗せられなかつたかも知れないが。

果して然らば人間の歷史を仔細に研究する者は、次の事柄を認めずには居られないではなからうか。曰く、時代と國とを問はず、

一、人口の增加は生活資料に依つて必ず制限せられる。

二、人口は有力明白な妨害に依つて阻止せられなかつたならば食糧が增加すると同時に必增加する。

三、是等の妨害、卽ち人口を生活資料の標準に抑止する妨害は道德的抑制、罪惡及び貧困である。

第一卷　人口增加に對する種々の妨害に就いて・

本書第二編に研究の題目となれる國々を、第一編に於いて記述せる國々の社會狀態と比較するに（註1）、近代歐洲に於ける積極的妨害は、過去の時代に比し、或は文明の程度の遲れた國々に比して少く、豫防的妨害は正に其の反對であるらしく見える。

戰爭は野蠻人間に在つては最有力な人口妨害であつたが、最近の不幸な革命戰爭を考慮の中に入れて考へて見ても大體上確かに少くなつて居る。他方に於いては身體は淸潔にせられるやうになり、都市の計畫竝に淸潔法も改善せられ、更に又經濟學の知識が進步せる結果として土地產物の分配法も一層公平になつたがため、黑死病、疫病、饑饉といふやうなものは確かに緩和せられ又其の發生も以前ほど頻繁ではなくなつた。

而してかの豫防的妨害といふ事に付いて考へると、道德的抑制といふ部門に屬する此の方法は現在では男子の間にはあまり多く行はれて居ないやうであるが、しかも本書第一編中に表はれた各國（註1）に比すれば尙多く行はれて居ると確信する。而して之れを女子の側から觀察すると、近代歐羅巴に於いては此の德を行ひつゝ其の生涯中のかなり長い期間を送る者の割合が昔時に比べて、或は又文明の遲れた國民に比べて遙に多くなつて居ること疑を容れぬ。其れは兎に角として、此の道德的抑制を主に結婚の結果を商量して之れを延期するといふ一般的の意味に考へるならば、近代歐羅巴に於いて、人口を食物の標準に抑止するところの妨害中、最

有力なものであると云つても差支ないであらう。

（註1）著者は其の立論の憑據を古今の國々に求めるため、原著第一卷には比較的文化の遲れた國々若くは古代の社會を觀察し、第二卷にて近代歐洲諸國の狀態を概觀した。卽ち第一卷に記載された國民は印度人、南洋土人、古代北歐人、近代遊牧民、亞弗利加人、南北西伯利人、土古耳及び波斯人、インドスタン人、西藏人、支那及日本人、希臘人、羅馬人といふ順序であり、第二卷に記載されたのは諸威、瑞典、露西亞、中歐諸國、瑞西、佛蘭西、英吉利、スコットランド、及びアイルランド等の國民で、著者は其の各々に付きて人口妨害が如何に作用せるかを檢討せんとしたのである。私は本書のあまりに大部になることを恐れて、序文に記して於いた通り、しばらく之を割愛したのであるが、いつか此の部分の飜譯をも添へて本書の全譯としたいと考へる（譯者）

第二卷

人口理論より生ずる弊害に關し、
社會に提供せられ或は流行せる、
種々の制度と方法

第一章　平等主義論

ウォレィス——コンドルセ
Wallace　Condorcet

予が今迄論じ來つたところに照して人類の過去及び現在の狀態を考へる者にとつては、人間及び社會の完全性を論ずる論者等が、人口の原則に關する議論を取扱ふこと頗る輕く、之れより生ずる困難をば測定し難い遠い將來の事であるかのやうに見るのは驚かざるを得ない事柄である。ウォレィス氏(Wallace)の如きすら、人口理論が自分の平等主義を根柢より覆へす程に重大なものであると考へながら、尙此の原因から來る困難は遠い未來の事に屬し、全地球が花園の如く耕作せられ、もう之れ以上の生產は不可能であるといふ狀態に到つて始めて之れに面接するのであるとした。若し果して左樣であるとするならば、而して又美しい平等主義が、其れ迄の間實行し得るとするならば、平等社會の實現に對する人々の熱心は、かくばかり遠い未來の困難を豫想することに依つて挫折せしめらるべきでない。蓋かゝる遠き未來の事は神意に任せて置いて差支ないからだ。しかし事實はさうでなく、若し本書中の意見が正しいとすれば、人口の理論よ

り發生する困難は遠い未來どころか、正に大に切迫し卽刻の事となつて居るのである。全世界が現在から花園の如く美しくなるまで耕作せられるとして、其の間のあらゆる時代を通じ、食物の缺乏は假令平等主義が行はれるとしても不斷に全人類を脅かすであらう。地球の生產は年年增加するとしても、人口は其れよりも更に一層急激な增加をなすべく、此の優勢は道德的抑制、罪惡、或は貧乏の週期的若くは不斷的な作用に依つて必や阻害せられるに相違ないのである。

コンドルセ氏の人心進步略史(註1)は彼を死に到らしめたところの慘酷な窘逐の壓迫下にかれたといふことであるが、若し此の書が彼の生存中に讀まれ、自分に有利なやうに佛蘭西を動かすの望もなくして書かれたとすれば、之れこそ人間が日常經驗とは矛盾するところの主義——殊に彼にとつては生命に關するほど矛盾するところの主義を、命がけで愛した一個の珍らしい實例である。世界第一の文明國の一たる佛蘭西人の精神が、忌はしい情慾、恐怖、慘忍、惡意、報怨、野心、狂氣、痴愚等、最野蠻な時代の最野蠻な國民ですら恥とする如きかゝる劣情に沸騰するといふことは、人心の必然的な不可抗的な進步發展を信ずる彼に取つては恐ろしいショックであつたに相違なく、一切の皮相的事實が之れに反するにかゝわらず、眞に自分の義に忠主なるものでなければ、何うして之れに堪ゆることが出來ようぞ。

此の遺著は彼が計畫實行を期したところの大著述の概略であるから、理論の眞實を證明すべき詳細と適用とを缺いで居る。こゝでは此の理論が、空想でない實際の事情に適用せられる場合、之れと全く撞着するといふことを示すために二三言を費すだけに止めて置かう。

コンドルセ氏は其の書の最後の部分、卽ち將來の人間が完全性に向ふ進步を論ずる部分に於て、歐洲の文明諸國民間の實際人口をば其の國土の廣さと比較し、且つ其の農耕、產業、分業生活資料等を觀察して曰く、吾々が同一の生活資料と同一の人口とを保存せんとすれば、必やここに自己の勤勉によるにあらざれば缺乏を滿し能はざる多數の人々を生ぜしめるであらうと。

氏はかゝる人々の一階級が又發生すべきことを認め、且つ全く其の家庭の主人公の生命と健康とに依つて生活する家庭の覺束ない收入に言及して、次の如く至極尤な斷定を下して居る。

果して然らばわが社會の最多數の而して又最活動的な一階級を常に脅すところの不平等、倚賴、貧困の必然的原因がこゝに存在する譯であると。

此の困難は實際存在し、氏の斷案は至當である。が是れが芟除に對する氏の方法は恐らく全く無效のものと考へられるのである。

氏は人壽と金利とに氏の計算を適用することに依り、提言して曰く、宜しく基金を設け一部

分は自分の昔の貯蓄によつて、一部分は同一の犧牲を拂ひつゝ其れより生ずる利益を享受することの出來る前に夭折した人々の貯蓄によつて、救助を老人に與ふるの制度を設くべしと。此の基金或は之れと同樣の基金は、又夫及び父を失へる婦人小兒をも救助すべく、又結婚年齢に達した人々に對しては、其の產業の發展に必要な資本を提供すべきであるとした。氏は是等施設は宜しく之れを社會の名に於て、其の保護の下に設くべしと云ひ、更に說いて曰く其の計算を誤らなければ信用を大資產家の獨占的特權から開放し、而も之れを同一に堅實な基礎の上に置くことによつて、而して又產業の進步と商業の活躍とを大資本家に倚賴すること少からしむることによつて、一層完全な平等的狀態を保持するの手段が發見せられであらうと。

かゝる施設と計算とは紙の上に於ては頗る有望に見えるけれども一度びこれを實生活に適用すると其の全然無價値なることが明白となる。コンドルセ氏は全然自己の勞働に依つて自ら支持する一階級の人々があらゆる社會に必要であると認める。何故であるか。增加人口のため食物を得るのに不可缺な勞働は、必要といふ刺戟がなければ行はれぬといふこと以外、他に相當な理由を求めることが出來ぬ。然るに今氏が計畫通りの制度が出來て、勤勞に對する刺戟がなくなると假定する。又なまけものが其の信用に於いて、又妻子眷族の扶養に於いて活動的勤勉

者流と同一の立場に置かれると假定する。果して然らば人々は自己の狀態を向上改善せしむるための大活動、現在國家繁榮の大機緣となつて居る大努力をなすであらうか。若し各個人の要求を審問することが出來るとし、彼等が果して極度の努力をなしたか否かを決定し、其の結果に依つて救助し、或は之を拒絕すること、したならば、其れこそ英國の救貧法を更に大規模に繰り返へすと異ならず、眞の自由平等主義は之れがため全く破壞せられるであらう。

今一歩をかし、該制度に對する右の大妨害は姑く之を措くとし、又該制度が生產上何等の妨害を齎らさぬものと假定しても、尙茲に最大の困難が殘るのである。

家族に對して相當の食物が又與へられるとの保證が立てば殆ど凡ての人が家族を持つに相違なく、靑年が貧困に對する畏怖から救はれるならば人口は異常な速力を以つて進むであらう。流石にコンドルセ氏も十分此點には留意して居り、一層立ち入つて救濟の方法を記した後、次の如く論じて居る。曰く。

しかし產業と幸福とがかく進步すると時代毎に益々享樂を增大し、其の結果、人間の肉體的構造に因りて人口の增加を見るに到る。果して然らば等しく必然的な是等法則が互に相撞着するやうな時代が來ないであらうか。人口の增加が生活資料に越え、其の必然的結果として幸福と人口とが絕えず減少する退化の時代か、然らずんば少くとも進步と退步の間

に徘徊する動搖の時代か、何れかに逢着しないだらうか。而して此の動搖は週期的貧困の襲來する原因となるのではないか、其れは又人間社會の改良が不可能となる限界を示し、人間の完全性に對する限界點、卽ち人間が何日か達し得るとしても決して之れを通過し得ないところの其の限界點を指示するものではないか。

氏は又曰ふ。

かゝる時代が吾々から如何に遠いものであるかといふことは識者を俟たなくとも分る。しかし吾々は果して之れに到達するのだらうか。今日吾々が其の概念すらも持ち得ないほどの改良進歩を、人間が爲し遂げた時に始めて發生し得るやうな事柄に對しては、吾々は將來其れが實現されるとも、將た又實現せられないとも明言し得ないのであると。

人口が食物を越えた際に如何なる情態を出現するかといふ事に關するコンドルセ氏の想像は間違つては居らない。氏のいふ動搖は必や起るに相違なく、其れが又週期的貧困の不斷的原因となるべきことも疑を容れない。たゞ私のコンドルセ氏と意見を異にする一點は其れが人間に適用せられる時期に關してである。氏は其の時期は頗る遼遠な未來の事であるといふ。一定地域内に於ける人口と食物の自然的增加の割合――其れは予が既に此の論文の始めに記した、人間進歩の各階段に於て常に存在する貧困といふものから推知せられるのであるが――が多少で

も眞理に近いものであるならば、人口が氣樂な生活を送り得る程度の生活資料を越える時代は、氏の考へるところとは反對に、既に夙うに到着して居るやうに見える。而して氏の言ふ必然的動搖、週期的貧困の不斷的原因は、有史以來大多數の國に存在し、現に今日に及んで居るやうに思はれる。

併しコンドルセ氏は更に其の議論を進め、氏が認めて以てしかく遼遠と見做すところの時代が來ても、人類は而して又人間の完全性を信ずる人々は決して驚くに當らないと云つて居るが、之に伴ふ困難を芟除せんとする其の方法論に到つては予は實のところ諒解し難いのである。氏は迷信より生ずる笑ふべき偏見は其の時代までには道德の上にあやまれる影響を與へることがなくなると云ひ、亂婚と、而して又之れと同樣の不自然な或他の方法が行はれて出產を阻害すべきことを暗示して居る。併しながらかゝる方法に依つて困難を除くといふことは、大多數の人の所見によれば、平等論者及び人間の完全性を主張する人々が其の理想とし目的とするところの美しき道德と習俗の純潔を害することになるであらう。

コンドルセ氏が最後に檢討せんと企てたところの問題は人間の肉體的完全性であつた。曰く、從來既に與へられた證據が、現在に於けると同一な人間の自然的能力及び肉體的組織の基礎の

上に無限の完全性を樹立するに十分であると假定せば、此の肉體と是等自然的能力が改良せられ得るものとして其の確實性は如何。卽ち吾々の希望は何處までを限度とするかと。

之れに對し、氏は醫藥の改良、一層健康に適する住食の使用、適度の運動に依つて體力を練り、過度の運動に依つて體力を損はざる如き生活を送ること、人間墮落の二大原因（卽ち貧困とあまり富有な生活）を破壞し去ること、生理的知識の進步に依つて漸次傳染病を驅除することと等を擧げ、推論して曰く、人間は絕對的に不死となることは出來ないとしても其の自然的出產と自然的死亡との期間は絕えず延長し、之れを限定することが出來なくなり、無限といふ言葉を以つて表はすのが適當なやうになるであらうと。而して氏は無限といふ言葉を定義して、其れは無窮といふ域には達せずして絕えず之れに接近するか、或は壽命が限定し得る以上、絕大に延長せらるることかを意味するものであるとした。

併し是等の何れの意味に於ても此の言葉を人壽に適用するのは最非哲學的であり、自然法の全然許さぬところである。なるほど壽命の相違は種々の原因から來るが、其れは無限の規則的延長を意味せない。氣候の適不適、食物の養分、風俗の善惡等種々の原因から平均壽命は或度まで差異を生ずるが、有史以來人壽が多少でも長くなつたか否かに付いては明に疑を容れる餘地がある。否各時代に於ける人々の臆說はむしろこの假定に反して居た。予は世人の臆說に對

してはあまり之れを重要視するものでないが、かゝる臆說が行はれたことは少くとも年齡の著しい延長がなかつたといふことを證明するものではなからうか。

地球は未だ若く、全く幼年時代にあるのだから、人壽の延長もさう速かには表面には顯はれないといふ議論が出るかも知れない。

若し果してさうならば科學はこゝに滅びる外はなく、因果の理法の全系統は破壞せられるであらう。さうなれば自然といふ書物に對して眼を閉じてもよい。何故ならもう之れを讀む必要がないからだ。又最荒唐無稽な臆測でも、最細心の而して最多數の實驗を經て其の上に樹てられた最正當壯嚴な理論と均しく確實なものとして提唱せられてよい譯である。果して然らば吾々は再び哲學的考察の方法を昔に還へし、事實の上に系統を樹てずして、系統のために事實を曲げてもよいことになり、かくてニュートンの偉大な首尾一貫せる理論もデカルトの亂暴偏頗な學說と同一の立場に置かれるであらう。要するに若し自然法といふものが——過去何代かの間不變不易であつた自然法が變轉常なきものと斷定せられ、信ぜられるならば、人間の心は研究に對する刺戟を失ひ、不活潑な昏睡の狀態に陷り、或は迷夢と妄想とに耽るより外に途がない。

自然法と因果律の不易性はあらゆる人智の基礎である。若し變化の起る豫兆がないのに變化の起ることを推測してよいといふことになれば吾々は何んな斷定をしてもよいわけであり、月

が明日地球と衝突すると云つても、太陽が豫定時間に出ると云つても、其れを否定することは、等しく不合理であるといふことになる。

人壽は開闢以來今日まで、延長するといふ些少の永久的兆候もなかつた。しかるに氣候、習慣、食物、其他原因の人壽に對する影響は其の無限の延長を斷定する口實となつた。然らば此の議論の薄弱な基礎は何であるか。壽命は限定が出來ず、其の精確な限界を定め、之れ以上は進み得ないといふ點を明言することが出來ない故に其れは無限に延長する。即ち人壽は無限であり不窮であるとしても差支ないといふのである。しかし此の議論の不法にして誤れることはコンドルセ氏が植物の組織的完全性或は退化性と稱するものを――氏は之れを一般的自然法の一と考へ得るとした――一寸吟味すれば十分である。

家畜の改良家の中には、どんなにでも立派な家畜を欲するまゝに畜養することが出來るといふ原則があるとのことであるが、此の原則は他の原則を前提として其の上に樹てられたのである。即ち家畜の子供中の或ものは親の持つよい資質を一層多く持つといふこと之れである。有名なリスタシャー種の羊を飼養する目的は頭と足の小さいのを得るにあるが、若し此の假定を基として進むと頭と足はいつか漸減するわけである。しかし之れは明白な背理であつて、吾人は前述の假定が謬妄であることを知るのである。即ち吾々はよし其れを見ることが出來ず、又

其の所在を正確に斷定が出來ぬとしても、そこに一定の限度があることを知るのである。此の場合に付いて云へば改良の最大限度、即ち最小限度の頭と足は今之れを限定することが出來ないといふまでで、コンドルセ氏のいふ意味で無限に小でもなく無窮に小でもない。私にはもう之れ以上は改良し得ないといふ極點を指示することは出來ないけれども、其れがどうしても到達し得ないところの點は容易に之れを指示し得るのである。即ち羊の子を何代かへて見たところで羊の足と頭とは鼠の足と頭ほど小さくはならぬと斷言して憚らぬのである。

其れ故動物の間に於いて或子が親のよい資質をば親に比して一層多く持つだらうといふことゝ、云ひかへれば動物は無限に完全に近よるものであるといふのは眞理であり得ない。

野生の草木が美しい庭の花に進歩する事實は動物の間に起る變化に比して一層顯著なことである。しかし其れにしても其の進歩が無限無窮であるといふのは謬妄である。其の改良中最明かな點は大きさを增すことである。花は栽培に依つて漸次大きくなつて來た。若し此の進歩が眞に無限であるならば花の大きさも亦無窮に進むであらう。しかし之れ亦明かな誤りで動物の場合に於けると同じく、よしや其の極點は精確に之れを豫知ることが出來ないとしても、花の改良にも亦一定限度があると云はなくはならぬ。栽培者は恐らく品評會に賞與を得るために强烈な肥料を施して失敗した經驗を持つであらう。しかし同時に又世に最美しいカーネイシャン

やアネモネを見たなどと云ふのも亦僭越の沙汰である。たゞ若し人がカーネイシャンにせよ、アネモネにせよ、如何に栽培しても大きなキャベツほどにはならないといふ分には差支なく、將來に於いても此斷定が覆されるといふことはないであらう。併し事實若し花の大きさが無限に進むものと假定すれば、其れはキャベツよりも大きくなるとも云ひ得るのではないか。同樣に又最大の麥の穗、最大の柏樹を見たとは斷言し得ないが、是等がもう成長し得ない大きさの或點ならば容易に又確實に之れを指示し得るのである。だから無窮の進歩といふことと、單に其の極限を限定し得ない進歩といふものの間には嚴密な區別を置かなくてはならないのである。

草木や動物は何故無限に其の大きさを增し得ないか。恐らく自分の重量で倒れるからと答へられるであらう。しかし何故自分の重量で倒れることが分るか。其れは經驗、卽ち是等物體が構成される力の程度に關する經驗から知る外に途がない。カーネイシャンの莖は其の花がキャベツほどになる迄に折れるであらうが、其れは其の莖の物質が如何に脆弱であるかといふことを經驗したから分るのである。同一大の物質でキャベツほどの頭を支へ得るものも世にはあるかも知れないのである。

植物枯死の理由は現在では吾々には全く分らない。誰れでも何故或草木が一年生で、或草木

が二年生で、又或ものが何百年も成長し得るかを確說し得ない。植物、動物、人間等に於ける凡て是等の事實は經驗上の事である。予はたゞあらゆる時代の不變的經驗が、人體組織の物質の死すべきものであることを證明せるが故に人は死すべきものなりと斷定するのである。

「吾人は知れるものより推理するほか途なし」

と云ふ句さへあるではないか。

人類の壽命が限定することの出來ない方面に進んだこと、又現に進みつゝあることを明白に證明せざる限り、正しい哲學は此の世に於ける人の壽命に關する予の說を變更することを許さないのである。而して予が動物と植物との兩方面より例をとれることは、或部分的改良が行はれ、此の改良進歩の極點が精確に分らぬといふたゞ其れだけの理由で無限無窮の進歩を推論するが如き謬妄を打破し例證せんがためである。

動植物が或程度まで改良進歩し得ることは誰れも疑はない。明瞭判然たる進歩は既に遂げられた。併し此の進歩が無限であるといふのは明に迷妄である。人壽には種々の原因から大なる差異があるけれども、開闢以來人間の體格が有機的に發達せることは明白に確證せられ得るや否や疑問といはなくてはならぬ。故に人間の肉體的完全性を認めんとする議論の基礎は非常に

薄弱で單に推測に止るであらう。しかし其の生殖に注意することに依り、動物の間に於けると同じく、或程度の發達を遂げることは勿論不可能とは見えぬ。智力が遺傳せられ得るか何うか疑はしいとしても、身長、體力、美貌、色艶、而して恐らく長壽も或る程度迄は遺傳し得るのである。唯だ誤謬は多少の發達を可能とする點には存ぜずして、寧ろ多少の發達と、眞に無限な進歩とを混同する點にあるのである。若し此の方法に依つて人類の改良進歩を行ふとすればあらゆる惡人に獨身生活を强いなくてはならない。而も之れは困難な事であるから、結局生殖に對して人種改良的の注意を一般的ならしめることは出來さうもないことである。予の如きは古昔ビカスタフ族(Bickerstaffs)に行はれた以外、此の種計劃の其のよろしきを得たものを知らないのである。

（此の民族は結婚を愼重にし、殊にミルクメードなるモードとの正しい交はりに依つて、民族の皮膚を白くし、身長を高くし、因りて以て民族の身體的大缺點を矯正したといふことである。）

地球上の人類が不死の狀態に近くことの不可能なることをもつとよく證明せんがために、之れ以上更に重大な理由卽ち人壽の延長が人口の理論に及ぼすべき影響を擧げて之れを說くの必要はないであらう。

コンドルセ氏の書物は單に有名な個人の意見としてではなく、又革命初期に於ける佛國文人多數の意見を代表せるものと考へて差支なく、其れは單にスケッチに過ぎないけれども此意味からして注意するの必要がある。

多くの人々は地球上に於ける人類の不死とか或は人及び社會の完全性などといふそんな馬鹿らしい逆說(パラドクス)に對して眞面目に反對するのは、時間と言葉の浪費であると考へるかも知れない。而してこんな根據のない臆測に對するには默殺に限るといふかも知れない。しかし予の見るところは少し違ふ。此の種逆說が器用な有力者に依つて提唱せられた場合、之れを默過して置くといふことは彼等の迷妄を彼等に自覺せしめる所以でない。彼等は彼等の說を以て人智の至り得る極致であり、見解の及び得る廣さの極點であると自惚れて居るのであるから、世人の默過を以て其の精神的努力が貧弱偏狹なるがためと解釋し、世界は未だ自分等の提唱する莊嚴な眞理を受け入れる用意がないと考へるのである。

之れに反し、是等の問題を公平に檢討し、苟も正しい哲學の認むる學說ならば之れを採用するに躊躇せぬといふ態度を示すと、蓋然性や根據を缺ける假定說を樹てることは學問の限界を擴張せざるのみか、却つて之れを縮少するものであるといふことを彼等に敎へるかも知れない。人間の心意を發達せしめずして却つて其の發達を阻害するものであるといふことを敎へるかも知

れない。又彼等の說は吾々を知的發達の幼稚な昔に還へし、最近に於ける哲學的考察の方法――其れの保護の下に於いてこそ科學は近頃急速な進步を遂げたのであるが――に對して其の基礎を薄弱にするものであると彼等に敎へるかも知れないのである。最近種々の空漠放縱な思索が大流行であるが、之れは恐らく科學の各方面に於いて豫期せられざる偉大な發見があつた事に基因する一種の精神的陶醉であると思はれる。かゝる成功に醉うて眩惑せる人々があらゆるものを人間の力で左右し得ると考へることは必しも無理でなく、彼等は此の幻想の下に、眞の發達が證明せられざる事柄と、其の發達が既に顯著確實であると認められた事柄とを混同したのである。若し多少眞面目にして非空想的な思索にふれて醉眼を開かせたならば、彼等と雖、氣長な調査と十分根據ある證明とに代ゆるに荒唐無稽な妄想や何等根據なき臆說を以つてすることに因り、眞理と健全な哲學とが却つて大に傷はれるのだといふことを覺るであらう。

（註1）Esquisse d'un Tableau Historique des Progrès de l'Esprit Humain

第二章　平等主義論

ゴットウィン
Godwin

政治的正義を論ずるゴッドウィンの獨創的著書を讀むと其の文體の元氣と氣魄、或る場合に於ける理論の力と精確さ、其の思想の燃ゆる如き調子、殊に書物全體に一種の眞實性らしきものを與へる態度の印象的な熱心さに打たれざるを得ない。が然し同時に又氏は其の研究に於て正しい哲學の要求する注意を以つて始終しなかつたと評せざるを得ない。氏の結論は其の前提に依つて許されぬところがあるし、自ら持ち出した反對意見を論駁して十分ならざる場合もある。氏は適用不可能な一般的抽象論に賴るところあまりに多く、其の推測も控え目な自然を凌駕せること明である。

ゴットウィン氏の提唱する平等論は一見したところでは從來發表せられた此種の議論の何れよ

りも美しく人の心を引くものであり、理論と信念とのみに依つて行はれる社會の改善は、暴力に依つて行はれ維持される社會變化に比して永久性があるらしくも見える。個人の判斷の無限な使行は主義として壯大で人を魅する力があり、各個人が多少社會の奴隷になつて居る制度に比べれば限りなく勝れたものに相違ない。又社會の大動力大方針として利己に代へるに博愛を以つてするといふことは一寸考へると吾々の要望すべき極致であるやうに見える。要するに氏の描ける美しい繪に對しては歡喜と賞讃の外辭なき次第であり、かゝる時代の實現に對しては熱烈な希望をかけるわけであるが、嗚呼しかし此の時代は實は決して來り得ないのである。氏の理想はたゞ一個の夢であり、空想から出た妖怪である。幸福と不死の「華麗な宮殿」、眞理と美德の「嚴肅な殿堂」は人間の實生活を見、地上に於ける彼等の眞境涯を一考する時砂上樓閣のやうにはかなく消ゆるのである。

ゴッドウィン氏は「政治的正義」第八卷第三章の結論にて人口に付いて說いて曰く、

人間社會には一つの原則が行はれて居り、人口は之れがために常に生活資料の標準に抑止せられる。例へば亞米利加や亞細亞の遊牧民族の間に於いては何代を經過しても人口が土地耕作を必要とする程に增加したことがないのであると。

氏は此の原則をば一種神秘不可思議の原則として記して居り、敢へて之れを研究しやうとも

企てないのであるが、實は其れは一種の必然法であるらしく考へられる。卽ち貧困と貧困に對する恐怖がそれである。

ゴッドウィン氏が其の全著書を通じて抱いて居た大誤謬は文明社會に存在するあらゆる罪惡と貧困とは殆ど皆人間の制度から發因するといふ所にある。彼にとつては政治上の規定とか財產の習慣的制度とかいふものはあらゆる惡行の原因であり、人間を墮落せしむるあらゆる犯罪の苗代である。若し彼の主張する所がほんとであるならば此の世界から完全に罪惡を除くことは絕對的に絕望的な事柄ではなさゝうであり、此の大目的を遂行するには理性が適當な又十分な手段であるやうに見える。人間の制度はなるほど多くの社會的弊害の明白な原因であるやうに思はれ、且屢〻事實さうであつたに相違ないが、しかし是等は自然法と人間の慾情とより來る罪惡の根柢深い原因に比べれば輕微な又皮相的なものに過ぎないのである。

平等主義の利益に關する章下に於いてはゴッドウィン氏は曰ふ。

壓制根性、奴隷根性、盜賊根性等は習慣的財產制度の直接の產物で、何れも等しく知識の進步を阻害する障害であり、嫉妬、惡意、復仇心等は之れと關連して離れることの出來ぬものである。若し人が富有の中に生活し等しく自然の恩惠を受けるやうな狀態の下に於い

ては是等は必ず消滅し、狹隘な利己主義は霧散する。即ち誰れでも自分の少しばかりの貯へを守り、自分の不斷の慾望に對し、苦勞心配をして豫め備ふる必要がなくなるのである。から、一般社會の爲めといふ思想の中に個人的生存といふ觀念を沒してしまうのである。人は隣人に對して敵である必要はない。何故なら相爭ふ目的物がなくなるからである。從つて博愛心は理性の指定するところに從つて絕對權を施行することになる。心は肉體を養ふため不斷の心配をする必要がなくなり、かくて始めて心の本領とする思想方面に於て十分驥足をのばすことになる。又各個人はかくて始めて萬人の研究を資けることになるのであると。

之れは實に幸福な狀態である。がしかし單なる空想で一點でも眞理に近いところはないといふことは讀者の既に首肯せられることであらう。

人は富有の中に住み得ない。あらゆる人が自然の惠を等しく分つといふことも出來ない。若し習慣的財產制度といふものがなければ人は自分の乏しい貯へを守るに腕力を以つてせなければならぬ。利己心は凱歌を揚げ、鬪爭の目的物はいつも世間に存在して絕えぬであらう。又凡ての人は自分の肉體を養ふため不斷の心配をしなければならないし、たゞ一人の智者でも全く思想的方面に沒頭するといふことは出來ないのである。

ゴッドウィン氏が人間社會の實情にあまり注意しなかつたといふ事は過剩人口の處分に關する說を見れば明白である。曰く、

予が人口上の困難を豫想すること遼遠に失するといふ非難が起るかも知れない。しかし居住し得る地球の四分の三は尙未開墾のまゝであり、既に耕作せられた部分でも尙無限の改良を加へ得るのである。だから人口が億兆萬年間增加していつても地球は尙其の人口を扶養して餘力があるのだと。

地球が極度に耕作せられ、絕對的に其の生產を增さなくなる迄は過剩人口から何等の困難も起らぬとする假定に對しては、予は既に其の妄を指摘して置いた。しかしかりにゴッドウィン氏の平等主義が實現せられると假定しても、此の人口上の困難が如何に急速に、そんなにまで完全な社會を壓迫するかといふことを考へて見たい。適用の出來ない理論は正當ではあり得ないからだ。

先づ此の島國に於ける惡德と貧困の凡ての原因が一掃されたと假定し、戰役も爭鬪も其の迹を絕つとする。不健全な商工業が存在せず、群衆は宮廷の陰謀や、商業や、並に又放恣な滿足を求めて不潔な大都會に蝟集せず、單純、健全にして合理的な娛樂が酒と賭博と暴淫に代はるとしやう。如何なる都市でも人間の體軀に有害な結果を齎らすほどは大きくないものとし、此

の地上天國の幸福な人々の大部分は國土表面に散在して村落を作り、或は田園家屋に住むものとする。又凡ての人々は平等で、奢侈のための勞働は終滅し、必要な農業勞働は萬人等しく廿んじて之れを分つとする。而して此の島國の人數と生産物は現在と同一であると假定し、眞に公正といふ觀念に指導される博愛的精神が此の生産物をば各人の必要に應じて社會の全員に分配する。社會の人々が毎日肉食をすることは不可能であるとしても、野菜に交ふるに肉食を以つてすれば儉約な人々の食慾を滿足せしむるには十分であるし、又其の健康、體力、元氣を維持するに足るであらう。

ゴッドウィン氏は結婚を以て詐僞であり、又獨占であるとする。吾々は今性交が最完全な自由主義の上に行はれるとする。氏はかゝる自由は決して亂婚を招來することはないとするが、此の點に於ては私は全然氏に同意するものである。何故なら一夫多妻といふことは邪惡、腐敗、不自然な趣味であり、純良な社會に於ては決して流行し得ないからである。斯くて人は自分の配偶をえらび、同棲が双方の希望するところである限り、此の一人の女を愛するであらう。ゴッドウィン氏に從へば女が幾人の子供を持つかといふことは大した問題ではない。蓋し食物と手助けは比較的十分な方面から自然に不足な方面に與へられるし、人々は其の能力に應じ喜んで青年の教育に當ることになるからである。

かくの如き社會が若し成立したならば人口の增加にとりて此の上もなく好都合な社會である。現在結婚のやり直ほしが不可能であることは、疑もなく多くの人々をして結婚を逡巡せしめて居り、他方に於いて性的滿足といふ誘惑は少年の戀着を刺戟するに十分な力である。だから子女の扶養が何等心配の種とならないと假定すれば予は斷言する、百人中一の女でも二十三歲に達してしかも子女を持たないものはないであらうと。

かく一方に於いては人口に對して非常な奬勵を與へ、他方人口減少のあらゆる原因が除かれるとせば、此の社會に於ける人口は未曾有の速度で增大するに相違ない。予は前にアメリカ奥地の移民が十五年にして其の人口を倍加したと記したが、英國は是等地方に比べれば確かに勝れた健康地であり、而も英國に於ける家屋は何れも通風よく健康に適して居ると想像せられて居るし、をまけに家族に對する奬勵はアメリカに於けるよりも大きいのだから十五年以内に人口が增加するかも知れないのである。しかし玆では苟も眞實の許す範圍外に逸出することを避けるため此の倍加の時期をかりに二十五年とする。而して此の增加率は實際北米合衆國に於いて經驗せられたところの比率に比べると一層低いものなのである。

財産の平等主義が行はれ、勞働が農業にのみ集中せられるといふ假定であるから、國の産物

は大に增加するであらう。併しかくばかり急速に增加し行く人口に對してはゴッドウィン氏の計算に依る一日半時間の制度ではたしかに不足である。恐らく各人は全時間の約半を此の目的に投ぜなくてはならないであらう。しかし之れだけ、否もつと勞働したところで、此の國の土質を知り、既耕地の肥沃性を考へ、未開墾地の劣等さを省みる者は、英國の全生產が今から二十五個年で倍加せられるといふ事に對しては容易く首肯し得ないであらう。唯一の望みは牧場地の大部分を耕作し、肉食を全廢するといふことにあるが、此の計畫も恐らくは實行不可能である。何故なら英國の土地は肥料なしにはあまり作物がとれず、土地に最適する肥料を得んが爲めには牛馬の飼養が必要であるからである。

かく英國の平均生產を二十五個年に倍加する事は困難であるが、今一歩をかして其れが實行されものとし、第一期の終に於いて殆ど蔬菜よりのみ成る食物が一千百萬から二千二百萬となれる人口の健康を維持し得るものとする。次の時期に於いては更に倍加する人口を支持すべく何處に食物を求めるのであるか。何處に處女地があるか。肥料は何處から來るか。即ち此の二十五個年に人口は四千四百萬となる譯であるが、三千三百萬を支持し得るだけ生產すると想像することすら、苟も土地に關して多少の知識を有するものであるならば必や躊躇するであらう。かゝる增加は到底出來ざうもない事であるが今更に一歩をかして之れを認めるとしやう。しかも尙殘り千百萬の人口に對しては食物がないではないか。其の結果は卽ち如何、三千三百萬をともかくも支持すべき分量を、四千四百萬の人口に分配しなければならないではないか。

あの美しい想像畫、人々が富裕の中に棲息し、自分の不斷の慾望に對して何等苦勞心配のいらぬ國、狹量な利己心の存在せぬ國、心が肉體の扶養に對する不斷の苦心から開放せられ、其の本領とする思索にのみ耽り得る國。此の美しい空想の產物は、眞理のきびしい試錬にふるゝや、立ろに消滅するではないか。富裕に育まれ、生長した慈愛の精神は冷い窮乏の風にふれて退散し、憎惡の情が又頭を出す。自己保存といふ絕大の法則は一切の柔和にして高尙な情緒を排斥し、罪惡に對する誘惑は人性にとつて不可抗的な力となるではないか。麥は未だ實らざるに奪はれ、或は不平等な割合に隱慝されるのではないか。而して虛僞より發する一連の罪惡は直ちにこゝに再現して來るのではないか。かくて多くの子女を持てる母はもはや十分の食糧を得ることが出來ず、子供は食物の不足から病身となる。薔薇の如き健康は貧困の蒼白い頰となり、あさましくくぼんだ眼となる。少數の胸に未だ全くは消えやらずさまよつて居る慈悲心は最後の幽かな努力を爲すが、終には利己心が其の胸中を占領し、全世界に橫行するに至るのである。

氏の假定せる社會に於いては氏が最惡人の最初の罪を其れに歸したところの邪惡な制度はなかつたのであり、又之れがために社會の利益と個人の利益とが衝突せしめられるといふことも

なかつたのである。又理性が共通になし置くことを可とする利益に付いては獨占といふことは行はれないのであり、不公平な法律は何人をも強いて秩序を犯さしむると云ふことはなかつたのである。博愛慈善は萬人の心を支配して居た。しかるに僅五十年を出でずして暴行、壓制、虚僞、貧困、あらゆる惡むべき罪惡、あらゆる困難――現在の社會狀態を墮落せしめ悲觀せしむるやうな罪惡と困難とが最緊急不可避な事情に依つて、又人間性に固有な法則に依つて、而してあらゆる人間の制度規定とは絶對に關係なく發生するやうに思はれる。

若し此の陰鬱な實情が之れだけの記述で未だはつきりと心に浮ばないならば更に次の二十五個年の情態を想像して見るがよい。此の時になれば四千四百萬の人口は食物がなく、更に二十五個年を經た後、即ち初めから百年を經た後に於いては人口は一億七千六百萬となり、しかも食物は僅に五千五百萬を支持し得るのみであるから一億二千萬は食を得るに途がないことになる。しかも此の一世紀間土地生産力は絶對的に無制限であり、年々の增加は最大膽な假定の許すよりも一層大きなものと想像せられて居るのである。

果して然らばゴッドウィン氏の所謂『人口は尙億兆年間增加するも地球は其の住民に對する食物には事缺かぬであらう』といふ情態とは相去る實に遠しといはなくてはならぬ。

予は上述の議論にて數百萬の過剩人口があると假定したのであるが事實問題としてはこんな過剩人口が存在し得ないこと言を俟たぬ。此の點に就いてはゴッドウィン氏の說、即ち「人間社會には一つの原則があつて人口は常に生活資料の標準に抑止せられる」といふ說は確かに公正である。唯此こに問題は此の原則とは何ぞやといふことである。其れは不明不可思議の原因であるか。其れは或時期に於て男子を交接不能にし婦人を石女となすところの天の神秘的配劑であるか。或は吾々の眼前に在りて研究し得るものであるか。其れはあらゆる情態下に於ける人間に種々の力を以つて作用する原因で、常に吾々の眼に映ずるのではないか。結局其れは貧困と貧困に對する恐怖ではないか。即ち其れは人間現在の生存情態に於いては自然法の必然的不可抗的な結果であり、人間の諸制度は到底之れを芟除することが出來ないながらも、之れを助長することなく、却つて大に之を緩和するの傾があるのではないか。

現に文明社會を支配しつゝある或る主要な法律が、上述假想の社會に於ても最緊急な必要に迫られて設定されると云ふのは妙な話しである。人間はゴッドウィン氏に從へば印象の動物で缺乏といふものの刺戟が起ると之に堪へることが出來ず、直きに公私有物を犯すやうになる。此の犯罪が數と範圍とに於て大いに增加すると、社會の先覺者は直きに人口の急速な增加と反對

に、食物の生產が遠からず減少し始めるであらうといふことを觀破する。狀勢の危急は社會一般の安寧のため卽刻何等かの手段を講ずるの必要を暗示し、かくて或る會議の召集となり、席上國家の危機が高唱せられることになる。彼等は其所でいふであらう。吾々が富有の中に住みたる時は各人は隣人の缺乏を喜んで救つたが故、誰れが最少の勞働をなし、誰れが最少の貯へを持つたかといふことはあまり大した問題ではなかつた。しかし今日の問題は自分に不用なものを他人に與ふべきか否かといふこに存せずして、自分にとつて絕對必要である食物を隣人に與へざるべからざるか否かといふ問題となつたと。又彼等はいふであらう、今日缺乏に惱める人數は之れを救はんとする人數の資力を起ゆること頗る大である。是等焦眉の缺乏は國家生產の現況を以つてしては到底萬人を滿足せしむることが出來ず、終に著しき犯罪行爲を生むことになつた。而も是等犯行は旣に食物增加を阻害するの結果となつたから、今にして何等かの手段を講じなければ終に全社會を混亂に陷れるであらうと。更に又彼等は論ずるであらう。絕對必要は出來るなら手段を盡して生產を增加すべきことを命ずる。此の緊急已むべからざる大目的を達せんがためには土地を一層完全に均分し、最有力な方法に依つて財產に對する犯罪を排除する外途がないと。

併し反對論者は次のやうに說くかも知れない。土地の肥沃性が增大し、之れに伴ふ種々の事

情が起ると、或る人の分配は自分が食ふて餘るほど多くなるかも知れない。併し利己といふ事が再び社會を支配することになれば、彼等は剩餘生產を他人に分つにしても代償として何かを要求するに相違ないと。之れに對する解答として又或る人々は云ふであらう。之れは悲しむべき事態に相違ない。しかしかゝる弊害は財產の不安定といふことより必然的に起因する澤山の困難に比すればものの數でない。或る人の消費し得る食物量は人間の胃袋の狹さによつて必然的に限定せられる。彼が剩餘食物を遺棄せず、之れを他人の勞働と交換することになれば他の連中が皆餓死するよりもよろしいではないかと。

かういふ譯で、現在文明國に於けるとあまり違はぬ財產制度が、社會的弊害を除く最上の——たとへ十分でないとしても——救濟法として樹立せられるといふことは十分の可能性を持つのである。

之れと密接に關係して次ぎに議論の主題となるものは男女の交合である。右の假想社會が逢着する困難の眞の原因に注意しつゝある者は次のやうに論ずるであらう。各人は自分の子供が凡て社會の慈善に依つて養はれるといふことを信じて居ても、地球の生產力は將來の人口に對して食物を與ふるには全く不十分であるから、假令社會の全力がこの方面に向けられるとして

も、又財産の安固が最完全に保證せられ、或は又あらゆる他の奬勵方法が講ぜられて年々の生産が出來得る限りの最大增加を示しても、食物の增加量は一層速力の大きい人口の增加には追ひつけないのである。從つて人口に對する或る種の妨害が絶對に必要となるが、就中最明白自然的な方法は各個人をして自分の子供を扶養せしむるといふことに歸すると。而して誰でも自分の扶助し得ない者を此世に生み出すといふとは敢てしないであらうから、右の方法は自然、人口增加に對する一種の抑制となるわけである。其れにもかゝわらず萬一若しかゝる不心得の者があるとすれば、他人への見せしめのためかゝる行爲に對する恥辱と不便とを感ぜしめ、自分の不量見と、罪なき兒等を缺乏と貧困とに陷れた事に對する應報を思ひ知らしむるがよいと。

此の理論の自然の結論として、吾々の假定せる社會に於いても、かゝる困難の下に於いては、結婚制度を設けるか、或は少くとも各人をして自分の子女を扶養するの義務を負はせるがよいといふことに歸するのである。

是等困難を考察すると貞操破棄に伴ふ不面目が何故男よりも女に多いかといふ理由が自ら明かになる。女が自分の子供を養ふ十分の資力なきことは言ふまでもない。故に女が自分の子供を扶養してくれるとの約束もしない男と關係し、而も其の男が自分の將來の不便を感知して女を棄てたと場合にはすれば其の子供等は必や社會の救濟を受けなくてはならぬ。其れでなければ餓死するばかりである。かゝる不都合の屢發を防止するため、犯罪者に恥辱を與へて之れを罰することにする。（かゝる自然的な過失を罰するに體刑を用ひ或は身體の自由を束縛するのはあまりに不公平であるから）。然るにこの種の罪惡は婦人の側に於いて一層明白で又其の罪跡は間違ふ餘地がない。男卽ち子供の父は必しも一寸とは判明しないのに、母の場合にはかゝる恐れはなく、而も犯罪といふものは證據の最完全で社會に對して蒙らせる不便不都合が最大である處に最大の非難を招くものであるからだ。尤も他方に於ては社會は成文法に依つて父が小供を扶養すべき義務を規定する。たが男が家族を持つて妻子を貧困に陷れるとすれば、彼は他人を不幸にしたといふことに對して恥辱を感ずると共に、必や一層大きな不便と勞役とを負はなくてはならず、之れが男子に對する十分な罰となるわけである。

男が犯して殆ど何等罪とならぬ事を女が犯した場合には殆ど社會から葬られるほどの痛手をおはされる現在の制度は、確かに自然的正義に背反するものである。しかし社會に重大な不便を負はせるやうな事情が屢發することを防止する最明白有效な一手段として、此の習慣の起原は公平といふ點からは完全でないとしても、他面から見ると自然的であるとは云へる。しかし此の起原は其後の習慣が生んだ新思想の中に其の影を沒し、始め國家の必要から起つた事でありながら今は婦人の淑德といふ方面に根據を置くやうになり、始めの起原といふ點からは少し

も實際の必要のないやうな社會に於いて却つて最大の力を揮ふやうになつた。

是等二個の根本的社會法則――財産の安全と結婚制度――が樹立せられると境遇の不平等といふ事が必之に隨伴する。財産分配後に生れた者は既に人の所有に歸した世の中に出て來るのである。彼等の兩親があまり多數の子供を持つた爲、各々の子供に十分なものを分ち與へることが出ないと假定すると、あらゆる物が既に誰れかの所有に歸して居る社會に於いて彼等は果して何うするのであるか。吾等は既に各個人が地球生産の平等的分配を要求し得る場合に其れが如何に悲慘な結果を齎らすかを研究した。其の時には或家族があまりに大きくなつて、始めわり當てられた地面では食料が不足する樣になつても當然のことして他人の剩餘を要求することが出來ず、人間性の法則からして或人々は缺乏に曝露せられる事になるのである。即ち是等の人々は人生の大富圖に於いて空圖を引いたことになるのである。而もかゝる不幸な人々の數は增加して直きに社會の剩餘生産では扶養することが出來なくなる。ところで他方剩餘生産を所有して、之れを他人に分與する連中は其の代償として何を求めるか。彼等は更に大に社會を益し、且つ同時に自ら一層多數の貧困者を扶助し得んがため、其の剩餘生産を增加せんことを希望し、之れが爲めに力を盡して働き得る者、及び働くことを甘んずる者を、其の代償として要

求するのではないか。或る特殊の場合を除き、剩餘生産の持主等は多分かゝる要求をなすことゝ思はれるが、之れは自然なことでもあり又尤なこととも思はれる。かくて食物に缺亡せる連中は生存上絶對に必要な品物を貰ふ代償として已むなく其の勞役を獻ずるに到るのである。此の點から見ると勞働者を雇用するための資金はとりもなほさず地主が自己の消費した食物の殘餘から成立し、其の全殘量であると云へる。而して此の資金に對する要求が大きく多數であればあるほど其の分配高は少なくなるわけで、勞働賃銀が廉いのである。かくて人々は單に食ふために働くことになり、疾病と貧困とのために家族を扶養することも出來なくなるのである。之に反し若し此の資金が急速に增加し、要求者數の割合に其の資金が大きい時は一人當りの分配高は大きくなり、勞働者は勞働の代償として十分の食物を要求し得るやうになる。かくて勞働者の生活は氣樂になり、多數の元氣な子孫を養ひ得るのである。

現今あらゆる國に於ける下層民の幸不幸、貧困の程度といふものは主として此の資金の狀態如何に依つて定まるのであり。又人口の增減は主として此の幸不幸、資金の多寡に依つて定まるのである。

かくの如く論じて來ると空想の描き得る最美しい形式に依つて成立した社會、即ち利己を棄

て博愛を以つて立つ社會、其の各員の惡傾向が暴力で矯正せられずして道理に依つて訂正せられる社會、かゝる社會でも已むを得ざる自然法が作用する結果として（人間制度の惡いためではなく）、現在吾々の知れる社會とたいした本質的相違のない計畫に基いて構成せられた社會に墮ちてしまうやうである。即ち資本家と勞働者との兩者に分れ、利己を其の大動力とする社會が之れである。

上述の假定に於いては人口の增加は實際よりうちわに見積もり、生產の增加は之に反して實際より大きく見積つた。しかし上の如き假定社會に於いては、人口は多分あらゆる實際の社會に於けるよりも急速に增加すると見るのが寧ろ至當であらう。で若し人口倍加の期が上述假定の二十五年でなく十五年であるとし、かゝる短日月の間に生產を倍加する（其れが不能であると假定して）のに必要な勞力の方面を一考すると、吾々は確實に次の如く斷言して差支ない。即ちゴッドウィン氏の理想とする社會が成立したとしても、單なる人口增加の理論に依つて億兆萬年どころか三十年を經ない中に根柢から破壞せられるに相違ないといふこと之れである。

私は明白な理由に依つて此の場合移民の事を考慮に入れなかつた。若しかゝる社會が英國に於けると同樣に歐洲大陸の他の部分にも出來るとしても、是等國家も人口といふ一點に付いては英國と同一の困難に遭遇するであらうから新しく移民を入れる餘地はないのである。若し此の美しい理想鄕が吾英國にのみ局限せられたと假定すれば、其れは始めの純美な情態から墮落し、當初の目的たる幸福の多量を分つに遑なくして、國人はおのづから國を去り、現在歐洲に實在する如き政府の治下に走り、或は新天地に於ける最初の移民が經驗する極端な艱難に忍從するに到るであらう。

第三章　平等主義結論

其の判斷力に對して予が多大の敬意を拂つて居る或人は數年前予に忠告し、平等論、卽ちウォレース、コンドルセ、ゴッドウィン等に關する部分は、本書初版發行以來大に世人の興味を失ひ、且つ嚴密には人口論と關係がない故、新版に際しては割愛するがよいと云つてくれた。しかし此の平等論は予をして人口論を起草せしむるに到つた要因であるから予としては此の議論に多少の執着あるは已むを得ぬのであるが、今姑く之れを離れて考へて見ても、予は本書中に人口の理論を基礎とせる平等主義の批判があつて然るべきであると思ふ。而して既に之れを存置するとすれば、人口理論の例證適用中に章を割くが恐らく最至當であり、又最效果があると思はれる。

あらゆる人間社會、殊に文明進歩の最顯著な社會の外觀だけを見る皮相的觀察者は、平等主義、共產主義の實施に依つて異常な社會進歩が遂げられるものと妄信する。彼等は一方に富豪を見、他方に貧困を見て、其の明白自然的な救濟を生產の均分に求めやうとする。彼等は一方

に於いて人間の大なる努力が些事不要事に、否時としては有害な目的に對して浪費せられるを見て、其の努力が節約せられ或はもつと有效に使用せらるべきを希ふ。彼等は又機械があとからあとから發明せられるのを見ると其れが一見したところ著しく人間努力の總和を減免すべきを考へる。しかし一見人間の富、餘暇、幸福等を增進するだらうと思はれる手段が增加するに拘らず、社會大多數の努力は減少せず、其の狀態は假令墮落せざる迄も、必しも大に改善せられないのである。

かゝる狀態の下に於いて平等論が常に繰り返されるといふことは少しも怪むに足りない。もつとも此の問題が十分に討議せられ、或は社會改良上の大實驗が失敗に歸した後暫くは恐らく此の問題も影を潛めるであらう。而して平等論者の意見も、耳をかたむける人もないやうな幾多謬論と一所に葬られることであらう。しかし若し此の世界が何千年か繼續するものとすれば一定時期の後に必生き還つて來る其れら謬論と同樣に、平等論も亦新芽吹くのである。

だから私は初版に於いて既に論じたところを此の新しい版中にて割愛せぬばかりか更に多少の餘論を之れに附け加へて置きたいと考へる。其れは今日既に此種平等論の復活の曙光がほの見えるからである。

私が衷心から尊敬するラナークのウーウエン氏（Lanark Owen）は最近「新社會觀」と題する一書を公刊した

が、此の書は勞働と貨物との共產を豫想する或主義を宣傳するものである。又一般に人の知る如く下層社會の間には最近一つの思想が流行し、土地は人民の共有であるから地代は一般人民間に等分せらるべきものだと信ぜらるゝに到つた。卽ち彼等は此の自然的財產から生ずる利益を享有するの權利があるのに、財產管理人卽ち地主の不公平と壓制とに依つて之れを奪取せられたのだと考へるのである。

オーウェン氏は眞の博愛家であつて社會に對して盡されたこゝの大なるを疑はない。だから苟も人類の友人たるものは、氏が綿絲工場に於ける小兒の勞働時間を制限し、且つ年齡にも制限を設けるため議會條令の發布を促さんとする盡力に於いて成功せんことを衷心より望むのである。氏は又三千の製造職工との長年の交際に於いて得たに相違ないところの知識經驗、其れから又氏の經營法から得たと傳へられる成功等、是等諸點からして敎育上の諸問題に對しても傾聽すべき意見の所有者である。かく經驗に根據を置くと稱せらるる理論である以上、机上の空論に比して一層研究の價値あること論を俟たぬ。

土地に關して新說を唱ふる勞働者の論據は確かに頗る薄弱であり、說其れ自身非常なる無識を表はして居る。しかし勞働者階級の謬想は常に寬大な考慮を受くべき理由があるのである。蓋彼等勞働者は其の境遇上、而して又一般に彼等に共通な無識といふ點からして第一の表面的事實に欺かれ、或は陰謀家連の策略にかゝる傾向があり、其の無理もない自然の結果として種種謬想を抱くに到るからである。而して極端な場合に於ける外、苟も世の識者たる者は何等苛烈な手段を用ひず、忍耐に依り敎育と知識との普及に依つて勞働者の覺醒を促さなくてはならないのである。

予は前章平等主義に關する議論の後に於いて更に是等の說を委細に論駁する必要を認めない。予は唯人口理論に基く平等主義に對する解答、並に其れが實際に適用せらるる場合を簡單に說明して之れを記錄に止め置くため、尙一つの理論を此處に開陳せんとするのである。

平等主義を打破すべき二つの決定的理論の第一は、平等的狀態は經驗上又理論上人間努力に對する刺戟の發生に不適當であるといふことである。卽ち人間の本然的怠惰性に打ち勝ち。彼等をして適當に地面を耕作せしめ、且人間の幸福に必要な其れ等の便宜品慰安品を作らしむるところの唯一の刺戟はかゝる狀態下に於いては發生に不便であるといふのである。

第二に人間が生活資料の增加に比して、より速に增加するといふ明白な傾向ある爲、かゝる

增加は、其れが私有財産制度から生ずる妨害に比べて遙に慘酷な或種の手段や、或は神と自然の命に依り各人に負はされる子供扶養といふ道德的義務に依つて阻止せられないとすれば、どんな平等主義を行つても、幾何もなく必然不可抗的な貧困と不幸に終るものであるといふことは之れである。

是等議論の第一は、私自身の考にては常に十分の確實性があるやうに思はれる。不平等の狀態が善行に對して善果を與へ、且つ廣く一般の人々に社會的向上の希望と墮落の恐怖とを起させるやうな社會狀態は、確かに人間の努力と才能とを最もよく發展せしめ、且つ人間美德の實行と進步とに最適當した狀態である。而して他方歷史は從來曾つて存在した平等主義の社會に於いては此の刺戟の缺乏が必ず終に社會を沈滯せしめ死滅せしめたといふ例證を與へて居る。

しかしこの問題に關する理論と經驗とは反對の議論を起すの餘地なきほど決定的のものであるかといふに必しもさうではないやうだ。而して其の反對論としては例へば次の如きことが云はれるであらう。平等主義が實際實施せられた歷史的記錄は非常に少く、其の社會は野蠻時代を去ること遠からざる時代の事であつたから、之れを以つて文明開化の時代を推斷するのは公平でない。かなり平等主義に近かつた古代の或社會に於いても或る方面に於ける人間の努力の著しかつた實例がなかつたわけではない。又近代に於いても或社會、殊にモラヴィア人の社會に

於いては多くの財産は共有であつたけれども其の勤勉は決して破壞せられなかつたと。論者は又云ふであらう、人間を野蠻人の怠惰と無神經から文明人の活動と聰明さに發達せしむるため、社會狀態の不平等といふ刺戟が必要であると假定しても、一たび元氣活動的な心が振ひ起つた後に於いてはかゝる刺戟の持續は必しも必要ではない。其れ以後に於いては徐ろに成り行きに委せてよい。若し强いて之れを持續せしむると他の刺戟の場合に於けると同じく疲勞、疾病、死亡といふ結果を招くからであると。

是等の說は苟も人間性を研究せるものを信服せしむるに足らぬ。しかし或る程度までもつともなところもあり、近代的社會に於いて平等主義を實行することが全く亂暴不合理であると決めてしまうわけにもいかぬのである。

併し平等主義に對する尙一つの反對論、卽ち人口理論を論據とする反對論の特長は、其れが時と所とを問はずより一般的に又一樣に經驗に依つて確證せられて居る上、理論上非常に明瞭であつて反駁を容れるの餘地なく、從つて又實驗に徵するまでもないことである。其の理論は單に土地の旣知的性質と、殆どあらゆる田舍の村落に起りつゝある死亡に對する出產の割合に最簡單な計算を加へた結果に外ならぬ。試に例を英國に取つて見やう。あらゆる人口稠密な地方に於いては必然的に生ずる家族扶養上の困難が存在するに拘らず、又登薄上遺漏がないと假

定しても、多くの教會區に於ける死亡對出産比は一對二である。此の比を普通田舍に於ける死亡率（卽ち五十人中一）と合せ考へると、人口は若し移出民がない場合には四十一年で倍加されるといふことになる。而して平等主義の狀態下に於いては――オーウェン氏の提唱する共産主義の場合に於いても將た又土地の教會區組合制度の場合に於ても――他の教會區へ轉出して救護を受ける望もなく、而も他方に於いては現在社會の狀態下に於けるよりも最初の人口增加率は勿論遙かに大きいであらう。果して然らば一人あてに分配される土地産出物の量は每年漸次減少し、終に全社會全個人が缺乏と貧困とに依つて壓倒せられるの避けがたき狀態に陷るのではないか。

之れは最も簡單明瞭な疑問で、此の疑問を合理的に解決し能はざるものは苟も平等主義を口にすることが出來ない筈である。而も予は理論の上に於いてさへ此の疑問に對する解答は勿論、之れに近い議論さへ耳にしたことがないのである。

玆にかういふ議論がある。現在の組織下に進歩せる社會、又た進歩しつゝある社會狀態に於いて、道德的抑制の效能を高唱しながら、他方智識の大普及と人間心意の大進歩とを前提とする平等主義の社會に於いて、道德的抑制が十分に行はれないであらうと想像するのは矛盾の甚しきものであると。しかしこの議論は皮相的觀察の範圍を出ない。蓋是等の論者は道德的抑制

に對する奬勵と動機とが、平等社會、共産主義の社會に於いては直ちに破壞せらるべきことを看破し得ないからだ。

今平等社會に於いて食物を增加するため最大の努力が行はれながら人口が食物量の限界點迄も增加し、萬人が皆貧乏になると假定すると、全社會の餓死を免れんがため人口增加率を阻止することが絶對的に必要となる。然しかゝる事情下に必要となつた道德的抑制を行ひ、晩婚或は結婚回避を爲すものは果して誰れであるか。平等主義が行はれたとて、人間の情慾が直ちに一掃せられるとは思はれない。果してさうであるとすれば結婚を希望する連中は、自己の希望を制限すべく强いられることをつらく感ずるであらう。しかるに萬人皆平等で又同一境遇にあるのだから或る個人が殊に自己を抑制するの義務ありとなすべき理由はない。而も社會一般が貧困に陷ることを避けんがため何うしても之れを敢行しなければならぬとすれば、平等社會に於いても或一般的法律を設けて必要な制限を加へるより外途はない。しかし何うして此の法律が勵行せられ、其の違反者は何うして所罰せられるのであるか。早婚者を指笑の的たらしむるか。何年かの禁錮に處するか。其の子供を曝らし者にするか。此の種犯罪に對する直接の罰は極めて痛ましく不自然ではないか。國家の資源が人口の緩慢な增加を支へ得る程度であり、極端な貧困を防止するため早婚を抑制することが絶對に必要でありとすれば、各人をして其の子

供の扶養に對する責任を負はしむることが最公平、最自然で、亦神の法律にも合し人間至上の法律にも合するのではないか。即ち彼れは自己の慾望滿足の結果として生ずる自然的不便と困難とを受けるのみで十分所罰を蒙るわけで、之れに對し他の所罰を加ふるのは不自然不公平であらうといふのである。

大家族の扶養に伴ふ困難の豫想、之れより生ずる早婚の自然的抑制はあらゆる文明社會のあらゆる階級に作用し、今後下層民の智識と用心とが一層進歩するにつれて益〻その作用が有效になるといふことは少しの疑をも容れるの餘地がない。然し此の自然的抑制の作用は全く財產法並相續法の存在を前提とするものであつて、平等共產主義の社會に於いては大に之れと相違する種類の、而して又より多く不自然な規定に依らなくてはならぬ。オーウェン氏も此の點については十分承知して居られ、氏の理想とする社會に於いて人口增加より生ずる困難を回避すべき方法を案出するため大に苦心されたのである。而も氏が此の目的を達成すべく、あまりに不自然でなく又殘酷でない或方法を發見することの絕對的に不可能であつたことを、近代人並に古代人の同一計畫に對する失敗と合せ考へると、人口理論を基礎とする予の平等主義反對論は何等合理的な反駁、否回答（理論に於てゞすら）を許さぬほど確定的のものであると稱してよい。而して人口が生活資料以上に增加する傾向あることは、此の國各地方の教會區に於ける凡

ての戸籍簿に表はれて居ることで、若し此の人口增加の勢が何うにかして阻止せられなければ、其の結果は全社會の人々を必ず缺乏と貧困とに沈ましめるに至るといふことも亦同樣に明白なことである。而して平等主義の社會に於いては不自然不道德にして慘酷なる法律を設けざる限り、人口增加の勢を阻止することが出來ぬといふことは、同時に凡ての平等主義に對して終決的の反駁說を形成するものである。

第四章　移民論

平等主義者が一般に考へて居るやうな左樣な完全な社會に於いては、移出に依つて人口を緩和するといふことは問題にされないやうであるが、合理的に豫想せられ得る唯一の社會卽ち不完全な社會狀態に於いては移出も亦當然吾々の考慮に入り來るものである。人間の勤勞は地球上の凡ての國民を通じて同時に最上の指導を受け始めるものでないから、世界中よりよく耕作せられた地方に於ける過剩人口を未開墾地に移轉せしむるといふことは明白自然な救濟法であるやうに見え、而して此の未開墾地方は廣くして人口稀薄であるから一寸考へると十分救濟の目的を達し得るやうに思はれる。少くとも人口過剩より來る弊害を遠い將來まで延期せしむるには十分であるらしく思はれる。しかし經驗に鑑み、又是等未開國の實狀に鑑みる時は、其れは十分の救濟となるどころか、却つて單に一時逃れの緩和劑に過ぎないことが分る。

新開地植民に付き吾人の得た報告中に於いては、第一の植民者が遭遇する危險と難苦とは實に母國に於いて遭遇すべく豫想せられるよりも一層大きいやうに思はれる。若し家族扶養の困

難から生ずる位の程度の不幸を避くるためならば米大陸に對する歐洲移民は夙うの昔に其の迹を絕つたことであらう。唯是等移民は一層有力な諸々の慾情卽ち利益慾、冒險的精神、宗敎的狂熱といふやうなもののために刺戟せられて終に其の移住を思ひ切らなかつたわけである。是等の慾情は初めの冒險者たちをして一切の障害を突破せしめたには相違ないが、又多くの場合或意味に於いて人情に反する行爲に出で、却つて移住の眞目的を破らしめたのであつた。今日墨西哥、ペルに於ける西班牙移住民の性質は姑く之を問はぬとして、吾人は是等地方の歷史を讀む每に、滅亡せる民族の方が道德的資質の上に於いても數の上に於いても其の征服者に比して優等であつたといふことを痛感せずには居られない。

人口稀薄であつたため英國人の移住するところとなつた米大陸の或地方は新植民地の創設上一層適當な條件を備へて居たが、其れですら最大なる困難を伴つたのである。例へばサー、ウオーター、ローリに依つて着手せられ、デラウェア卿に依つて設立せられたヴァーヂニア植民地に於いては計畫は三たび挫折した。第一回植民人の約半數は蠻人に亡ぼされ、殘餘は疲勞と饑饉とに消磨されて失望落膽の極歸英したのである。第二回の植民は原因未詳の事情に依つて滅亡したが、やはりインド人に殺されものと想像せられた。第三回も亦同一の慘澹たる運命に陷つた。第四回も亦饑饉と病氣とのため、移民數は六ケ月間に五百から六十迄減じた後、飢え、

且つ絶望して英國に歸つたが、デラウェア卿は彼等を保護し救濟するため食料其他を積載した船隊を率ひチェサピーク(Chesapeak)灣頭に彼等を迎へたのであつた。

ニュー・イングランドに於ける最初の清教徒移民は少數であつた。彼等は不順な季節に上陸し、單に個人の資金に依賴したのであつたが、冬期が例年よりも早く來て恐ろしく寒かつたのに、此の地方は森で蔽はれ、長い航海に惱みたる者を慰め、或は幼年者を養ふべきものは一つもなかつた。そこで約半數は壞血病と缺亡と嚴寒のために斃れたが殘存者は性格の力と舊教徒の迫害から逃れたといふ滿足感に助けられて此の野蠻國を漸次改善してともかくも氣樂に生活し得るやうにした。

バルバドーズ(Barbadoes)の植民地は其の後異常な速度で膨脹したのであるが、始めには全く荒寞たる地域であり、食物は大に缺亡し、林木が巨大でしかも無上に固いため之れをかたづけるに大なる困難が伴つた。而も第一回の收獲は最心細い程度のものであり、他方英本國からの食料供給は延遲不定であつた。

一六六三年ギニアに有力な植民地を而も急速に作らんとした佛蘭西の計畫は最慘澹たる結果を伴つた。一萬二千の移住民は雨季に上陸し、天幕とみぢめな小屋の中に收容された。彼等は活氣を缺き、生存につかれ、而して一切の必要品を缺いて居た。彼等は食料粗惡につきものの

傳染病に襲はれ、又下層民の閑居が齎らすところのあらゆる不規律に陷つた。かくて彼等移民の殆ど全部は恐ろしい絶望の中に死んでしまひ、計畫は全く畫餅に歸した。たゞ二千の人々だけが强健な體格を持ちあはせたため幸に酷薄な氣候と其の他の不幸に堪えて佛國へ歸るを得た。かくて此の遠征に要した二千六百萬リーヴルといふものは全然空費せられた次第である。

ニュー・ホルランド(New Holland)のポート・ヂャクソン(Port Jackson)植民地にてコリンス(Collins)の記せる情況も亦悲痛なものであつて植民人は始め數年間は食料の不足と闘はなければならなかつた。是等困難は移民の質が惡かつた爲却つて增大せられたこと疑を容れぬ。しかし新開墾地の不健康、第一回收獲の失敗、本國よりの供給不定等より惹起せられる困難は自ら移民の意氣を沮喪せしむることになるので、野蠻國に植民するには大資源と不屈不撓の忍耐とが大に必要となつてくるのである。

歐羅巴と亞細亞の比較的人口稀薄な地方へ植民地を作る場合には明かに更に大なる資源が必要となる。是等地方の住民は有力で好戰的であるから彼等を急速に絶滅せんがためには大なる兵力が要る。最大强國でも是等隣人の擾亂に對して其の邊境を守備する爲には大なる困難を感ずる次第で、農夫の平和的努力は彼等の侵掠入寇に依つて常に妨害を蒙るのである。露西亞のカザリン女皇はウォルガ附近に於ける植民地を保護するため正式の築城を行ひ、クリム韃靼人(Crim Tartars)の犯掠のため其の國民が苦しむといふ口實——恐らく其れは正當な理由であつたらうが——の

もとに終にクリミヤ全部を占領し、好亂の其住民は大部分之れを放逐し、殘部は之を化して比較的靜穩な生活を送らしめた。

植民地設置に付き、土地、氣候、竝に適當な便宜品の缺亡等から來る最初の困難は、是等地方に植民する場合に於いても勿論米國に植民する時と殆ど變りはない。土耳古帝國誌中にイートン氏が記せるところに依ると七萬五千のクリスト教徒は露國人のためクリミアから追はれてノガイ韃靼人(Nogai Tartars)の遺棄した地方に住むことになつたが、住家の建たぬうちに冬となり、大多數の人は穴居し、何でも見付け得るもので其の覆ひをして置く外途なく、大抵は死んでしまつた。かくて數年後に殘存せるものは僅に七千であつた。又ボリスゼネス(Borysthenes)海の兩岸に作られた伊太利植民地も管理の方法よろしきを得なかつたため、ほゞ同一の運命に陷つた由、同じくイートン氏の報ずるところである。

新植民地にて經驗される困難の記述は大抵似たものであるから之れ以上の實例を擧げる必要はない。之れについてはフランクリンの一通信員が觀察せるところ尤もなふしがある。曰く、歐洲の數強國が莫大な國費と私費とを投じて植民地を作らんとして皆失敗した一理由は母語に適切である道德的機械的習慣が屢々新植民地に適せず、又多くは豫知し能はざる外面的出來事にも適せないといふ事であり、英國の植民地にしたところで何れも其地に必要な習風が生れ、發

達するに到る迄は決して大をなさなかつたのであると。パラス(Pallas)氏は露國植民地が適當の習慣を有せぬといふことを以て是等植民地の發展が豫想通りに行かぬ一理由であるとした。

之れと共に注意すべき一事項は、新植民地の創設當時に於いては、一般に其の人口が大に食料の生產を超過するもので其の自然の結果として本國から十分の供給を受けない場合には人口が減少して其地食料の支へ得る程度になり、十分な食料を生產して家族と之れを分つことが出來るやうになる迄は人口の不斷的增加といふ現象を見ないと云ふことである。而して新植民地設置の失敗は屢々此の食物と人口との間の關係に前後の順序があるといふことを明瞭に示す傾がある。

かういふ譯で、あまり急速な人口の增加から主として苦むところの下層民は遠隔な地に新植民地を作ることが出來ないといふことを認めなくてはならぬ。彼等は境遇上成功に是非共必要な資源が缺乏して居るのだ。だから、貪慾、或は冒險の精神に激成せられ、若しくは宗教的或は政治的不平に刺戟せられたる上流社會に其の指導者を見付けるか、或は又政府の後援補助を俟つのでなければ、本國に於いてどんなに食料缺乏に苦しまうとも、又地球上未開墾地は廣くとも、之れを我ものとすることは絕對に不可能である。

しかし一たび新植民地の基礎が固まりさへすれば移民の困難は大に減少するわけであるが其

れでも尙船賃として、又移民が落ち付いて職業を發見するに到る迄の期間衣食する爲に、多少の補助が必要である。而して政府としては何れほど迄之れを補助すべきものであるか問題であるが、しかし此の點に於ける政府の義務の大少如何に拘らず、或特別な植民的利益が提供せられる場合を除く外、政府が進んで移民を奬勵するのは恐らく失當であらう。

運賃衣食費等は個人或は私設會社等にて負擔する場合もある。獨立戰爭前に於ける長年の間、又其の後に於いても數年間、新大陸移住上の便宜と移住後に於ける豫想的利益は異常に大きかつた。而して實際其の過剩人口のはけ口として、あれほど氣樂な植民地を持つといふことは何んな國にとつても非常な幸であつたに相違ない。其れにもかゝわらず私はこゝに次のやうに自問しなくてはならぬ。卽ち是等期間に於いて一般英國民は生活難を少しも感じなかつたか。又誰れでも敎會區の援助を受けずに大家族を養ふことが出來るとの自信を結婚前に持つて居たか何うかと。恐らくは其の答は肯定的の側にはないであらう。

しかし中にはこんなふうに言ふ人もあるかも知れない。移民にとつて有利な機會が表はれた場合、之れを握らず、矢張り本國で獨身生活を送り或は極端な貧困に甘んずるのは其の人民の誤りであると。然らば人が故鄕を愛し、自分を育んでくれた兩親を愛し、親戚故舊を懷しむのは其の人の過りであるか。私はかく尋ねて見たい。自然が人間の心情の周圍に十重二十重にま

きつけてくれた其れらの絆を絕切るよりは、むしろ之れをつなぎとめて置くため人間が苦惱するといふことは弊害の一つではないか。なるほど時としては神はこの絆を絕ち切ることを要求するやうに見えるが、離別は之れがために少しも其の苦痛を減じない。社會一般は之れが爲に善果を得るかも知れないが個人にとつて弊害であることには敢て變りがない。加之遠方への移住には其れが下層階級の人々である場合には殊に其の行末に就いて疑惑と不安とが伴ふものである。彼等は高い賃金或は安い地價等に付いて一應は說明を聞いた譯であるが其れが果して精確に眞實なるや否や、全くは安心が出來ないのである。彼等の運命は其の運賃と生活費とを出してくれる人々の手中にあるのだが、此の人々は彼等を欺いて利益を得るのかも知れない。又彼等の渡る海は親戚故舊との死の別れであり、失敗せる場合に本國への歸路を絕つものとも見えるのである。何故なら歸國の場合に於いては移住する時と同樣に賃金を出してくれる人があるとは思はれないからである。故に冒險的精神が貧の不安と合體する場合に於ける外、上述の如き考慮がしばしば『未知の苦痛へ逃れるよりはむしろ彼等をして現在の苦痛を忍ばしむる』ことあるも怪むに足りないのである。

若し英國ほどの大きさの豐饒な土地が不意に合併せられ、小切つて賣られ或は小農場として

貸出されるとすると事情は大變違つて來、一般人民の狀態は大に改善せられるであらう。尤も富者は勞銀の高いこと、下層民の高慢なこと、仕事をして貰ふことの困難なことを卿つに相違なく、現に是等の愚痴は米國地主等の間に屢〻きかれるといふ話であるが。

又人口の移出に依る本國の利益は有效に利用せられたところが短日月の間に限られて居る。露國を除いた歐洲に於いては一國でも其住民が他國へ移住することに依つて生活改善をはからぬ國はない。かく是等の諸國は殆ど凡て生產に比し割合多くの人口を持つのであるからお互に移民を容れる餘地ありとは想像出來ない。今一寸歐洲に於いて國內經濟組織が非常によろしく人口に對する制限等がなく、各國共移民に對するあらゆる便宜を與へ得るものと假定せよ。露國を除く歐洲の人口が一億萬こし、本國に於ける生產が實際可能である以上に增加すると假定すれば一世紀後に本國人口の過剩は十一億萬となる、之れを同一期間に於ける植民地の人口の自然增加と合せると現在世界總人口の倍以上に上るであらう。

亞細亞、亞弗利加、亞米利加の未開墾地に最良の指導下に於ける最大の努力を加へて見たところが、果して百年間にかやうな人口を扶養するだけの耕作地を得ることが出來るか。若し誰れか樂天家が之れについて疑問を感ずるならば、乞ふ彼をして更に二十五年、或は五十年を加へて考へしめよ。左樣すれば一切の疑問は忽ちに氷解するであらう。

移民策が何故過剩人口救濟の一方法として長く其生命を維持し來つたかといふに其の理由は明瞭である。卽ち人々は自然其の本國を去ることを厭ひ、且つ處女地に於ける開墾と農作とが困難であるため、かゝる政策が決して十分に行はれなかつたからである。否行はれ得ぬからである。かりに此の救濟法が實際效能があり、舊國家に於ける罪惡と貧困より發する紛亂を救ひ、之れを化して最繁榮な新植民地のやうな狀態を現出せしむるの力ありとするも、此の妙藥はあまり長くは續かぬものであり、而して右の貧困と罪惡とが倍舊の勢を以つて再發した場合には此の方面からの希望、卽ち國家救濟の希望は一切空に歸するわけである。

其れ故人口の無制限的增加を救ふためには移民策は全く不十分であること明であるが、局部的一時的の便宜手段として、又土地耕作を奬勵し、文化の普及をはかるためには適切、必要な手段である。從つて政府は之れが實際的奬勵をなすべき義務はないとしても之れを妨害するのは大に不公平であるのみならず、又不得策でもある。移民の爲國內人口がなくなるなどといふ恐怖ほど全く理屈に合はないことはない。民衆の大團體の隋力こ其の家卿に對する愛着は其の性質頗る强く一般的なもので、政治的不平若くは極端な貧困のため、家卿を去ることが却つて國家の利益でもあり、且つ又自分の利益でもある場合を除ぐの外、人民はめつたに海外に移住するものでないと信じてよい。移出民が多いため勞働賃銀が高くなつて困るといふ如き苦情は、

就中不合理の甚しいもので、吾々はこんなことに留意する必要はない。若し或國の勞働賃金が下層民をして氣樂に暮らさしむる程度のものであるならば彼等は決して移出はしない。而して若しかゝる生活を送り得ぬとすれば、是等人民を國内に引きとめて置くのは殘酷でもあり又不公平でもある。

凡そ國家の富の進歩は主として國民個人の勤勉、熟練、成功と他の國家の狀態と需要とに因るのである。從つて凡ての國家を通じ、富の增加する速度と勞働に對する需要狀態には時代に依つて種々の變化が生ずるわけである。人口の增加は主として勞働に對する實際の需要如何に依つて影響せられるものではあるけれども、此の勞働の需要が增加したとて急に人口を增すわけにはゆかぬ、卽ち勞働が不足せる場合、市場に於ける勞働の供給を增加せんがためには多少の時日を要するのであり、其の反對に其れの供給があまり急速なるときには之れを抑制するに多少の日子を必要とするのである。若し是等變化が本書の初めの方で說いて置いた自然的動搖（其れは人口と食物との增加に伴ふものであるが）以上に出なければ自然の行きがゝりとしてこの變化に忍從しなくてはならぬ。しかし其の時の事情に依つて此の變化動搖は大なる衝動を受けることもある。而してかゝる時勞働の供給が需用よりも急速に增加すると勞働階級は甚しい苦痛を受けることになるのである。例へばこゝに內外兩方面の原因が合體して十年若くは十

二年間引續き或國の人口が大に增加し、而して其れから增加の速度を減ずると假定すると、他方に於いて雇ひ入れ竝に賃金支拂の資金が事實上減少しつつあるのに、市場に流れ込む勞働は一向其の速度を減じないといふことは明である。移出民が一時的救濟策として最有益なのはかゝる事情下に於いてであり、英國目下の狀況は正にかくの如くである。なるほど移民は少しも出なくとも、人口は漸次勞働に對する需要の狀態に一致し行くものには相違ないが、其れ迄の期間に於いて民衆は最甚しい苦痛を忍ばなくてはならず、此の悲慘の程度は人間が如何に努力して見たところで到底緩和することの出來ないほどのものである。何故なら其れは或特殊の階級にのみ影響するものであるから、或特殊の期間緩和せられても、其の結果は却つて苦痛の時期を長びかせ、苦痛を受ける人數を其れだけ增やすに過ぎないだらうと思はれるからだ。かゝる場合に眞に之れを救ふべき唯一の途は人口の移出あるのみだ。だから移出民問題は人道問題として、又政策問題として英國政府の注意に價するところのものである。

第五章　救貧法（一）

貧民が屢〻困難に陥るのを救濟するため法律が設定されて居るが、此の種の一般的制度の設定といふことに付いては英國は殊に顯著なる國家である。しかしかゝる制度は個人の不幸の程度を多少緩和したかも知れぬけれども却つて之れを一層廣く社會に普及せしめたのではないかと思はれる。

英國に於いては年々莫大な寄附金が貧民救濟のため徴集せられるのに彼等の窮狀が依然として改まらないといふことは屢〻人々の話題となり、驚くべき事柄とせられて居る。それで此の金が盗用せられて居るのではないかとか、或は教會委員と監督者達が其の大部分を御馳走になつてしまうのではないかといふ樣な疑を抱く人もあるやうであるが、兎に角其の監督法がよろしきを得て居ないといふことは凡ての人の一致する意見である。要するに最近の儀儀以前に於いてすら年三百萬磅の稅金が徴集され、貧民の困難が芟除せられなかつたといふことは當に人の不思議に思ふところである。しかし事の表面より一層深く立ち入つて觀察する人は、事實は

むしろ人々の考へて居るのと違ふのだといふことに一層驚嘆するであらう。即ち所得一磅に付四志を徴集する代りに十八志を徴集することによつて始めて救貧の實を多少でも擧げ得るのだと聞いたならば定めて驚嘆するであらう。

富者の寄附によりて勞働者が今日稼ぎつゝある十八片若くは二志が五志にせられると假定せよ。然る時は貧民の狀態は大に改善せられ毎日肉の一片を口にすることが出來ると想像されるかも知れない。ところが實はこれは事實に反する假定なのである。毎日三志を貧民に與へると假定しても國内に於ける肉の分量は增加しない。現在英國には凡ての人が少しづゝ食べるたけの肉はない。其の結果は何うなるかといふに、肉市場に於ける購買者の競爭は肉一封度の價格を八九片から二三志に引上げ、而して肉の分配にあづかるものは矢張り現在に於けると同數であるといふことになるのである。若し或品物の量が乏しく萬人に行き渡らなければ最も多くの價を投ずる人が之れを持つのがあたりまへである。而して若し肉購買者間の競爭が引き續き行はれ、其の結果年々一層多くの家畜を飼養するといふことになると穀物の耕作が犧牲となるわけで、之れは又大へん不利益な事なのである。何故かといふにさうなれば國の食物はその人口を支ふることが出來なくなるからで、人口に比例して食物が不足することになれば下層民が二志を得るか五志を得るかといふやふなことは殆んど問題とならない。即ち彼等は何れにしても

最まづい食物を最僅少だけしか食ひ得ないのである。

物品の需要が增大すれば生產が盛になり此の島國の全財產が增加するであらうと考へる人があるかも知れない。しかし此の想像的富力の增加は比例以上の人口增加を招來して其の效果を失つてしまう。而して增加する生產は更に大いに增加せる人々の間に分配せられることになるであらう。

一磅に付、十八志の稅金を資產家からとり、最公正な方法で之れを分配するとしても上述の場合と同樣の結果に終るであらう。而して富者の犧牲、殊に金錢上の犧牲は如何に多くとも下層民の困窮が再發することを防ぐの效力はない。其の結果は却つて、富者が貧乏になり貧民中の或る者が富むやうになるかも知れない。しかし人口と食物の現今の比率が繼續する間は社會の一部人士は必ずや家族扶養に付いて困難を感ずるわけであり、此の困難は自然最不幸な連中の頭上に落下し來るわけである。

金錢に依つて一貧民の狀態を向上せしめ、一層よい生活を送らしめることにすれば、其れだけ貧民中の他の連中を苦しませることになるのだといふことは一寸考へると可笑しいけれども、私は之れが眞實を信ずるものである。若し私が自家の食物消費量を節して此の貧民に與へると彼は之れがために益せられ、私と私の家族は必しも之れがために苦しまないかも知れない。

若し私が荒蕪地を開墾して其の生產を彼に與へると、私は之れに依つて彼と一般社會の人々とを共に利することになる。何故なら前に彼が消費したところの分量は、恐らく新生產物の一部と共に一般社會の消費量の中に入り來り、其れだけ社會の食物を豐富ならしめるからだ。しかし若し自分が彼に金錢を與へると假定し、他方國家の生產が同一であるとすれば、彼は前よりも一層多く其の生產物を受領するの權利を得るわけであり、從つて他人の分配高は其れだけ減ずるのである。此の一個人の及ぼす影響は頗る小さく、殆んど目に見えぬほどであるが、しかし其れは他の多くの影響と共に動くのである。

即ち空中に充滿する黴菌の或ものと同樣に吾人の粗笨な認識中に、入り來らないだけで、實は他の多數の影響が存在するやうに存在するに相違ないのである。

或國の食物量が長年同一であると假定すると此の食物は各人の財產の價値に從つて、換言すれば各人が食物に投じ得る金錢の總額に從つて分配せられるに相違ない。故に或一團の人々の財產が急に價値を增加すれば必然的に或他の人々の財產の價値を減少せしむるといふことになる。若し富者階級が自己の食物を節約せずして一日五志を五十萬人に寄附すると、寄附を受けた人々は一層安樂に生活し得るわけで食料の消費も從つて增加するから、殘餘の人々の間に分配さるべき食物はそれだけ減少する。從つて各人の財產は其れだけ價値を減ずるわけである。

換言すれば銀貨の同一額を以てしては前と同量の食物を購入することが出來ず、食物の價額は一般に騰貴するのである。

此の一般的推論は最近の饑饉(註1)中に著しき確證を經た。私が上に述べた富者から一磅中十八志を徵集するといふ想像說も殆ど其の通り實現せられ、其の結果もほゞ想像せられる通りであつた。饑饉でない時に同樣の分配が行はれたとしても、食料は必や大に騰貴したに相違ないのに、饑饉について行はれたのであるから其の結果は二倍の强さを以つて表はれたのである。若し英國勞働者が夕食に肉を食ひ得るやう一日三志宛を彼等の稼ぎ高以外に與へられるならば肉の價格は最急速な而して未曾有な騰貴を示すであらう。穀物不足の場合には各人はいつもだけの分量を得ることが出來ないのであるが、若し吾々が引き續き各人に前と同一量を買ふだけの資力を與へるとすれば、其の結果はあらゆる點に於いて肉の場合と同一であるに相違ない。

饑饉時に於ける穀物價額は實際不足額の多少に依るよりも寧ろ國民が同量の穀物消費を持續する其の執拗の程度に依つて決定されるのであるが、此の事實は大に看過せられて居るらしく見える。收獲が半分不足しても若し人々が直ぐに一致して其の消費量を半減すれば穀物の價格には殆んど、否全く影響せぬであらう。然るに若し十二分の一の不足に過ぎないとしても人々が同一消費量を十ヶ月か十一ヶ月か繼續すると假定すれば價額は何んなに高くなるか分つたものではない。だから教會區の補助が多くなればなるほど同一消費量の持續力が與へられるわけで、消費の必然的な減少が行はるるに先ちて價額は益々高くなるのである。

或人々は高價は消費量を節減せしめないと主張する。若し眞に然りとすれば小麥の不足が輪入に依つて十分完全に救濟せられない場合には、小麥一ブッシエルの價が百磅以上にも上るであらう。が事實として高價は終に消費を減少せしむるものである。たゞ國が富み人々が代用品をいやがり、教會區が莫大の補助金をくれるものだから價額がばか〳〵しく高くなつて、中流(或は少くとも下層階級の直上に位する)社會を壓迫し、いつもの分量だけ購買することが事實不可能となつて已むなくパンを節約するに至る迄、此の目的を達し得ないのである。教會區の補助を受けた貧民階級は、穀物の高價に付いて少しも憂痴を洩らすべき理由はない。何故なら小麥が極端に高價であつたればこそ貧民の消費し得るやう、穀物のより多くの量が節約せられたのであり、其の穀物をば教會區の補助金で買ふことが出來たからだ。穀物不足に付いて最大の苦痛を受けたものは疑もなく貧民の直上に住する階級であつた。彼等は自分達の直下に位する人々に與へられた過分の補助金に依つて著しく壓迫せられたのである。殆んど凡て貧といふものは相對的のものである。貧民に與へられる救助金の半額に等しい額が直接彼等中流階級から取りたてられたとしても、現社會に實施せられつゝある貨幣の新しき分配法に依つて貧

乏に陷り、其のために蒙る苦痛の半分をだに嘗めるか何うか大に疑はしい。現在の分配法は其れほどまでに不公平を極めて居るのである。此の分配法は國の實情に於いて下層民の勤勉と熟練とが要求し得るより遙かに多くの食物を彼等に與へ、他方に於いては殆んど其れだけ中流階級が優れた勤勉と熟練とに依つて當然獲得すべき必需品を奪ひ去るのである。貧民の受け來つた補助の程度、即ち他國の場合に於いては必然法に依つて當然賴らなければならぬ代用品をば吾窮民をして回避せしめたほど大なる補助の程度。之れを國民の非常に大多數を苦しめた極端な物價騰貴と併せ考へ、尙ほ又多數の貧民をして敎會區の援助に賴らしめ、其の結果彼等をして殆んど貧乏といふものは恐るゝ必要なしと迄考へさせたことより生ずる永久的弊害と併せ考へる時は、救貧法の利弊があまりにつり合ひを失して居たのではないかと疑はざるを得ないのである。

一年百磅以上の收入を有する人の財產を倍加すると假定しても穀物價額に對する影響は緩慢で大したことはなからう。しかし若し國中の勞働賃金を倍加したとすれば、穀物騰貴に及ぼす影響は急速著明となるであらう。此の問題に關する一般原則は異論を挿む餘地がない。而して當面の研究問題となつて居る場合、即ち最近の饑饉の場合に於いて貧民に對する補助金が莫大で物價騰貴を招いたことは、この饑饉前に於いて貧民の爲に徵集せられた三百萬磅が千八百一

年には一千萬磅に上つたと稱せられることを考へれば大抵想像がつくであらう。此の增加額たる七百萬磅は下層民の間に作用して專ら食品の購買に使用せられ、かくて國の各地方に於ける賃金暴騰に氣勢を添へ、他方有志の任意的慈善行爲に費やされた法外の金高に依つて更に增大せられ、必需品の價額を騰貴せしむる上に最大の結果を表はしたに相違ない。或る家族持ちの男は、予の知れる所では敎會區から一週十四志を貰つて居たが、彼の平均所得は一週十志であつたから、毎週合計二十四志の收入があつた譯である。彼は饑饉前には八志で毎週一ブッシェルの麥粉を買ふのを常として居たのだから、十志の收入中他の必需品に投じ得る殘金は二志に過ぎなかつた。然るに饑饉に際しては同一量の麥粉を殆ど三倍の金で買ふことが出來た。即ち彼は二十二志を一ブッシェルの麥粉に投じ、前の通り二志を他のものに費し得たのである。かゝる例が一般的になるとすれば實際收穫不足の場合に比し、遙に高く小麥の價を引上げずには置かぬであらう。ところが同樣の例は稀なことではなく、穀物の價格を標準として救助を加減するといふ制度すら廣く行はれたのである。

收穫不足の一八〇〇年並一八〇一年中多額の地方銀行紙幣が發行せられたが、其の起原に於いては、其れは食料騰貴の原因ではなくして寧ろ其の結果であること明である。併し一たび流

通しはじめた貨幣は凡ての物貨に影響し、其の下落に對して頗大なる障害とならずには居ないのである。之れは制度上の大缺陷である。通貨膨張はなるほど饑饉中は商業取引、並に投機上の困難を防止し、各方面の事業をあまり支障なく繼續せしめ得、且つ此の膨張通貨がなかつたと假定すれば、到底行はれ得なかつたであらうやうな多額の穀物輸入を可能ならしめたに相違ないが、他方此の一時的便益以上の弊害を釀成したのである。卽ち此の通貨回收の困難から饑饉時の物貨が何時までも繼續するといふことがそれである。

其れにしても此の膨張紙幣が英蘭銀行から發行せられずして地方銀行から發行せられたのは寧ろよかつたのである。正貨支拂制限期間中は英蘭銀行の紙幣が過剩であつても之れが回收を强いることは出來ない。地方銀行の場合には其の紙幣が流通上不必要となれば之を回收せしむることが出來る。かくて英蘭銀行の紙幣さへ增加して居なければ全體の流通貨幣は減少せしむることが出來るからである。

饑饉の二年が十分の食物と物價を下落させるに最好都合な大豐作と平和の年に依つて伴はれたといふのは英國にとつて殊に幸なことであつた。此の豐作と平和とは相合して賣手と買手と双方に食料が豐富であるとの一般的信念を與へ、買手は買ひを急がず、賣手は賣りを急ぐことになり、かくて市場に供給過多と暴落とを惹起せしめた。又之れに依つて教會區は貧民に對する

補助をやめ、賣手仲間の恐慌が一過した後に於いて物價騰貴の再來を豫防し得たのであつた。

若しこの二ヶ年に續く年が平年作であつたとすれば予は確信する。供給過多といふことは決して起らず、穀物の價額はあまり大した下落を見ず、教會區の補助は繼續することが出來ず、あらゆる物價は永久に增加せる通貨に從ひ、其の調節も緩慢遲々たるものであつたかも知れないのである。

教會區の一時的補助救濟——其れは物價の下落するや否や撤回することが出來たのであるが——を與へる代りに、若し吾々が一般的に勞銀を引上げたと想像すれば通貨縮少と物價下落とに對する障害は尙遙かに增大したことであらう。而して高い勞銀は永久的のものとなつて而も何等の利益を勞働者に與へぬといふ結果に終つたことであらう。

勞銀の眞の騰貴を切望するもの予の右に出づるものは少からう。しかし單に表面上の勞働賃金を無理に推上げることに依つて此の目的を達せんとする企て（最近饑饉中に或程度迄實行せられ、且一般的に推奬せられた如き）に至つては苟も心あるものは小供だましの愚策として之を非難するに相違ない。

勞働賃金は之れを自然的水準に落付くまゝにして置くと最重要な政治的氣壓計となる。卽ち其れは食物の供給と需要との關係を示し、消費量と消費者數との關係を示し、且つ人口の偶發

的事情を去つて其の平均を取つて見ると人口に關する社會の要求も之れに依つて明示されるのである。換言すれば社會現在の人口を正確に維持するに必要な產兒數（一結婚に對して）は二であらうと三であらうと四であらうと其れにかまはず、勞働賃金は其の勞働者を維持するための資金の狀態に從つて、卽ち其れが增減なしか、增加するか、減少するかに從ひ、丁度此の產兒數を扶養するに十分であるか、或は其れ以上であるか、或は又其れ以下であるかに歸着する。然るに吾々は產兒の率を此の方面から觀察せずして吾々の欲するまゝに增減し得るかの如く、否主として保安官の御意のまゝに決定するものであるかのやうに考へる。そこで食物の價額が騰貴し、其の需要が供給を越へ、勞働者をして從來通りの生活を送らしめることが出來ぬやうになると吾々は勞働賃金を增す。而して其れは却つて食物に對する需要を增す所以であることに氣付かず、食物の價額が尙も騰貴を繼續するとて大に驚くのである。之れは殆んど普通の晴雨計の水銀が「暴風」を示して居るのに更に機械的の壓力を加へて「晴天」となし、然る後雨が尙も降りつづけて居るのに驚くやうなものである。

ドクター・スミズは饑饉年に於いては資本家が同一賃金で同數の勞働者を使用すること不可能なるがため、多數を失業せしめるか、或は前よりも安い賃金で働かしめる自然的傾向があることを明示した。Dr Smith かゝる場合に於ける賃金の引上げは必然的に一層多くの失業者を出し多少の穀

物不足に依りて生ずる好果——卽ち下層民をして從來よりも一層勞働せしめ、一層愼重、勤勉ならしめること——を全然阻止するの傾がある。最近饑饉中に於ける下女下男の解雇數及び職工失業數の多かつたことはは悲しくも此の推論の眞理なることを証明した。收獲不足の場合、食物騰貴と比例して勞働賃金が高昇するものとすれば農夫と少數紳士との外は前と同數の勞働者を雇ふことが出來ぬ。而して其の他の方面に雇はれて居る多數の勞働者達は失業し、救を敎會區に求めることになるであらう。從つて自然の順序としては穀物不足は勞働賃金を騰貴せしめずして却つて之れを下落せしむるものである。

アダム・スミズの著書の如きが出版せられ流布せられた後に於いて、經濟學者を以つて自任する人々が、保安官や議會の單なる命令に依つて國家の全事情を一變せしむるの力があるが如く考へるのは不思議なことである。又食物の需要が供給に超へて居る際、殊特の勅令に依つて直ちに其の關係を轉倒せしめ或は之れを調節せしめることが出來ると考へるのも不思議の極である。穀物の最高價額を公定せんとする提議を嫌惡する多くの人々でも、勞働賃金が食物價と比例すべきであるといふのが常で、此の二つの提議が實は殆ど同一性質のものであること、卽ち騰貴前と同一量の食料を買はしむるため穀價を公定し、或は之れに比例して賃金引上げを行ふは結局同じことで、共に穀物不足を惹起するの傾向があるのだといふことに氣付かぬやうであ

る。唯賃金引上げに伴ふ唯一の利益は、其の爲め食料が騰貴して輸入を奬勵するだけであるが、之れは戰役其他の事情に依つて妨害せられることもあるから姑く除外して考へると、食料騰貴に比例する賃金の一般的引上げが失業者に對する教會區の十分な補助金と同時に行はれれば、公定價額の場合に於けると同じく、穀物の消費を節約せしめず、十二ヶ月間の食料としなくてはならない分量を九ヶ月で消費し盡さしめ、かくて食料不足を惹起するのである。かういへばとて吾々は饑饉の場合全く勞働者を放任せよといふのではない。否人道上から見ても、又實際政策上から云つても、吾々は事情の性質が許す限りあらゆる援助を與へなくてはならぬ。若し饑饉價額が繼續すると假定すれば勞働賃金は必然的に上昇する。若しさうでなければ病氣と饑餓とが勞働者の數を急速に減少せしめるから勞働需要の關係上、やはり賃金は食料騰貴の比例以上にも上るであらう。唯一二年の饑饉でも若し貧民階級を放任して置けばかゝる結果に到るのであるから、かゝる困難の時期に際しては一時的の救助を與へてやるのは吾々の義務であると同時に又得策でもある。而してかゝる場合に於いてこそ麭包に對する安い代用品を奬勵し、手段を盡して食物節約の方法を講ずべきである。又穀物の騰貴もあながち苦情の種とすべきではない。蓋之れが爲め輸入を奬勵して食物供給を增加するからである。

救貧法の無效と勞銀の强制的引上げ計畫は、饑饉時に於いて最も著しい現象であるが、予は

上述の如き見地に立ちて之れを考察するのが至當と考へる。而して物價騰貴に對する是等の原因は、他方又饑饉時に於ける通貨膨張に依つて大に促進せられたのであるから通貨の問題に付いて枝葉論に立ち入つたことも亦讀者の寛恕するところであらう。

（註）本章中の饑饉とは一八〇〇年と一八〇一年とに起れる小麥の不作をさす。

第六章　救貧法（二）

凶年に關する考慮を別として見ても、人口の增加が之れに比例する食物の增加を伴はない場合には各人の所得を減ずる結果になると云ふことは明である。食物の分配が必然的に減少するから一日の賃金で買ひ得る食物量が少くなるのである。一體食料の騰貴といふことは、人口の增加が食料の增加よりも大なる場合と、社會に存在する貨幣の分配上の變化から來る場合と二つの原因の中何ちらからも生じ得るのである。舊い國では食料は若し其れが增加するとしても緩慢で規則正しく、急速の需要に應じ得ない。從つて食料騰貴を見るのであるが、他方貨幣分配上の變化は屢々起る事柄で之れ又食料價格の不斷的變化を惹起する原因たること疑を容れぬ。

英國の救貧法は上述二方面から一般貧民の狀態を壓迫する傾がある。其の第一の傾向は必要な食物を增加せしめずして人口を增加せしめるといふことである。貧民は家族を扶養し得る望なく教會區の救助をあてにして結婚する。其れ故救貧法は却つて貧民を造ることになるのである。而して他方に於いては人口增加の結果として國の食物は一人宛少額になるから、教會區の

補助を受けて居らない人々は、其の賃金で從來と同量の食物を買ふことが出來ず、從つて益々多くの人々が救助を必要とするやうになるのである。

第二に是等窮民たち——其れはあまり價値のあるものとは考へられないところの——の爲め救貧處で消費される食物量は一層勤勉にして價値ある連中の分配量を減じ、かくて救民の數を一層多からしめるのである。救貧處に於ける貧民が多くの補助金を得、其の生活狀態が改善せられるとすれば、他方に於いて其れだけ食物價額の騰貴を惹起べく、之れに因り、救貧處外にある人々の狀態を大に壓迫するの傾向がある。

幸にも英國小作人等の間には未だ獨立の氣慨が殘つて居る。しかし救貧法は此の精神を根絶するの傾がある。幸今は其の效力は部分的にしか表はれて居らぬ。若し豫期せられる通り全然獨立の精神が減退してしまうものとすれば、其れは既にずつと昔に表面に顯はれて來なければならない筈である。

個人個人の場合に付いて言ふと氣の毒の至であるが、人に倚賴する生活は甚だ不面目なものと考へなくてはならぬ。之れを恥と感ずる刺戟は全體としての人類の幸福を增進する上に絶對必要と思はれる。此の刺戟を弱める如き一般的企圖は、其の意向に於いて如何に恩惠的なものであつても、其の目的に反する行爲であると言ふべきである。即ち貧民をして若し教會區の援

助をあてに結婚させることがあれば、其れは單に彼等と彼等の兒孫に不幸と依賴心とを起さしむるのみならず、同時に同一階級に屬する他人をも損ふ所以となるのである。

英國の救貧法は食物價を騰貴せしめ、且つ勞働の實價を引下げしむる結果に立至つた。從つて又其れは勞力を唯一の資本とする階級をば貧乏に陷らしめたものである。英國の小商人と小農夫とは細心の注意と儉約とを其の特色とするのであるが勞働者階級には其れが認められない。此の事實は何に原因するか。其れは救貧法といふものがあつて然るのではないか。勞働階級は常に其日暮しの生活を送つて居る。彼等は現在の慾望にのみ沒頭し、あまり將來の事を考へない。現在の必要以上の所得は一般に酒場に蕩盡される。故に救貧法は一般人民間の貯蓄心と貯蓄力とを減退せしめ、引いては節酒と勤勉との最大動力、從つて又幸福の最大動力の一を薄弱ならしめたといつても差支ない。

工場主等は一般に高級賃金が勞働者を亡ぼすといふ。併し若し萬一の場合に教會區の補助に賴ることが出來ないとすれば勞働者は高率賃金を酒色に投ずることなく、其の一部を家族扶養のため節約せずには居られないであらう。工場勞働者が教會區の補助あるため、却つて所得の全部を蕩盡し、極めてだらしない生活を送ると云ふことは、或大工場が破產せる場合、直ちに教會區に倚賴し來る家族の數が非常に多いといふ事實から明に推定が出來ると思ふ。工場の全盛

期中彼等勞働者の得る勞銀は普通の地方勞銀に比べれば遙に多く、失業の場合新らしき職業を得るまでの資金を貯蓄すること決して困難ではないのに彼等は一向之れをしないのである。

自分が死ぬか或は罹病した場合、妻子が教會區の厄介になるかも知れぬと考へて、酒場入りを止めることの出來ないやうなやくざ男でも、若し教會區の補助がなく、右のやうな場合には妻子を餓死せしめるか、或は偶發的な他人の慈悲に依つて生活せしめる外途がないと覺つたならば、流石に自分の所得全部を蕩盡するといふことを躊躇するであらう。

かく人間の懶惰と放蕩とを防止すべき最有力な一刺戟が救貧法の存在せるため缺如せる以上一般民衆の幸福の總額は減少せざるを得ない。而して他方に於いては倚賴的生活をかくばかり一般的ならしめる積極的制度（卽ち救貧法）は、此の寄生的生活に是非共附隨せしめなくてはならないところの恥辱感をも之れを薄弱ならしめるのである。

英國救貧法は疑もなく最慈善的な目的で設定せられたものであるが、此の目的に失敗せることも又明である。教會區に扶持せられる貧民の狀態は凡ての事情から考へて頗るみじめなものではあるが、救貧法あるがため極貧的狀態（若し此の法律のない場合には事實として現はれるであらうやうな）が多少緩和せられることは確である。唯此の制度に對する主要な一反對は少數の貧民を補助するため、一般民衆が憲法の眞精神と全く相容れぬ如き不快不便にして壓制的

な法律に服せしめられるといふこと之れである。授産所に於ける全事務は目下大に改善されたにかゝはらず、自由の思想に反すること夥しいものがある。例へば寄食的家族を持つ男に對して又近く出産すべき女に對する教會區の迫害の如きは最恥づべく嫌惡すべき壓制である。のみならず此の法律あるがため常に勞働市場に惹起せられる妨害は獨力にて自分の生活を支持せんともがく人々の困難を加重せしむる傾向を有するのである。

救貧法に附隨する是等の弊害は到底矯正することが出來ないやうである。若し或る階級の人人に援助を與へるとすれば適當な被救助者を識別し、必要な救助事務を行ふべき權力を何處かに與へなくてはならないが、他人の事柄に大に干渉するのは一種の壓制であるから、普通に此の權力を使行していつたところで、援助を受けなくてはならぬ連中の憤慨を招くことは明である。教會監督や委員等の壓制は今日既に貧民間に於ける怨嗟の的となつて居るが、しかし其の罪は寧ろ制度にあるのであつて是等の人々にはないのである。此の人々もかゝる權力を握るに至る迄は恐らく他の人々と同樣に必しも惡人ではなかつたであらう。

若し英國に救貧法といふものが存在しなかつたとすれば、今より一層ひどい極貧者が少數は存在するかも知れないが、一般民衆間の幸福の總量は現在に於けるよりも遙かに大きかつたであらうと信ずる。

此種のあらゆる制度の根本的缺陷は教會區に依つて救助を受けない人々の狀態を益々惡くして一層多くの貧民を作る傾があることである。實際若し英國の法律の或物をとり嚴に人口理論に照して之れを檢討して見ると、其の法律なるものが全く不可能な事を企て、居ることが分る。其れ故彼等が常に其の目的を達し得ないといふことも實は當然のことなのである。

屢々人の引用し、且つ賞讃するところの有名なエリザベス第四十三號法に曰く

貧民監督者は二名若くは二名以上の裁判官の同意を經、監督者が、其の子女を保護し且扶養し得ずと認めたる者の子女、並に既婚者たると未婚者たるとを問はず、資産なく日常の定職なくして生計を營む能はざるものに對しては、之を就職せしむるため時々處置を講ずべく、又該教會區に於ける各住民並に各土地占有者に適當の課稅を行ふことに依り、毎週或は其の他の期間を限り、貧民を就職せしむるため、亞麻、麻、羊毛、綿糸、鐵、其他必要なる物品並に材料を集め置く樣處置を講ずべし。

此の法律は英國に於いては勞働者を扶養するための資金が政府の一命令に依り、或は貧民監督者の賦課に依つて、思ふまゝに、又無制限に增加せられ得るといふことを述べたてたものであつて、其の外には何の意味もない。嚴密に云ふと此の法律は不遜不法で恰も從來一本の穗を生じたる麥に向つて將來は二本を生ずべしと命令するやうなものである。カニュート王が波に

自分の足を濡らす勿れと命じたとて、自然法に反すること、此の法律には如かないのである。尙又此の法律は勞働者の扶養に對する資金を何う云ふ風に增加するかと云ふ點に付いては何等の指令を監督者に與へて居らない。農商業資本の取扱に對する勤勉、節約、聰明な努力の必要は此の目的に向つて高唱せられては居らぬ。唯政府が發した一命令をば、無智な敎會區の役人が勝手に之れを利用しさへすれば、是等資金が忽ち奇蹟的に增加すると豫期せられて居るのである。

若し此の法律が實際眞面目に勵行せられ、敎會區の援助を受くることに伴ふ恥辱感が消滅するならば、各勞働者は自分の小兒の扶養に付いて少しの心配もなく思ひ通りの早婚が出來る。而して結婚後にも貧困に依つて人口を遮遏せられることがないのであるから、人口の增加は舊い國家に其の例を見ないほど急速となるであらう。讀者諸君は此の場合本書初編に於ける予の所論を想起せられたい。而して文明國政府が如何に努力したところで、果して食物と人口との平衡を得せしむることが可能であるかを一考していたゞきたい。まして況んや勝手氣儘な一命令に依つて人口と食物との關係を調節するが如きは到底望み難きことで、かゝる命令は生產的勞働者の維持資金を增加せしむるよりは寧ろ之を減少せしむる傾向があること明かだ。

各國の實情に付いて言ふと、自然の生產力は常に其の全力を發揮せんとして居るやうに見える。しかし其れが實行問題となつて來ると或國民の勤勞を指導して土壤の與へ得る最大量の食物を生產せしむるといふことは、如何に政府が努力して見たところで到底不可能である。今日人間にとつて價値あるものは凡て財產制度の賜であるが、若し上述の如く土地から人間の食物を極度に獲得せんと欲する場合には財產制度を全然破壞しなくてはならないだらう。一體青年の結婚慾といふものは頗る强烈なもので、若し家族扶養の困難が全然除かれれば二十二歲迄も獨身で居るものは殆んどないであらう。しかし苟も政治家であり合理的政府であるならば、假令より多くの人間食料を得るためとは云ひながら、肉食を禁じ遊樂のための乘馬を禁ずることが出來るだらうか。人は凡て馬鈴薯を食ふべく、衣と住とに對して絕對必要であるほか、國民勤勞の全部を馬鈴薯の生產に投ずべしと命令し得るであらうか。若しかゝる改變が必要なりとしても果して之れを實行し得るか何うか大に疑はしい。殊に況んやかゝる努力を以つてしても數年後には尙且つ窮乏の情態が必ず襲來し、而も其の時には國家資源は從來に比し一層減退して居るべきに於いておやだ。

或國が新植民地の殊特狀況を享有することが出來なくなると、其の耕作の實狀に於いて、或は最も文明的な政治から合理的に豫期し得る狀態に於いては、食料の增加が最早人口の無制限的增加を許さぬやうになつたことを常に發見する。其れ故エリザベス第四十三條號法中のかの

條欵は法律として之を永久施行すること事實に於いて不可能である。

人或はいふかも知れない。事實は理論と反對で、右の法律は過去二百年間效力を有し、實行せられ來つたと。之れに對して私は直ちに答へて次の如く言ひたい。之れが實施は不完全であつた。故に現在迄明文として存在し來つたのだと。

困窮者の受ける些少の救助、監督者が之れを分配する際に於ける氣まぐれな而して侮辱的な態度、英國小農夫間に未だ全然消滅しきらない自然的な又彼等にふさはしい自負心、――かう云ふものが彼等小農夫中思慮あり德義心ある者共をして、單なる教會區の援助以外、何等かの有效な方法で家族を維持し得る望が生まれるまでは結婚せしめないのである。吾々の狀態を改善せんとする望と、之れを惡化せしめはしないかといふ恐怖とは、丁度醫學上でいふ自然の治癒力と同じく政治上に於いて國家の治癒力として働き、人間諸制度から生ずる種々の社會的疾病に對して常に治癒的效果を及ぼすものである。即ち一方には人口增加を奬勵するやうな謬見があり、他方には救貧法から來るところの人口增加に對する直接の奬勵があるに拘らず、此の希望と恐怖とは人口增加を妨害して居るのであるが、其れは此の國に取つて喜ぶべきことである。かく英國民間に於ける獨立心と、愼重な先見とが結婚に對して豫防的效果を發揮して居る外、救貧法自身も亦上述の如き結婚奬勵を標榜するに拘らず、事實上大いに之れを阻害し、

かくて一方の手に奬勵するところを他の手で之れを防止すると云ふ奇現象を呈して居るのである。即ち各教會區は區内の貧民を扶養しなければならない故自然貧民の增加を恐るゝこと甚しく、地主は勞働者が眞に必要で已むを得ぬ場合の外、彼等の住むべきコテーヂを建てるよりは寧ろ之れを壞はさんとする。此のコテーヂの不足は必然的に結婚に對する有力な防害となり、かくて貧救法の效果を阻止し、救貧法其のものを長い間存續させる主な理由となつた。

結婚を豫防すべき是等諸原則が存在せるにも拘らず結婚を敢てした連中は何うなるか。彼等は家に居て貧弱な救助を受け、極貧のあらゆる結果を甘受するか、或はせまくるしく不健全な救貧所に收容せられ、殊に小兒の大きな死亡率を甘受するか、此の二途の中一を選ばなくてはならない。倫敦に於ける教會區小兒等の待遇に付きヂョーナス・ハンウェー（Jonas Hanway）の恐ろしき記述はよく人の知るところであるが、ハウレット（Howlett）氏等の記すところに依ると或る地方に於ける狀況も之れと甲乙ないやうである。かく救貧法に依つて齎らされた過剩人口は、此の法律の作用により、否少くとも其の施行法の宜しきを得ないため却つて緩和せられるのである。然らば殘存せる人々は何うかといふに、國家の勞働維持資金をあまり多くの勞働者の間に分配せしめ、勤勉戒心の勞働者が受くべき分け前をば怠惰者の救助にむけしむる結果となり、救貧所外の勞働者を壓迫して之れを入所せしむることゝなり、終に痛歎すべき今日の狀態、即ち民衆の不自然な

る迄に大きな割合が慈善に寄食するといふ今日の狀態を釀成したのである。

若し當面の問題たるかの法律が實際上述の如く實施せられ、其れが上述の如き結果になつたのだとすれば、吾々は貧民に對して許すべからざる欺瞞を行つた譯であり、到底實現の出來ぬことを彼等に約束したといふことになるのである。

製造工業上大規模に貧民を雇用せんとする計畫は殆ど必失敗に歸し、資本も材料も空費せられると云ふ結果に終つた。偶々其の經營よろしきか、或は大資金を有する少數の教會區は此の制度を今日迄行ふことを得たが、此の製造工場が市場に與へた影響として、前に同一業の工場に雇はれて居た數多の獨立勞働者を失業せしめたに相違ないのである。此の影響は「施捨は慈善に非ず」との題下に議會に建白したダニエル・デフォの切言したところであつた。即ち製造工場に於ける教會區兒童等の雇用に付き彼れ曰く、是等小兒のつむぐ毛絲の一束だけ前に之れを績いだ貧民の仕事がなくなつた譯であり、又彼等兒童の作る粗毛布一枚だけ、コルチエスタ Colchester 其他で作られる粗毛布が減じたわけであると。サー、エフ・エム・イーデン F. M. Eden も同一問題に付いて曰く、抹箒と草箒とは教會區の小兒が作つたにもせよ、或は個々の勞働者が作つたにもせよ、世間の必要以上には賣れはしないと。

或特殊の職業或は工業と競爭的關係に置かれる新資本に付いても同一の理論が成立つかも知

れない。其れは必然從來之れに從事せる人々に損害を與へるに相違ないからだ。併し前の場合と此の後の場合との間には實質上の差異がある。此の後の場合に於いては競爭は全く公平であり、苟も營業を始める者の必ず豫め考慮の中に入れて置なければならぬことであり、彼は彼の競爭者が自分よりも勝れた熟練と勤勉とを有するにあらざれば其の位置を奪はれることなしと安心し得るのである。然るに他の場合に於いては競爭は大なる補助金に依つて後援されて居る。だから獨立勞働者に比して不熟練不勤勉な者でも、其の製品を安く賣り、不公平にも彼等を放逐することが出來るのである。又此の獨立勞働者は、恐らく自分の所得を削り、此の競爭に對して餘義なく寄附をせしめられる。かくて相當利潤を生む職業を支持しつゝあつた勞働維持資金は、一轉して補助金がなくてはやつていけない職業を支持することになる。一般に云ふと勞働維持資金が課稅に依つて徵集される場合には其の大部分は新らしき資金でなくして、實は從來既により有利に使用せられたものを新しい方面にふりむけたに過ぎない。例へば救貧處の粗惡不利益な製造業を奬勵するため農夫が拂ふ貧民稅は自分の土地に投じたならば國家のため一層有利なのである。一の場合には勞働資金は日々に減じ、他の場合には日々增えるのである。貧民を雇傭するための賦課金が如何なる國家に於いても眞の勞働資金を減少させるといふ此の明瞭な傾向は、國民の數が如何に急速に增加しても政府の力を以てすれば職業を求めてや

ることが出來るといふ假定の如何に馬鹿々々しいかといふことを益々明白ならしむるに足るのである。

以上の理論は、小規模な貧民雇傭、殊に貧民の增加を奬勵せぬやう適當の制限を附した雇用方法にまで立至つて之れを適用せしむるつもりではない。予は一般原則をあまりに深く推及する意志はない。唯此の一般原則は常に眼中に置くべきものであると考へる。或る特殊な場合に於いては個々の利益が非常に大きくて一般的の弊害は非常に小さく、前者が明瞭に後者を凌駕する場合もあり得るのである。

予の意志は單に一般的制度としての救貧法が全然誤謬の上に築かれたものであるといふことを示すにある。而して吾々が讀み且つ聞くところの貧民問題に關する普通の論說——卽ち勞働市價は常に相當に家族を扶養し得る程度のものでなくてはならず、又苟も働く意志のあるものに對しては必ず職業を與へなくてはならぬといふ議論は、事實上此の國の勞働資金が無限であり不變であると說くに等しい謬論であると云ふことを指摘したいのである。卽ち彼等の說は國家利源の開發が迅速でも緩慢でも、或は停滯してもそんなことにかまはず勞働階級に對して十分の仕事と十分な賃金とを與ふる力は常に全く同一でなくてはならぬといふに等しく、かゝる結論は最明白な需給の原則と矛盾し、且つ一定の國土が無限の人口を支持し得るといふ亂暴な

前提を含む愚論である。

第七章　救貧法（三）

救貧法の性質と結果に關する前章の所説は一八一五、一六、一七年の經驗に依つて最顯著に確證せられた。是等三ヶ年を通じ最重要な二つの事柄が確立せられ、苟も理性ある人ならば之れに付いて疑を挿むの餘地なきこととなつた。

第一、英國は救貧法にて貧民に約束せる事を事實上行ふことが出來なかつた。即ち職業なきためか、或は他の原因にて自己若くは家族を養ふことの出來ない人々をば教會區の救貧稅にて養ひ或は之に職業を與ふべしといふ約束之れである。

第二、法律に依る教會區の救貧稅を大に增加し、且つ最寛大な賞讃すべき個人的の寄附金があつたに拘らず、國家は働く能力と意志ある多數の勞働者及び職工に十分の仕事を與へることが出來なかつた。

多くの家族はよしんば地方教會區の救貧處へ收容せられ得るとしても、其の雜沓不健康で恐ろしいやうな有樣を見ては何うしても其所へ行く氣になれず、倫敦市及び其他都市で殆んど饑

饑餓の狀態に陷つて居るが、若し此の事實が一般に知れれば、貧民法が其の約束するところを眞に行ふことが出來るとは誰れも云ひ得ないであらう。況んや多くの教會區は必要な救貧稅を增加すること絶對に不可能であるのみならず、現行法に從つて之れを增加すると教會區に流れ込む人數が益々多くなり、集まつた金は益々其の效力を減ずるに於いてをやである。又況んや全國至る處、教會區稅金の不足を補ふため個人の任意寄附を要望するの聲頗る高きに於いてをやである。

救貧法の無效に關する是等强烈な證據は單に救貧法が其の中に約束せることを實行せぬことの明證となるのみならず、同時に該法が之れを實行し得ないものだといふことを示すのである。約束の不履行に對する最上の理由は履行が絶對に不可能であるといふことだ。之れは約束違反に對して正當と考へられ得る唯一の辯解である。なるほど不可能事を履行しないといふのは無理もないことであるが其れを知りつゝ約束するといふのは不都合千萬である。そこで出來る限り此の法律を實行するのが得策と考へるならば、明文と之れに對する釋義を改め、實行可能の事柄に付いてまで貧民の誤解を招くの虞れを避けるがよい。

一方教會區の救貧稅が大に增加し、他方個人の任意寄附も多額に上り、而も之れに個人の絶えざる努力が加はつたにかゝわらず、最近二三年間に起つた需要の急激な減退に因つて失業し

た人々に必要な仕事を授けることが出來なかつたといふことは事實であつた。

又社會の大動搖、卽ち長かれ短かれ、一國民を進歩的にし、停滯的にし、或は退歩的ならしめる大原因は自然法から不可抗的に來るもので、敎會區の救貧稅や個人的慈善寄附等に依ては如何ともすることの出來ないものであるからして、此種努力に依りて停滯的若くは退歩的社會に、勞働の大なる需要――其れは進歩的社會狀態にのみ生ずる現象である――を生ぜしむることは到底出來ない相談である。之れは恐らく事前に豫見し得べき事柄であつた。がよしんば此の眞理を透見し得なかつた人々でも過去二ヶ年間の悲むべき經驗に依つて今日では十分に此の事を了解し得るに至つたに相違ない。

かうはいふもの、現今の困窮を救ふためになされた努力が必しも惡いといふのではない。其れどころか是等努力は賞讃すべき動機から出で、困窮中の同胞を救援する上に大なる道德的義務を果させたのみならず、又事實上大なる善果を表はして居る。少くとも大なる弊害を阻止し來つたのである。其の部分的失敗は先に立つて此の努力を行つた人達の精力と熟練とが足らなかつたといふことを示すものではなくして、單に彼等の計畫中、其の一部分のみが實行可能であつたといふことを示すものである。

現在に於ける困窮の程度を緩和して極貧者を好況時代迄持ちこたへさせることは出來る。之

れがため富者竝に他の貧民階級を多少犧牲にしなければならぬといふ不便はあるには相違ないが、兎に角彼等極貧民の苦痛を一時緩和してやることは出來る。しかし個人或は國民がどんなに努めて見たところで貨物竝に勞働に對する需要の激減――其の原因がどこにあるとしても今日では人力の如何ともすることの出來ないものである――を直ちに回復することは到底不可能のことである。蓋其の根本原因は自然法に依つて不可抗的に定まれるものであるからだ。

貧民救濟に關する全問題は今日八方ふさがりの狀態に在り、前章に引用したダニエル・デフォーの言葉を想起すること今日に於けるほど緊切なることはない。全國工場殊にスピタルフィールズに於ける織物業者は生產物需要の減退に依つて卽刻直接に惹起せられた不況の底に沈淪して居る。而して其の結果として工場主等は其の供給を需用に應ぜしむるため職工の多くを解雇すべき必要に迫られて居るのである。他方特志家たちは資金を募集して是等解雇職工等に職業を與へやうとして居るけれども其の結果は既に供給過多に陷つて居る市場に益々過多を甚しからしむるだけに止まるであらう。工場主等が之れに反對するのは自然でもあり又正當でもある。何故なら若し此の特志家連の計畫が行はれゝば、工場主等は製產品の供給を差止めることに依り、其の資本の全滅と、其の結果として必然的に起る全職工の解雇とを豫防することが出來なくなるからである。

他方では又一部商人と製造業者は、國内生産と競爭し且つ内國勞働者の就業に妨害となるやうな一切の外國品を禁ぜよとやかましく云つて居る。而して之れに對しては又輸入材料に依つて製造業を營む勞働者等の自然的な又大にもつともな反對がある。内國材料のみを使用する宮中舞踏會は國内一部の勞働者に職業を與へる代り、他の方面に於いては其れと同一數の失業者を出さしむるものであると云つて差支ない。

さりながら出來ることであれば失業者を救ふといふことは好ましいことである。懶惰と、長い間單に人の慈善によつて生活することより生ずる弊習の、悪い道德的結果とを避けるだけの目的にも失業者に職を與へてやりたい。しかし上に述べた諸種の事情から考へてもかゝる企てに於いては愼重な警戒が必要であり、殊に彼等を使用すべき仕事の選擇に際しては、現存の資本を妨害する結果に終らないやう戒心することが必要で、例へば道路の修繕、橋梁、鐵道、運河の修築等あらゆる土木工事は其の虞れなきものであり、且つ今日のところでは農業資本も大なる損害を蒙つて居るからして、寄附金にて行はれる土地に對するあらゆる勞働も亦其の中に數へることが出來やう。

しかしかく勞働を雇用する際に於いても或人々の利益は他の人々の不利益とならざるを得ない。各人の收入中此の種寄附金として支出せられる部分は、之れを普通の支出とする場合には

其れだけいろ〳〵の勞働者を雇ひ得るわけであるから、寄附金となつたゞけ普通勞働の需要を減少させた譯で、從つて之れがため一部勞働者の困難を甚しからしめた譯になる。しかしかゝる場合に於いてはかゝる結果は避けがたいことであり、臨機の處置として、或特殊な部分に於ける貧乏を輕減してそれを一般人に分擔せしめ、かくて弊害を一層大なる範圍に及ぼすといふことになつても其れは已むを得ぬことである。

そこで吾々の目的として忘れてはならないことは好景氣の來る迄、現在の不況時代を通じて一般人民を援助してやるといふことである。現今の不景氣は近年人口の增加に對して與へられた甚しき刺戟に依つて大に激成せられて居ること疑ふの餘地なく、此の結果は急には減退せぬであらう。しかし次ぎの人口調査報告を行ふ時分には結婚も出産も一八〇〇年竝一八〇一年に於けるよりも更に大に減少し死亡率は大に增大すること、信ぜられる。而して其の情勢が或程度で數年間持續すれば人口增加の勢は大に阻止せられるであらう。尙又歐米諸國に於ける富の增加のため貨物の需要が增し、國内に於ける貨物の供給が通貨の改變に依る富の新しい分配法に適應するやうになれば、農業上商業上の取引は旺盛となり、勞働者も十分の職業とよき賃金とを得るやうになるであらう。

貧民の困難、殊に近年に於ける浮浪人の增加に關しては最誤れる說が行はれ來つた。戰役中教會區の救濟を必要とする貧民の增加は主として必需品の高價故とせられた。しかし是等必需品の價額は其の後大に下落したが、救濟を要する人口は却つて大に增加したではないか。

而して今や說を爲すものは曰く、貧民窮乏と勞働需要の異常なる減退は一に租稅のためであると。しかし予の確信するところに依れば租稅全部が明日免除せられるとしても勞働不況は終らないばかりか却つて大に助長せられるであらう。かゝる事柄は通貨の價値を一般的に大に騰貴せしめ、同時にかゝる社會的急變に必ず隨伴する產業不振を惹起するであらう。人のいふやうに勞働階級が今かりに給料の半分以上を諸稅に支拂ふとする。稅を撤廢することに依つて物價が半減した場合、勞働賃金だけが依然從前通りの表面價値を維持するものと想像する者があれば勞働賃金を調節する原則を知らない人と評せざるを得ない。今一步をかし、物價が下落し通貨が其の割合で縮少せられたのに賃金のみ暫く從前通りであるとすれば勞働者の多數は忽ち解雇せられて職を失ふであらう。

課稅の結果が多くの場合甚だ有害であることは疑を容れない。しかし課稅の免除に因る救濟の效果は決して課稅のために生じた弊害とは等しくないといふことは殆ど除外例のない一般原則と云つてよい。而して一般に云へば、課稅の特殊弊害は需要減退といふことにはなくして寧

ろ生產に與へる妨害といふ點に存する。凡て國內にて生產消費せられる貨物に付いて言へば、借欵の結果、資本を收入に轉換すれば必や供給に對する需要の割合を增大するに相違なく、又適當なる課稅の結果、個人收入を政府の收入に轉換すれば、個人の負擔は重くとも一般需要の量を減少せしめるといふ傾向を生ずることはない。なるほど課稅せられた人々は購買力を減ずるから其の需要も減ずるわけであるが、其れだけ政府並に政府使用人の需要を增加するからである。若し年收五千磅の地面が二千磅分だけ入質され、かくて二分されたとすると、相當の暮し向きの二家族が其の地代で生活することが出來る。兩家共家屋、家具、馬車、羅紗、絹布、綿布等に對してかなり大きな需要を起すであらう。而して此の地所の眞の所有者は右地面の五分二を質入れした爲、勿論以前に比べて比較的貧乏になつたに相違ないが、今右質權が燒失した場合を想像すると、之れに依つて地面の所有主は元通りの財產になつたが綿布、絹布、羅紗等の供給者たる製造工業者並勞働者は何等利益を蒙らざるのみならず、富有になつた地主が從前二家の需要を諸種品目に對して起し得るまでにはかなりの時日がかゝるかも知れない。否地主は其の增加收入を右の品目に對して費さず、却つて別途の方面、例へば乘馬獵犬從僕等に消費するかも知れない。果して然りとせば從來絹布、綿布、羅紗等の供給者であつた製造職工、並に勞働者は失業するかも知れないのみならず、資本と國家資源の發達の上に頗る不利益な影

響を與へるであらう。

此の實例は勞働階級に及ぼす國債の影響を、一寸想像した場合よりもよりよく表はすものである。而して又國債がなくなれば社會大部分の需要が增大するから、他方資金の所持者及び政府側の需要減退を償つて餘りあるだらうとの想像説が誤謬であることをも同時に表はすのである。

然らば國債は如何に重くとも國家產業に大害を及ぼすことがないかといふに予は必しも左樣は考へて居らぬ。凡そ財產の分割は或程度に行はれる場合には非常に有益であるが、極端に小さく區分されると生產に對して致命的結果を與へるものである。一年五千磅の收入ある土地の分割は一般に需要を增大し、生產を刺戟し、社會の機構を改善するの傾向があるが、年收八十磅の地所を區分する時には一般に其の反對の結果を表はすであらう。

國債に因る土地分割は多くの場合極端に流れやすい上其の方法が又大に生產を阻害する場合がある。殆んどあらゆる種類の課稅は多少此の阻害を惹起するものに相違ないが、併し好都合な事情の下に在つては、此の生產阻害は供給との比較上需要に與へられる好刺戟に依つて帳消しにされる場合もある。例へば最近戰役中、生產と人口とが却つて法外に增加せる事實から考へると、課稅は隨分重かつたに拘らず生產力は實際上妨害せられなかつたと假定して差支ない。

たゞ戰役後國內原料品の交換價値が著しく暴落し、且つ又通貨の大縮少をなせる刻下の事情に於いては、課稅の急激な增加が生產不況の他の諸因を一層甚しからしめて居るに相違ない。此の結果は大に土地にも及んで居るが之れは既に多少緩和せられた。しかるに商工業階級——其の大多數は目下失業して居る——中に在つては、目下の不況は資本の缺乏と生產機關の缺乏から來たといふよりは寧ろ製造品の販路缺乏から來て居ること明瞭である。(因に云ふ。此の販路缺乏に對しては、課稅の免除は適切でもあり、又永久的政策としては絕對に必要でもあるが、目下直接特別に必要な事ではない。)

現在の危機といふ事を別にして考へると、浮浪化增加の原因は、第一、製造機關が膨張し工業勞働が不可避的に變形せることである。第二、殊に或郡に於いて採用せられ、目下全國に蔓延しつゝある制度、卽ち當然勞働賃金として支拂はるべき金額中、かなり多くの額が教會區課稅に依りて支拂はれる制度である。戰役中勞働に對する需要が大きく且つ增加しつゝあつた際に於いては、此のやうな制度さへなかつたら賃金が必需品の價額上騰と相待つて騰貴することを阻止し得なんだであらう。其の證據には此の制度の施行最少かつた地方に於いて賃金は最も騰貴して居るのである。蘇格蘭及び北部英國の實情は正に然りで、勞働者の生活改善、必需品、便宜品に對する使用增加は此の地方に於いて最著しいのである。而して英國の他の地方中此の

制度が行はれること少くして、而も都市等の賃金が物價と同一程度に騰貴しない場合がありとすれば、其れは附近地方の安價に膨張せる人口がそこに流入して競爭者の位置に立つたからである。

アダム・スミズの會ていつた事は肯綮に當つて居る。曰く、議會が牧師補の俸給を增さんとしてもだめであつたのは牧師補がいくらでも安く供給されるからであり、而して其れは教會のため大學で教育される青年に補助金が與へられるからであると。同樣に二人以上の子供を持つ勞働者が教會區の補助を受ける權利があると認められる限り、勞働供給は益々多く如何に吾々が努力して見たところで、勞働賃金を增し自分の所得で普通の大さの家族を扶養し得る程度に上げてやることは出來ないのである。

ところで現行救貧法は自然の結果として此の制度を一般的ならしめるやうに見えるが、若し此の制度が一般化されれば教會區補助は漸次益々早くから與へられるやうになるに相違なく、左樣なれば政府と憲法とがあらゆる他の點に於いて夢想家の夢想し得る程度に完全になつたとしても、又議會が年々召集せられ、普通選擧が行はれ、戰役と課稅と年金とがなく、皇室豫算が千五百磅に削減されても社會の大部分は尙浮浪人から成り立つことになるであらう。

予は貧民の結婚を禁ずる法律を提議するものとして非難を受けた。しかし之れは事實でない。單に事實でないのみか私は明瞭に次の如く云つたのである。若し或人が家族を扶養し得る見込なくして結婚するとするも其れは全く本人の自由であると。而して予の議論を誤解せる連中が或禁遏的提議を予に暗示せる場合には、予は一樣に而して又常に之れを排し來つたのである。予は積極的に法を設けて結婚年齡を制限するといふことは不公平であり不道德であると確信するものである。而して平等制度竝に救貧法——此の二制度は其の起源は大に相異するとしても同一結果を生むべき性質のものである——に對する予の最大の反對は次の一事に歸するのである。卽ち此の兩制度が有效に實施せられる社會は、終に一般的貧乏か或は結婚に對する直接的立法か、二つの中何れかを選ばなければならなくなるだらうとのこと之れである。

予の眞に提唱するところの方法は上述の如きものとは全く異なる方法である。其れは救貧法を漸次に、卽ち現在社會の人々に影響を及ぼさない位の程度に於いて徐々に之れを撤廢することと之れである。而して予が敢て此種の提議を爲す所以のものは、救貧法が明に勞働賃金を低下せしめ、勞働者の一般狀態を却つて本質的に惡化せしめたと確信するが故である。此の法律の實施は到る所人心を萎縮せしめて居るが、大都會の勞働階級に對する影響は殊に甚しいものがある。田舍の教會區の場合に於いては貧民は其の低廉な賃金に對して多少の報償がある。卽ち

其の子供が一定數を起ゆれば眞實教會區の補助を受け得るのである。自分が結婚すれば浮浪人の父たらざるを得ないと考へる時、勞働者は最不愉快な感じを起さざるを得ないであらうが、兎に角此の點さへ諦めがつけば、乏しいながらも多少の報償を與へられることは間違がないのである。然るに倫敦其他大都會に於いては彼等は單に低率賃金の弊害を嘗めるだけで何等報償を期し得ないのである。何故なら地方に於いて補助金で育てられた人々は、必然的に而して又自然に都會に流れ込み都會の賃金を低下せしめて居るが、他方都會にて結婚して大家族を營むものは事實餓死に瀕しなければ教會區の補助を受けないからである。加之工業勞働者が家族扶養のため得る補助金といふものは全く取るに足らない位僅少のものなのである。

此の地方人との競爭の結果を救濟するため都市職工等は相結合し、之れに依つて勞働賃金を維持し、一定率以下の賃金にて働くことを互に拒絶せんとする傾向がある。しかしかゝる結合は單に不法（註1）であるのみならず、不合理でもあり無效でもある。而して若し或る特殊職工數が過多で自然的に賃銀を引下げる程であるのに、强いて之れを維持すると假定すれば多數職工を失業せしむる結果となるべく、此の失業者を食はせるための費用は高率賃金に因つて來る所得と相殺し、從つて職工全部から見ると折角つりあげられた賃金は何にもならないわけになる。

全體としての勞働の供給が需要に越ゆる場合に於いては、社會各階級が等しく十分の賃金と十分の職業を享樂するといふことは明に絶對不可能事である。而して救貧法なるものは勞働の供給を著しく需要に越えしむる傾のあるものであるから、其の結果として一般的にあらゆる職業の賃金を下落せしむるか、或はある特殊賃金のみ人爲的につりあげるとすれば、多數職工を失業せしめ、因りて以つて勞働者の貧困を益々甚しからしめるに相違ない。

果して左樣であるとすれば（私は左樣であることを確信するものであるが）現在最人氣ある論者達が勞働者の狀態を一般に改善せしむべき行爲を抑止し、却つて必然的に彼等を困窮不幸ならしむるやうな制度を提唱するといふことは、苟も社會大多數の幸福を念とする人々にとつて最大遺憾事であると云はなくてはならぬ。

即ち彼等は現に說いて曰く、勞働者は自分の願望を拘束し、結婚に付いて慮る必要はない。何故なら教會區は出產兒に對して扶養の義務があるからだと。又曰く、勞働者は儉約の習慣を養ひ、貯蓄銀行を利用する必要がない。即ち彼等が結婚せる後一戶を構へて相當氣樂に世帶を始め得んがため、儉約し貯金するの必要がない。何故なら教會區は彼等に衣服を與へ、授產所に於いて寢床と椅子とを供するの義務があるからだと。

又曰く、上流社會の人々は用心と節約との義務を高唱するが、之れは單に彼等が貧民救濟費

を惜むためであると。しかし道德宗教の法則と撞着することなく富者の富の最大の分前を貧民階級に分つべき唯一の方法は、貧民が自ら結婚を愼重にし、結婚前後の節約を行ふにあることは疑ふの餘地がないのである。

又曰く、生めや殖せやといふ神の命は人類の增加に對して神自身の定めた自然法を否定せよといふ意味だ。人は其の國の食糧を增加することが不可能なるため、自己の子孫の大部分が夭折し、從つて實際上人口の繁殖があり得ない時も、其の子孫が十分に扶養せられ、人口の急速な增加に對して十分の餘地と食物がある場合と同じく、等しく早婚を行ふの義務があると。

又曰く、勞働者の狀態に關しては、英國の如く人口稠密で未開墾地が比較的に不毛である國と、米國のやうに殆どたゞで何百萬エイカーの土地を得られる國との間にも何等の相違ある筈なく、其れは皆課稅の結果として來るものであると。

即ち又曰く――奇怪なる愚論よ――勞働者が米國で一弗の日給を得、英國で二志を得るのは英國勞働者が其の所得の大部分を租稅として支拂ふからであると。

是等の說の中、あまりに馬鹿々々しいものは多數勞働者の常識判斷にて直ちに排斥せられること疑を容れない。若し勞働者が主として敎會區の扶助に依つて子女を扶育するとせば、彼等は衣食住とも敎會區の供するものを用ひ、又其の管理に甘んぜなければならず、かゝる生活が恐

らく幸福繁榮なるを得ないことは彼等の承知せるところであるに相違ない。

つまらぬ機械工でも同業者の數が少ければ少いほど、其の工場主のために作る品物の代價から自分の貰ふ所得が多いといふことは知つて居るだらう。果して然らば次の一事は之れから來る最自然的な推論ではないか。即ち勞働者の供給過多を豫防すべき唯一の道德的方法であるところの愼重な結婚は、國家の生產する全貨物の澤山な分前を勞働者が永久に獲得すべき唯一の方法であるといふこと之れ。

次に苟も聖書を讀める者ならば、人間に對する神の命令が人口を殖やせといふことに存し、決して疾病と死亡とを生ぜよといふ意味ではないと解すべきである。而して若し彼が明瞭健全な理解力を具へて居るならば必や次の一事を察知するであらう。即ち食物の增加せざる國土に於いて各人が一般に性的衝動の最高い十八歲二十歲で結婚すると假定すれば、其の結果貧乏を增し、疾病を增し、死亡率を增すが、人口は決して增さないといふこと之れである。增加人口は食物なくしては生くることが出來ぬといふことが若し眞理ならば（之れ何人も疑ふ能はざるところであらう）、其の眞理が繼續する限り他物は增加しても人口は決して增加しないのである。

又土地の性質を知る勞働者が多少の判斷力を用ゆるとせば、現在に五十倍する人口を容易に支へ得る米國と、二三倍の人口をも異常な努力なくしては支へ得ざる英國との間には、租稅の

問題を別としても、大なる相違があるといふことを察知するに難くない。少くとも現に既にかなり澤山の牛を飼へる小牧場と、將來未だ五十倍の數を養ひ得る大牧場の間に於いて、牛の增加數を飼養し得る能力に於いて、莫大の相違あることは觀取するに難くはない。果して然らば、人間は貧富共に、他の動物と同樣、土地の生產物にて生活しなくてはならないこと明なるが故に、動物に付いて眞理であることは人に付いて僞である筈がないと斷定しなくてはならぬ。而して是等の事柄は更に又彼をして恐らく自然に次のやうに推論せしむるであらう。人間の不足せるところでは、出產者は皆容易に又氣樂に育成せられるから、勞働賃金も早婚と大家族を促す底のものであらう。之れに反し既に人口殆んど充實せる地方では、同樣に早婚を促すほどよい賃金を得ることは出來ないのである。

英國勞働者竝に機械工で吾英國のパン、牛肉、勞銀が大陸諸國に比して高いといふことを聞知せぬものは少からう。而して同時に彼等は此の高價は主として稅金のためであると聞かされて居るのである。なるほど此の稅金なるものは勞働の貨幣價値を引き上げしめた原因には相違ないが、勞働者に對してはむしろ益を與へずして害を與へて居るのである。何故ならば他の貨物の價額は先に既に騰貴して居るからである。之れだけの事を心得て居りさへすればよほど惡い頭でも、歐洲諸國に於ける勞働の貨幣價値を英國に於けるよりも低廉ならしめて居る其の同

一の理由（卽ち無稅といふ一事がこが獨り米國に於いて其の反對の結果を表はし、英國に於ける賃金の倍以上ならして居るといふことの如何に不合理であるかを了解するに難くないだらう。そこで米國に於ける高率賃金の原因は何であるか直ぐ理解は出來ぬとしても單に稅金がないといふ一事——其れは實は全く正反對の結果を表はし得るのみであるが——以外、其れとは頗る異つた種類の原因から來るに相違ないといふことが理解せられるであらう。

革命後に於ける佛國勞働者の狀態改善といふ事に付いても、若し其の事情が詳述せられるならば、最近宣傳せられつゝある諸說とは反對な强い推定を與へることになるであらう。革命後に於ける佛國勞働者の狀態改善には出產率の大減少といふ事實が伴つて居り、之れは自然に又必然的に勞働者に對して國內生產物のより大なる分前を與へ、且つ若し出產率が高かつたとすれば直ぐに消滅するであらうやうな利益（卽ち敎會附屬地、竝に他の國有領土の賣却より生ずる利益等）をも之れを保持せしむるを得た。革命の結果個々の佛蘭西人は他人に倚ること少く、自己に倚ること多くなつた。從つて勞働者は一層勤勉、一層儉約になり、又一層愼重に結婚するやうになつた。若し是等の結果がなかつたとすれば革命は彼等にとつて何等價値なきものであつたといつてよろしい。勿論政治の漸進的改良進步によりても同樣の結果を齎らし、因りて以つて勞働者の狀態を改善することが出來やう。しかし若し敎會の救濟が廣く行はれ、且

つ最近宣傳せられたやうな說が行はれて其の效果を阻害するならば、其の他の點に於ける如何なる改善もあまり大した重要なものではなくなる。かくの如くんば想像し得る最上の政治が行はれても、尙何千何萬といふ饑餓に瀕せる失業者が出ることであらう。

若し多少に拘らず生れた凡ての人が土地に依つて生活すべき權利があり、結婚上此の人口を制限すべく用心を加ふる必要なしと說かれるならば、人性周知の傾向に因つて人は皆自分の慾望の誘ふまゝに行動し、益々敎會區の扶助に倚賴するやうになるであらう。故に貧民に關して是等の說を主張する人々が浮浪人の數が多いと云つて愚痴をこぼすことよりより大なる矛盾、大なる自家撞着はないのである。かゝる說と浮浪化の傾向とは不可分の關係に在る。兩者を分離せしむることは、如何なる革命如何なる政治の變化を以つてするも到底出來ないのである。

註(1)、其の後狀況が變化した。しかし此の節の後段は殊に現時――一八二五年末――に適用が出來る。勞働者が若し其の賃金を貨物の需要と其の價額の許す程度以上にあげることが出來るとすれば、他方に於いて彼等の凡てが（否殆ど凡てですら）就職すること絕對に不可能となる。卽ち此の場合若し工場主が從前通りの人數を雇用すれば工場主が必然的に破產せざるを得ないのである。勞働者は最近漸くこの事に注意するやうになつた。

第八章　重農主義

農業は其の性質上、農業に從事する家族數以上、より多くの家族に食物を生產してやるものであるから、嚴密に農業を以つて立國の基礎とする國民は其の人口に對する必要以上に食物を所有し、食物缺乏のため其の人口が阻害せられるやうなことはないと想像する人があるかも知れない。

かゝる國の人口增加が、生產力の缺乏からも、將た又人口に比較して實際土地生產物の不足といふ何れの原因からも直接阻害せられることないのは明白なことである。しかしかゝる國の勞働階級に付き其の狀態を研究して見ると勞働實賃金が割合に少く生活資料を十分購ひ得ないため、人口の增加が事實上阻害されて居ることがあるのを發見する。

土地と地勢の如何によつては、而して又資本が不足せる場合に於いては或一國は原產物を加工せず、寧ろ之れを賣つて外國品を購入する方が有利であるが、かゝる場合に於いては原產品が消費量以上に生產せられるのは必然のことである。併しかゝる情勢は勞働階級の永久的狀態

とか或は又勞働者の增加率とかいふものとはあまり關係のないことである。卽ち農業を以つて立國の基礎とし、勞力の大部分が土地に向けられるからといふて其の國民の情況が必幸福であるとか不幸であるとか、或は又一定率を以つて增加するとかせぬとかいふ風に一定せるものではなく、やはり千變萬化の狀態を生ずるだらうと思はれるのである。

而して農業國に於ける貧民階級の狀態に付き、二つの極端の場合を豫想して見ると恐らく其所には頗良好な狀態と之れに反する場合があり得るのである。

肥沃な土地が澤山あり、之れが購入と分配とに困難がなく、而も原產物の輸出が容易である場合には、資本の利潤と勞働賃銀は共に高く、是等の高率利益と賃銀が、他方儉約の習慣に依つて支持せられるならば、資本の急速な蓄積と勞働に對する不斷の大需要とを促すべく、同時に人口の急速な膨張は、生產物に對する需要の減退を防止し利潤の減少を阻止するであらう。而して若し土地面積が漠大で人口が稀薄である場合には資本と人口とが急速に增加してもしばらくは餘力を存するのである。かゝる農業狀態の下に於いては、勞働者は最大量の必需品を得ることが出來、勞働階級の狀態は最も良好であらう。

かゝる情態下に在る勞働階級富力の唯一の缺點は原產物の價額が比較的に低廉な事である。かゝる國にて使用される加工品の大部分が其の原產物を輸出することに依つて購入せられる

ものとすれば、其の必然の結果として原產物の相對價額は貿易對手國に於けるよりも安く、加工品は之れに對して高いわけになる。しかし原產物の一定量で輸入加工品を他國に於ける如く多量に購入し得ざる所では、勞働者の狀態は彼が自分の分前として取り得る原產物の分量に依つては精確に測定することが出來ない。例へば或る一國に於ける勞働者の年收が小麥十五クォーター（一クォーターは二十八封度）の貨幣價値に相等し。他國の場合に於いては九クォーターに相等すると假定すると、其の相對的狀態、卽ち彼等の享樂し得る慰安品の分量が十五對九であるとは斷定し得ないのである。蓋勞働者の所得全部が食費としては投ぜられないからである。而して又食費として投ぜられた殘金が前者（卽ち十五クォーターの所得ある國）の場合に於いて、後者（卽ち九クォーターの所得ある國）に於けるよりもつかひでがなく、衣類其他の便宜品をあまり多く買ふことが出來ないとすれば、後の勞働者の狀態は吾々が一寸考へて見たよりは前の勞働者の狀態に近いわけになる。

但し分量といふものは常に價額の不足をうめあはせる上に有力な作用をなす傾のあるものであるから、最大量の收獲を得る勞働者は、よし原產物の比例程大なる差を示さなくとも、尙日用品其他に於いて最大量を享樂することとなるであらう。

米國は勞働者の狀態に最も好都合な農業國の實例を示して居る。米國は國勢上其の資本の著

大な部分を農業に使用し得るやうになつて居るし、其の結果は又大に資本を增加せしむることとなつた。而して資本の量と價値との急速な進歩は勞働に對する確實不斷の需要を維持せしめ、其の結果勞働者は殊に良好な賃金を受け、異常に多くの日用品を購買することも出來、人口も亦異常な速力を以つて進展し來つたのである。

此の米國に於てすら、穀物の相對的に廉價であるといふ不都合を感じ來つたのである。最近戰役迄米國は加工品の大部分を英國から輸入し、英國は小麥と麥粉とを米國から輸入し來つたのであるから、米國に於ける食物價額は加工品との對比上英國に於けるよりも大に低廉であつたに相違ない。しかも之れは米國に輸入せられた外國品に對して然るばかりでなく、一般內國加工品に對しても亦同一の關係にあつたのである。何故なら農業の上では價額決定上の二要素たる賃金と資本とを大に投じても、沃土が十分にあるといふ事實が他方に存在して賃金と資本利潤の昂昇とを阻止し、かくて穀價の騰貴を抑制するのである。しかるに加工品製造の場合に於いては、此の二要素は何等の勢力に依つても抑制せられないのであるから必然的に物價に作用し、內外品たるを問はず、一般加工品を食物に比して高價ならしめるのである。

こんな譯で米國勞働者の狀態は便宜品慰安品といふ點に於いては、食物の相對的分量が示す程には、他國の勞働者に比して有利でないやうに思はれるが、之れは又事實經驗の證明するところである。曾つて二十年以上も米國に在留せる佛國人シモン Simond 氏は英國の大部分を旅行し、一八一〇——一一年に亙つて旅行記を書いて居るが、同氏は小作農夫等の家庭に於ける便宜慰安な生活、衣服のこざつぱりと清潔なる事に一驚を喫して居る。或地方では到る所こじんまりとしたコティヂュと、心持よい着物とを見るのみで、殆ど貧困窮乏の影を見なかつたので、英國の貧民と其の住屋が何所にかくれて居るかと疑つたほどであつた。此の米國から上陸したばかりのしかも始めて英國を訪問せる立派な、精確な、而して又一見最公平な觀察者の觀察は興味もあり又有益でもある。同人の指摘せる事實は一部は兩國の生活樣式習慣等の相違からも來て居るかも知れないが、大部分は上に述べ來つた理由に基くものと云はなければならない。

食物の相對價が低廉であることより生ずる不利益が、貧民に及ぼす結果の著明な實例は愛蘭に於いて見ることが出來る。愛蘭では最近一世紀間、米國を除く如何なる他の國に於いても未だ經驗せざる如き急激な人口增加を可能ならしめたほど、急速に食物が增加し、下層社會の主食物となつて居る馬鈴薯が其れほど多く收穫せられたのである。愛蘭勞働者の馬鈴薯にて受取る賃金は、英國勞働者が小麥にて受取る所得と比べると、其の各々を以つて養ひ得る人數は正に二倍である。而して過去一世紀に於ける兩國の人口增加率は殆ど此の習慣的食物の比と匹敵するのである。しかし便宜品慰安品に對する一般狀態は、とても此の比例通りにはいかぬ。馬鈴薯

を栽培する場合には澤山の食物が取れ、從つて之れに依つて生活する勞働者の賃金は低下するのであるが、他方に於いてはしかし地代を引き下げずして却つて上げる傾があり、而して又地代と共に、馬鈴薯以外あらゆる種類の原料品價額をも騰貴せしむる傾がある。又かゝる狀態につきものであるところの怠惰と熟練の缺乏とは凡ての加工品を比較的高價ならしめるから、從つて內國製品に於いてすら大なる相對的不利益を忍ばなくてはならず、外國品に對しては原料品たると加工品たるとを問はず、更に大なる不利益が伴ふわけである。卽ち愛蘭勞働者及び其の家族が消費した殘餘の食物收獲は之れを貨幣に代へてもあまり多くの衣類、家賃、其他便宜品を買ひ得ない。從つて彼の生活狀態は是等事物の關する限りに於いては、食物の比較的豐富なるに對して極端に貧困なのも無理はないのである。

愛蘭勞働者の表面賃金は英國勞働賃金の半分を越ゆることあまり多くではない。食物の收獲はなるほど分量は多いが之れは其の廉價を埋め合せるには足らない。其れ故愛蘭勞働者の賃金の一定殘金、例へば其の四分一、五分一で加工品輸入品を買ふとしてもいくらも買へぬ。之れに反し米國では勞働賃金は殆ど英國の倍であるから、彼れが收獲するところの食物を以つて加工品、輸入品を購買する場合、英國勞働者のやうに安くは買はれないが、何しろ收穫する食物が非常に大量であるから其の價額の低廉を補つて餘りあるのである。從つて米國勞働者の狀態

を英國勞働者に比べると、其の差は食物量の比ほど大きくないとしても尙かなり有利である。だから結局米國は勞働階級の狀態が最善な農業國の一實例と稱してよからうと思ふ。

農業國に於ける下層社會の狀態が極貧である例はより一層多い。資本の蓄積が止る時は、人口は其の增加を停止するに前ちて、下層民の習慣の許す限り深く、實際食物の限界點までも壓迫を蒙るのである。言ひ換へると勞働の實賃金は非常に低下して單に停滯的人口を支へ得る程度に至るのである。土地面積が尙廣く資本が乏しい時にかゝる狀況が起れば——其れは實際に於いて屢々見られることだが——資本の利潤は自然高くなるであらう。しかし土地が肥沃で豐富なため又穀物に對する需要が不況なため、穀物の價額は頗る低廉である。然るに資本の高い利潤は他方に於いては資本缺亡につきもの、熟練の不足や分業の不足やと結合して內國加工品を割合高ならしめる。而してかゝる情勢は愼重な抑制（其れは便宜安慰の生活に最も多く胚胎するものである）といふ習慣の發生に不都合であるから人口は益々增加し、賃金にて買ひ得る食物の量が頗る僅少となるまでは決して已まぬであらう。要するに食物にて測られた勞銀が低く、而も亦內外加工品と比較して食物が割合に低廉な國に於いては勞働者の狀態は最惡である に相違ない。

波蘭、露西亞の一部、西伯利、歐羅巴土耳其等は此の種の實例である。波蘭では人口は停滯的で殆ど增加せぬ。土地面積に比して人口と產物とが乏しいのであるから資本も乏しく其の增加亦遲々たりと推定して差支ない。其の結果として勞働に對する需要もあまり增進せず、實賃金、即ち勞働者の必需品竝に便宜品購買力も頗る低く、人口は纔に其の低い增加率と平行する程度に止るのである。かゝる狀態であるから小農夫は便宜品慰安品にも慣れず、人口に對する妨害も豫防的のものであるよりは寧ろ積極的性質のものであること推察に難くない。

併し穀物は實際多量に存在し、年々の輸出量も少くないのだから、人口の增加を制限するものが土地の沃質や其の產出量の少いのに因るのでないことは明で、其れは勞働者に與へられる食物の量と價値が少く、農業に充當される資金の增加率が低い事實に因るのである。

波蘭に於いては勞働に對する需要は頗る少い。人口は稀薄であるが、國の乏しい資本は尙十分之を雇用し得ない。從つて勞働者は纔に停滯的人口若くは增加率の頗る低い人口を維持し得るだけの食物量を得るに止まり萎微振はないのである。加之彼の所得物は相對的に頗る廉價であり、之れを以つて輸入品や加工品を買ふとしてもいくらも買へないのである。

かゝる事情下にある波蘭の下層民が極端に貧困であるのは無理もないことであり、土地と資本の狀況に於いて波蘭に似て居る他の歐洲諸地方も國民の狀態に於いては又之れと相如くのである。

しかし公平に云へば歐洲の或國家に於いて見るやうに、未だ土地に十分餘裕があるのに資本や勞働需要が夙くも衰微するのは、國民の勤勞が特殊な他の方向に向けられた爲ではなくして秕政と社會組織とが農業勞働の十分公正な發達を阻害するからである。

波蘭は農業國の悲慘な一實例として常に指摘せられるが之れほど不公平なことはない。波蘭の貧困は國民の勞力が主として農業に向けられるからではなく、所有權の狀態が惡く、人民の奴隸的狀態のため、如何なる種類の產業に對しても何等奬勵が與へられて居らないといふことに起因するのである。土地は小作民が耕作するが、其の產物は全然雇主にとられる。全社會は主として是等奴隸民、貴族及び大地主から出來て居つて、農產物の剩餘を國內にて十分需要し消化すべき有產階級も存在しないし、又新資本を蓄積して勞働需要を增進せしむるの資力ある階級もない。かゝる慘膽たる情態下に在つては最上の救濟法は商工業を採用するの一事に在ること明である。何故なら之れに依つて始めて多數國民を奴隸狀態から開放し、產業と資本の蓄積に必要な刺戟を與へ得るからである。又若し波蘭國民が從來自由勤勉であり、土地が容易に分割讓渡せられたとすれば、かゝる國土のことであるから原料產物を賣つて外國製品を購買し、かくて實質的に將來未だ長く農業國たるを得たでもあらう。而してかゝる想像的狀態の下に於

いては現在とは全然異なつた進歩が見られ、人民の生活は何等進境を示さぬ歐洲諸國の住民よりは寧ろ米國民の狀態に類似することであらう。

實際米國は農業制度が公正に行はれつゝある唯一の近代的實例と見るべきである。歐洲各國竝に世界各地に於ける其の植民地に於いては封建時代の遺風から起つた妨害が未だに存在して土地に對する資本の投下を妨げて居る。是等妨害は農業を妨げ來つたが、さればといつて其の割に他の產業を助成したわけでもない。否事實は其れどころではない。商工業は農業に必要ではあるが、しかし農業は一層商工業にとつて重要なもので、廣義に於ける農業耕作の剩餘生產物は商工業の發達を測る尺度ともなり、又其の額は之れに制限を付するものでもある。全世界を通じて考へて見ると、商工業者、地主、文武官の全數は此の農業の剩餘生產物の額と精確に比例して居るものに相違なく、本然の性質上之れ以上に上ることが出來ないのである。若し土地といふものが始めから非常に瘦せて居るものであつて、地球全人口が之れが爲に勞作せねばならぬとすれば、製造工業家や怠惰者等は存在し得なかつたであらう。しかし地球と人間の最初の交渉は地球の任意の贈物といふ形に於いて始まつた。其れはあまり大したものではなかつたが、其れでも人が澤山の物を自分で收獲するに至る迄の間を支へるには十分であつた。然らば右の澤山を收獲する力は何ういふ形で與へられたかといふに其れは土地の性質といふ形式に於

いてであつた。卽ち土地の耕作に從事する人々が食ひ、着、住むに必要であるより以上の食物竝に衣住材料を產出し得る土地の生產力が之れであつた。而して此の土地の生產力こそは、土地に對する勞力の特質たるかの剩餘生產を生ぜしむる基礎たるものであるが、土地に及ぼす人間の勞力と智巧とが此の剩餘生產物を增加せしむればせしむるだけ益々多くの人々が時間の餘裕を發見し、こゝに始めて文明生活の花たる種々の發明に沒頭することが出來るやうになるのであり、他方に於いては是等發明に依つて利益を得んとの願望は、農業家をして剩餘生產物を益々多量ならしむるやう刺戟を與へ來つたのである。上述の願望は剩餘生產に適當の價値を與へ、之れが增加を促進せしむる上に殆ど絕對必要なものであるが、嚴密に事の前後から言へば剩餘生產があつて始めて此の願望が起るのである。何故なら發明家製作家は其の仕事を完成するに先立つて豫め食物を得なくてはならず、農業者が自分の消費量以上の食物を收穫せなかつたならば如何なる種類の產業だつて起りやうがないからである。

農業は上述の如く特別に生產的なものであるが、之れに付き單に一定數の地主が受ける正味の地代のみを顧るのは偏狹な見方である。發達せる社會に於いては此の地代なるものは此處に云ふ剩餘生產物の最著しい部分となつて居るのであるが、併し農業の初期未だ地代といふものが存在せぬ時代に於いては其れは高率な賃金竝に利潤といふ形で存在することもあり得るので

ある。例へば小麥の十五――二十クォーターに等しいだけの價値を一年間に收穫し得たとしても、子供が少く現品では僅に五六クォーターだけしか消費せぬといふ事もあるだらう。又高率利潤を得る農業資本の所有者でも食物竝に原料としては其の所得の一小部分だけしか消費しないといふ事もあるであらう。而して其の剩餘は賃金と利潤といふ形をとるにせよ、或は又地代といふ形式をとるにせよ、等しく皆土地からの剩餘生産と見て差支なく、其れは分量の多少に從つて一定數の人口に生活資料と衣住材料とを與へるのである。而して之れを與へられる人の中には肉體勞働をせずに生活して居る人もあるだらうし、又土地からとつた原料品を人間の慾望滿足に最適當な或物に變形させることを職業とする者も居るであらう。

或國家が主として農業國として考へるべきや否やといふことは剩餘農産物の一部を國内で消費せずして他國品と代へる方が其の國にとりて適切なりや否やに依つて定まるのである。而してかく原料品を外國加工品若くは或特殊の外國産物と交換することは、穀物を輸出するといふ一事を外にしては、如何なる點に於いても波蘭と相似ないやうな國家に對しても或期間だけは適當なることもあり得るのである。

だから一般住民の主要努力が土地に對して向けられ、引續き穀物を輸出する國家であつても其の特殊な國情如何に因つて大に豐な生活を送ることもあるし、或は又大に窮乏することもある。一般に云へばかゝる國家は不順な季節から起る食物不足といふ一時的弊害に惱まされることは少い。けれども農夫が常住的に得る食物の分量は、人口の增加を許さぬが如き程度のものであることもある。而して其の狀態が進歩的なりや、退歩的なりや、或は停滯的なりやといふ一事に至つては、國民の注意が主として農業に傾注せられるといふこと以外の他の原因に依つて決定するのである。

第九章　重商主義

商工業に勝れた國家は多くの他の國家から穀物を買ふことが出來る。だから一寸想像すると此の制度をやつて行けば對手農業國の土地が凡て耕作され盡すまでは漸次澤山の穀物を輸入し急速に增加する自國人口を維持することが出來るやうに考へられる。而して又對手國の土地が凡て耕作され盡すといふ時期は遠い將來の事に屬するから、從つて又此の商業國の人口は遠い未來迄食物を得ることの困難に因つて阻害せられるやうなことはないと想像されるかも知れない。

然し事實に於いては食物を得ることを困難ならしめる原因はかく遠い未來を待つことなく、周圍の國家に於ける食料收穫が未だ比較的に容易である時代に於いて常に作用するのである。

第一、專ら資本と熟練に賴る利益と、現在の特殊的商路とは其の性質上永久的であり得ないものである。例へば機械の改良といふやうな事を一地方に局限し置くことが如何に困難であるかは人の熟知する通りであるし、又資本を增加せしむることも個人並に國家の常に努力するところである。而して商路が屢々變更するものであるといふことは商業史の吾人に敎ふるところである。かういふ次第だから或一國が單に資本と熟練との御蔭で市場を壟斷するといふことはとても出來ないことである。卽ち若し有力な外國の競爭が起れば、此の國の輸出貨物は直ちに低落して本質的に利潤を減少せしめるし、利潤の減少は貯蓄の力と意志とを減殺するのである。かゝる場合には資本の蓄積は緩慢になり、勞働に對する需要は之れに比例して少くなり、終に停滯するに至るのである。而も此の間新競爭者は自分で原料品を產出するか、或は又他の利益に依つて、資本と人口とを增加しつつあるかも知れないのである。

第二、かりに有力な外國の競爭は隨分久しい間之れを排し得るとするも國內競爭は殆ど不可避的に同一の結果を生ずるのである。例へば一人で十人分の仕事をするやうな機械が發明せられたと假定すると此の所有者は初めは大いに儲けることが出來る。しかし發明品が一般に知れ渡ると澤山の資本と勞働が此の方面に投ぜられるから之れに依つて生產せられる貨物が急增し元の價額を以つてしては賣れなくなり、終に此の仕事に投ぜられる資本も勞働も前のやうに異常の利潤を收め得なくなるのである。だからかゝる製造工業の初期に於いて一人一日の勞働の結果が四五十人を支へ得るだけの食物と交換し得たとするも、後には十人を支へ得る程度の食物しか買はれなくなるかも知れない。

英國の綿布業は過去二十五箇年間に長足の進歩をしたが外國の競爭から大した影響を蒙らなかつた。綿布類の暴落は專ら國內競爭の結果であり、此の競爭は內外市場に供給過多を著しからしめたので、綿布業に使用せられる現在の資本は勞力の節約といふ點に於いて頗る大なる特殊利益を持つて居るに拘らず、一般利潤に於いては殆ど何等の利益を齎らさないことになつたのである。卽ち勝れた紡績機械を使用すれば一小兒若くは一少女でさへ從來多數の大人が爲し得たゞけの仕事をすることが出來るが、勞働者の賃金も雇主の利益も、機械を使用せず從つて勞力の節約が少しも行はれない他の職業以上、少しも出て居ないのである。

しかし他方から考へると英國全體は之れがために大なる利益を得て居るのである。全國民は勞力若くは金をあまり投ぜずして上等の衣服を着ることが出來たからで、之れは大なる永久的利益と考へなくてはならぬ。又一時綿布業に得た高い利潤は資本の大なる蓄積を可能ならしめ、從つて勞働の大需要を惹起したし、海外市場の擴張と內國市場に於ける新興の需要とはあらゆる種類の產物——農業の、植民地の、並に商工業の——に對して大なる需要を作り、利潤の低落を阻止したのである。

英國は其の地面廣く、豐富な植民地を持つて居る關係上、增加し行く資本を使用すべき範圍が十分であるから、利潤の一般的比率は一寸考へるやうに容易に又急激に其の蓄積に依つて減

少するやうなことはない。しかし吾々が今考慮しつゝある國、卽ち專ら工業に從事し、諸種の方面に活動し得ざる國家では、其の利潤の比率は資本の蓄積に依つてぢきに減少すべく、如何に巧妙な機械を以つてするも、其れが不斷に改良進步せられるのでなかつたならば、一定時期を經過せる後に於いては其の利潤の減退、賃銀の低下、而して又其の自然的結果たる人口增加に對する妨害を避けることが出來ないのである。

第三、工業の原料と住民の食物とを他國から購入しなくてはならない國家は、貿易對手國の富の增加と需要の膨張とに依つて自國の富と人口とを增加せしむるより外途がない。

工業國が食物と原料との產地たる農業國に倚賴するは、尙農業國が工業國に倚賴するが如くで、其の程度に相違はないといふ人がある。しかし之れは言葉を弄ぶものである。なる程土地に富源を有する國家は其の資本の大部分を農業に利用し、加工品を輸入することが明に有利である。卽ちかくすることに依つて農業國は其の勞力を最生產的に使用する譯であり、之れに依つて其の資本を急速に增加することが出來るのである。さればといつて其の附近の工業國が衰へるか或は他の原因に依つて加工品の輸入が著しく或は全然杜絕するとしても食物自給原料生產の農業國は必しも長く困らされないのである。なるほど一時は供給不足に困惑するであらう。しかし製造家や、職工は直きに出て來ることであらうし、又かなりの熟練を習得するであらう。